國學院大學学術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵　城一本『平家物語』翻刻 巻一～三

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野中, 哲照 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000703

國學院大學図書館所蔵 城一本『平家物語』翻刻　巻一～三

野中哲照

國學院大學図書館所蔵　城一本『平家物語』（以下、当該本）は、寛永五年（一六二八）刊の古活字本で、『平家物語』の諸本分類の中では、語り本系の中の八坂系五類に位置づけられている。八坂系五類に属するのは当該本のみなので、貴重な伝本である。通説では『平家物語』の語り本は一方系が先出で、八坂系は後出だとされている。しかし、その根拠は書写年代や刊行年代のみであり、内容に踏み込んだ検討がなされたわけではない。稿者の見るところでは八坂系の一部には一方系より古相を留めている伝本もある。『平家物語』研究でもっとも後れているのは八坂系諸本の研究であり、そこを切り拓くべく当該本の翻刻をここに提供することにした。

なお、当該本の書誌についてはすでに千明守「『平家物語』城一本の本文」（『屋代本平家物語とその周辺』、おうふう、二〇一三）に紹介されているので、ここでは割愛する。

平家物語巻第一目録

祇園しやうじや
てんじやうのやみうち
清盛せうじん　付かぶろ
わが身のゑいぐわ
ぎわう
二代のきさき
かくうちろん
清水ゑんしやう　付とうぐうだち
でんがののりあい
しゝのたに
うかわがつせん」　一オ
くはんだて
みこしふり
内裏ゑんしやう」　一ウ

平家物語巻第一

祇園しやうじや

祇園しやうじやのかねのこゑ、諸行むじやうのひゞき
有しやらさうじゆの花の色じやうしやひつすひの
ことはりをあらはすおごれる人も久しからずたゝ
春の夜の夢のごとしたけき者も終はほろびぬ偏に
風の前のちりにおなじとをくゐてうのせんせうを
とふらふに秦のちやうかうかんのわうまうりやう
のしういたうのろく山これらはみなきうしゆせん
くわうの政にもしたがはすたのしみを極て天下の
みだれん事をもさとらずいさめをもおもひ入ず
みんかんのうれうる所をもしらざりしかば久から」二オ
ずしてばうじにし者也ちかく本朝をうかがうに
せうへいのまさかど天慶のすみともかうわの義親
平治のしんらいこれらはみなおごれる事もたけ
きこゝろもとり〳〵なりしかともまぢかくは前の

太政大臣平の朝臣清盛公と申し人のあり様を
つたへ承るこそ心もことはも及ばれね其せんぞを
たづぬるにくはんむ天皇第五の皇子一ぼん式部卿
かづらはらの親王九代のこうゐん讃岐守まさもり
がまご刑部卿忠盛の朝臣のちやくなん也彼親王の
御子たかみの皇はむくはんむゐにしてうせ給ひぬ
其御子たかもちのわうの時より始て平のしやうを
給はつて上総守に成給ひしよりこのかたたちまち」二ウ

に皇氏を出て、久敷人臣につらなる其御子ちんしゅ
ふの将軍義茂後にはひたちの大承国かとあらたむ
国かよりさたもりこれひらまさのりまさひらまさ
もりに至るまで六代は諸国のしゆりやうたりと
いへともいまだ殿上のせんせきをはゆるされす

てんじやうのやみうち

しかるを忠盛いまだ備前の守たりし時、鳥羽院の
御くわんとくぢやうじゆ院をさうしんして三十
三間の御だうをたて一千一体の御ほとけをすへ

奉るくやうは天承元年三月十三日なり忠盛けん
しやうにはけつこくを給ふべきよし仰せくたされ
ける折節但馬の国の明たりけるをそ給はりける上」三オ

くわうなをゑいかんにたへすしてうちのせうでん
をそゆるされける忠盛とし三十六にして始てせ
でんす雲の上人是をそねみいきとをおつておなじ
き十一月廿三日五せつとよのあかりのせちへの夜
忠盛を殿上にしてやみうちにせんとぞきせられ
ける忠盛此ことをほの聞て我右筆の身にあらず
ふゆうのいゑに生れてふりよのはちにあはん
事家の為身のため心うかるべしせんする所身を
まつたうして君につかへよといふ本文有とてかね
て其用意をいたす参内のはじめよりいくわんの下
に大きなるさやまきをしどけなげにさしつゝ火の
ほのくらきかたにむかひやはら彼かたなをぬき」三ウ

いだしびんにひきあてひきあてし給ひけるがよ

そよりはこほりなんとのやうにそみえし諸人目
をすます又忠盛のらうどうにもとは一門たりし
むくのかみ平のさだみつがまご新の三郎大夫いゑ
ふさが子左兵衛の尉いゑさだと申者ありとくさの
かりぎぬの下にもよきのはらまきをきゑふの太刀
わきはさんで殿上の小庭に畏てそ候ひけるくわん
しゆ以下あやしみをなして六位をもつていはせ
けるはうつぼはしらよりうちすくのつなのへんに
ほういの者の候は何ものそ狼籍なりまかり出よと
いはせけれはいへさた申けるは是はさうでんの
主備前のかみ殿の今夜是にてやみうちにせられ」四オ

給ふべきよしをつたへ承つてならんやうを見ん
とてかくてさふらへはゑえこそまかりいつまじけれ
とてなをかしこまつてそ候らひけるこれらをよし
なしとや思はれけんその夜のやみうちなかりけり
忠盛御前のめしにつゐてまはれけるに人々
ひやうしをかへて伊勢平氏はすがめなりけりとそ

はやされける此人忝もかしははらの天皇の御すへ
にてはおはしけれ共まぢかくはむげにくだつて
くはんどもあさうみやこのすまゐもうと〳〵しく
伊賀伊勢にのみ住国ふかき人にておはしけれは彼
国のうつはものにたとへていせへいじとははや
されけり其上忠盛のかた目のすこしすがまれたり」四ウ

けれはか様にははやされけり忠盛いかにすべき
やうもなふていまだ御ゆうもをはらぬさきに
御前をまかり出られけるにいかゞは思はれけんよ
こたへさゝれつるかたなをはししんでんの御侍
にしてかたへの殿上人の見られける所にてとのも
つかさにあづけをきてそ出られけるいゑさだ待
うけ奉つてさていかに候と申忠盛この事あり
のまゝにいひつる程ならは殿上までときりのほ
らん者のつらたましいなりけれは今はべつの事
なしとてひきぐしてそ出られける五せつにはしろ
うすやうこぜんじのかみまきあけのふでともゑか

いたるふでのぢくなんとかやうにさま〳〵おも」五オ
しろき事をのみこそうたひはやされしにな
かごろ大さいのごんのそつすへ仲のきやうと申
す人おはしけりあまりにいろのくろかりければ
人こくそつとぞ申けるこの人のいまだ蔵人のとう
たりし時御前のめしにつゐてまわれたるに人々
ひやうしをかへてあなくろ〳〵くろきとうかな
いかなる人のうるしぬりけんとそはやされける
又花山の院の前の太政大臣たゞまさこう十歳のと
き父中納言たゞむねのきやうにおくれたまひて
みなし子にておわせしを故中の御門藤中納言か
せいのきやう其時はいまだ播磨のかみにておはし
けるかむこに取てはなやかにもてなされければ」五ウ
これも五せつに播磨よねはとくさかむくのはか人
のきらをみかくはとぞはやされける上古にはか様
の事共ありしか共いまだ事いてこず末代いかゞ
あらんすらんおぼつかなしとそ人申けるあんの
ごとく五せつはてにしかば殿上には公卿せんぎ有
それゆうけんをたひしてこうゑんにつらなり
ひやうぢやうを給はつてきうちうを出入する事
これきやくしきのれいをまほるりんめいよしある
せんきたり然るを忠盛さうでんのらうじうをほう
いのつわものとかうしてんしやうのこにわにめし
おき其身はこしのかたなをよこたへさいてせちえ
の座につらなる両条きたいいまだ聞さる狼藉なり」六オ
事すでにてうでうせりざいくわもつとものかれ
かたしはやくみふだをけづつてけつくはんちやう
におこなはるべきかとをの〳〵うつたへ申され
たりけれは上皇大きにおどろきおほしめしていそき
忠盛をまして御たづねありければ忠盛かしこまつ
て申されけるはまづ郎等小庭にしこうの事忠盛
かくご仕らず但きんじつ人々あいたくまるる子細
あるかのあひださうてんのらうじうことをつたへ

承つて主のはぢをたすけんが為に忠盛にはしらせ
すしてひそかにさんこうの条力及さる次第也なを
其とがあるべくは其身をめししんずべき身かつきに
かたなのことはとのもづかさにあづけおきおわん」六ウ

ぬ彼かたなをめし出し刀のじつふにまかせてとが
の左右あるべきかと申されたりけれは上皇此儀
もつともとてかのかたなをめしいだしてゑいらん
あるに上はさやまきのくろうぬったりけるが中
は木刀にぎんばくをそをしたりけるたうざのち
じよくをのがれんがためにこしのかたなをたい
するよしあらはすといへとも後日のそせうを存知
して木刀をたいしける用意の程こそしんべうなれ
次に郎従小にわにしこうの事かつうは武士の
らうじうのならひなりされば忠盛がとがにはあら
ずとてかへつてゑいかんにあつかつしうへは
あへてざいくわの沙汰はなかりけり」七オ

清盛せうじん

其子共諸衛の佐をへてせうでんせしに人殿上の
まじはりをきらふに及はすある時忠盛明石のうら
の月見んとてはりまへ下向せられたりけるが程
なふかへりのほられたり上皇めしてあかしのうら
の月はいかにとゝはせ給へは忠盛

有明の月をあかしのうら風に
なみはかりこそよるとみえしが

と申されたりければしやうくはう大きにぎよかん
あつてやがてこのうたをばきんようしうにそいれ
られたる又忠盛のせんとうにかよふてあそばれ
ける女房のもとにみなくれなゐのあふぎのつまに」七ウ

月いだしたりけるを取わすれて出られければ方
への女房たちあれはいつくよりの月かげぞや出所
おほつかなしなんとたわふれあはれけれは此女房

くも井より忠盛来る月なれは
おほろけにてはいはしとぞ思ふ

にるをともとかやの忠盛のすかれたりけれはこの女
ばうもゆふなり忠のりのはゝ是也けりかくて忠盛
仁平三年正月十五日とし五十八にてうせた
まふ清盛ちやくなんたるに依て其あとをつく保元
元年七月に主上上皇御国あらそひのありし
時清盛主上の味方にさうらひてくんこうあり次の
とし播磨の守にうつつておなじき三年にださい」八オ

の大貳になる又平治元年十二月にのふより
よしともがむほんの時も清盛御味方に候てくん
こうありくんこうひとつにあらずおんしやうこれ
なををもかるべしとてやがて正三位して打つゝき
宰相ようのかみ検非違使のべつとう中納言大納言
にへあかりあまつさへせうじやうの位に至る内
大臣より左右をへす太政大臣従一位にあがり給ひ
けり大将にあらねどもひやうぢやうを給はつて
すいじんをめしくすれんじやにのつてきうちう
を出入事偏にしつせいのしんにおなじ大政大臣

は一じんにしはんとして四かいにぎかひせりみち
をろんじ國をおさめゐんやうをやはらげ給へり」八ウ

其人にあらずんばすなわちかけよといへりされば
そくけつのくわん共名付られたり清盛其人にはあら
ね共一天四かひをたなこゝろにきり給ひし上
は人とかう申すに及はす平家か様にはんじやう
せられけるは熊野ごんげんの御りしやうとぞ聞え
しそのゆへは清盛のそのかみ未あきのかみたりし
時伊勢のかみよりふねにて熊野へまいられけるに
大きなるすゞきの舟中へおどり入けるをせんだつ
是は目出度御事なりいそき参るへしと申しけれは
清盛のたまひけるはしうのぶわうのふねにこそ
はくきよはをとり入つたんなれ是吉事なりとて
さはかり十かひをたもちしやうじんけつさいの道」九オ

なれ共てうみして我身もちひ家の子侍共にもくわ
せられけり其ゆへにやきちじのみうちつゝひて

太政大臣まできはめ給へりしそんのくはんども
れうのくもにのぼるよりはなをすみやか也九代の
せんせうをこへ給ふこそめてたけれ

付かぶろ

かくて清盛公とし五十一と申し仁安三年
十一月十一日やまいにおかされぞんめいのため
に出家入道してほうみやうじやうかいとぞ名乗
られける其しるしにやしゆくひやうたちところに
いへて天めいをまつたうす人のしたがひ付奉る叉
はふく風の草木をなひかすがごとし世のあまねく」九ウ

あふけることもふる雨のこくどをうるほすにこと
ならす六波羅殿の一家のきんだちとだにも云てん
しかばくわそくもゑいゆうもおもてをむかひかた
をならふる人なし入道のこじうと平大納言時忠の
卿の一門たらさらん人はみなにんひにんたるべし
とそのたまひけるさればいかにもして此けんゆ
かりにむすほをれんとそしけるゑもんのかきやう

ゑぼしのためやうに至るまで何事もみな六波羅
やうとたにいひてんしかば一天四かいこれをそ
まなひけるいかなるけんわうせいしゆの御まつり
ごと攝政くはんばくの御せいばいをも何となく世
にあまされたる者のそしりかたふけ申事はつね」一〇オ

のならひなれ共此ぜんもん世ざかりの間はいさゝか
いるかせに申者なし其ゆへは入道のはかりこと
に十四五六のわらんべを三百余人めしあつめかみ
をかぶろにきりまはしあかきひたゝれをきせかぶ
ろと名付てめしつかはれけるが京白河にみち〳〵
てわうはんしけり平家のことをいさゝかもあし
さまに申者あれば一人聞出ださんほどこそありけれ
よたうにふれめぐり其家にらんにうしてしざい
さうくをついふくし其やつをからめとつて六波羅
へぐして参る入道うけとらせそくじにうしな
はれけりさればめに見こゝろにしるといへとも
ことはにあらはして申ものなしみちをすぐる」一〇ウ

馬くるまも六波羅殿のかぶろとだにもいひてんし
かばみなよけてこそとおしけれきうもんを出入す
といへともしやうみやうをたづねらるゝにをよ
はすけいしのちやうりこれがためにめをそばむ
ともみえたりある人の申けるはたとひ京中のみ
みきゝの為にめしつかわるゝといふともふつうの
わらんべにてもあれかしなんそかぶろをそろへら
るゝ事はいかさま子細あるにやと申ければ九
條の相國の宣ひけるはいこくにもかゝるためしの
あるそとよとかんの世のころがわうまうといふけん
さいのものあり位をむささふらんがために様〳〵
のはかりことをめぐらすかいへんに出てかめを」一一オ

いくせんばんといふかずをしらずとりあつめて其
こうにすぐるゝと云文字を書てうら〳〵にはなつ
又あかがねの人馬をつくつて竹のふしをとをして
いるる事きんこくのちくりんにおほしさて七月
のくわいにんの女を三百人めしあつめてしゆしや
をせんじてこれをのます月みちて生る子みなあ
かくしておにのことしかのあかきわらんべを人
にしらせすしんざんにこめてそたてつやうやく
せいじんするほどにさうかを作つておしゆかめの
こうにせうのじありこれはわうまう天下をおさむ
べきゆへ也又たけのふしの中にあかがねのしん
ばありこれもわうまう帝位に付べきゆへなりと」一一ウ

云ふくめて十四五はかりの時かみをかたのまはり
に切まはして都へ出すかれらひやうしを打て三百人
同音にかの哥をうたふされば此わらんべをきん中
にめすさきのことくにひやうしを打てくだんの哥を
うたひてていじやうをまはりのそみけれはすこぶ
るゑいらんあつて是をあやしますといふ事なし
公卿せんぎあつてさうかのじつふをたゝさんが為
にうら〳〵のあま人に仰てかめをおほくめしよせ
られける中にこうに勝の字を書たるかめあまた
あり近國のちくりんをたつねさせられけるにふし

の中よりあるがねの人馬おほくとりいたせり御門
此事をおどろきおほしめしていそぎ御位をさつて」一二オ

わうまうにさつけ給へりかくてわうまう天下をぢ
する事三ケ年といへりされば入道相国も是を
へうして三百人の本とするにこそ帝位をも心に
かけて有やらんしりかたしとぞ宣ひけり

我身のゑいぐわ

入道相国は我身のゑいくわを極るのみならす一門
ともにはんじやうしてちやくし重盛内大臣の
左大将次なん宗盛中納言の右大将三なん知盛三位
の中将四なんしげひら蔵人のとうちやくそんこれ
盛四位の少将をよそ一門の公卿十六人殿上人三十
余人其外諸国のじゆりやうよふしよし都合六十余
人也世には又人なくそみえられけるむかし奈良の」一二ウ

御門の御時じんき五年に朝家に近衛の大将をはじ
めおき給ひしよりこのかた兄弟左右に相ならび
給ふ事わづかに三四ヶ度なりもんとく天皇の御
時は左によしふさ内大臣の左大将右によしあふ
大納言の右大将これはかんゐんの左大臣ふゆつき
の御子なりしゆしやくゐんの御時は左にさね
より小野の宮殿右にもろすけ九条殿ていしん公の
御子なりごれんぜんゐんの御時は左にのりみち
大貳条殿右によりむねほり川殿御だうのくわんばく
の御子なり二条の院の御ときは左にもとふさ松殿
みぎにかねさね月のわどの法性寺殿の御子なり
是みなせうろくのしんの御子息はんじんにおゐて」一三オ

はそのれいなし日比は殿上のまじわりをだにも
きらはれ給ひし人のしそんのいまはさんじきざつ
はうをゆりれうらきんしうを身にまとひあまつ
さへ大臣の大将にいたつてきやうだい左右にあひ
ならび給ふ事末代とは申ながらふしぎなりし
事ともなり又御むすめも八人まし〳〵けりそれ
もみなとり〳〵にさいわひ給ふ一人はさくら町

の中納言しげのりのきやうに八歳より御やくそく
ありしが平治のらんにひきちがへ奉て後には
花山の院の左大じんどのゝみだいはん所にならせ
給ふそのきんだちあまたまし〳〵けりそも〳〵この
しげのりのきやうをさくらまちの中納言と申支は」一三ウ

すくれて心すいておほしけるあひたつねは吉野の
山をこひつゝ町にさくらをうへならべその内に
屋をつくつてすまれけれは来る年の春ごとに
見る人さくらまちとぞ申けるさくらはさいて七
ケ日にちる中納言花の名殘をおしみ給ひてつねは
あまてる御神にいのり申されければ三七日
までなごりありけり君もけんわうにてましませは
しんもしんとくをかゝやかし花も心有ければにや
久しくよわひをたもちけり一人はきさきにたゝ
せ給ひ王子御誕生あつて皇太子にたち位につかせ
給ひしかはゐんがうかうむらせ給てけんれい門院
とそ申ける天下のこくもにてましませはとかう」一四オ

申すに及はす一人は六条の摂政殿の北のまん所
にならせ給ふ是は高くらの院御ざいゐの御とき御
はゝしろとて三后にすならふ御せんじをかうむ
らせ給ひて白川殿と申て世にわ又おもき人にて
そまし〳〵ける一人はれんぜんの大納言りうはう
のきやうの北の方一人はふげんじ殿の北のまん所
にならせ給ふ一人は七条のしゆりの大夫のぶたか
の卿にあひぐし給へり一人は後しら川の法皇へ
まいらせ給ひて偏に女御のやうにてそまし〳〵
ける是はあきの國いつく嶋の内侍がはらの御むす
め也又九条の院のざうしときはかはらにもひめ君
一所まし〳〵けり是は後には御あね花山の院殿へ」一四ウ

まいらせ給て上らう女房にてらうの御方とぞ申
ける日本あきつしまはわづかに六十六ケ國平家
知行の國三十余ケ國すでにはん國に及へり其外
しやうゐんでんばくいくらといふ数をしらすきら
じうまんしてたうじやうはなのごとしけんきくん

じゆして門前いちをなすやうしうの金けいしうの
玉ごきんのあやしよくかうのにしき七ぢん万宝一
としてかけたる事そなかりけるかだうぶがくの
もとひぎよれうしやくばのもてあそび物おそらく
はていけつもせんとうも是には過しとそみえし

ぎわう

むかしは源平両家朝家にめしつかへてわうくわ」一五オ

にもしたがはすてうけんをかろんするものあれは
たがひにいましめをくはへられしかば代のみたれ
もなかりしに保元に為義切れ平治に義朝ちう
せられしのちはすゑぐの源氏ありといへとも
あるひは流されあるひはちうせられしかば一かう
平家の一るいのみはんじやうしてかしらをさし
出す者もなしされば末の代に何事かあらんとそ
みえし加様に入道相國一天四かいをたなごゝろに
にきり給ひしうへは世のそしりをもはゝからず人
のあざけりをもかへり見ずふしぎの事をのみし

給ひけりたとへばそのころ京中に聞えたるしら
ひやうしぎわうぎによとておとゝひありとぢと申す」一五ウ

しらひやうしのむすめなり中にも入道あねの
ぎわうをさいあひして西八条の宿所にとりすへ
てそおかれたるかゝりければいもをとのぎによ
をも人おもんしてもてなす事かぎりなし母の
とぢをも入道大事の物にし給ひて能家作つてとら
せまい月ついたちことに百こく百くはんをくるま
にて送られけれは家の内もふつきしてたのしひ
叟はかきりなしかかりけれは京中のしらひやうし
共ぎわうがさいあひをうらやむ者もあり又そねむ
ものもおほかりけりうらやむものはあな目出度の
きわう御前のさいわひやおなじあそびものとなら
はもつともかくこそあらまほしけれいかさまにも」一六オ

これは義といふ文字を名につきてかくはめてたき
やらんいさやわれらもつきてみんとてあるひは義

一とつく者もありあるひはき二と付ものもありき
とくきふくきしゆきほうなんとつきけりそねむ者
は何条名によりもんじにはよるべきもんじに
よらんにはたれかはおとるべきくわほうはたゝ
生かかりにてこそあれとてつかぬものもおほかり
けりそも〳〵我朝にしらひやうしのはじまりける事
は鳥羽院の御時嶋の千歳和哥若の前とてかれら二人
がまひはじめたりけるとかやはじめはすいかんに
立ゑぼし白きさやまきをさしてまひけれはおとこ
まひと名つけられたりしを中ころより刀ゑほしを」一六ウ

のけられてしろきすいかんはかりにてまひけれは
しらひやうしとは名つけられけりかくてぎわうとり
すへられまいらせて三とせと申し春のころ又仏
と申てゆうなるあそびもの一人出来にけり是は
加賀の国の者とそ聞えし其比の京中の上下むかし
よりおほくのあそびものありつれともかやうの者
はいまだなしとてこぞつてこれをそもてなしける

ある時仏御前申けるはわれ天下にかくれなしと
いへともたうじときめき給ふ平家太政入道殿へ
めされぬ事こそほひなけれあそび者のすいさん
はなにかはくるしかるべきとてある時くるまに乗
て西八条殿へぞ参りたる人参つてほとけと申て」一七オ

ゆうなるあそひものゝまいりて候と申たりけれは
何条さやうのあそひものは人のめしにつゐてにて
まいる事にてはあれめしもなき所へすいさん然
へからす其上ぎわうがあらんかぎりは神ともいへ
ほとけともいへとう〳〵まかり出よといへとのた
まふほとけすげなふ仰をかうむつてはる〳〵と出
たりけるをきわう御前申けるはあそひものゝすい
さんはつねのならひ年もいまだおさなしとこそ
承りさふらへたま〳〵思ひたちて参てさふらふ
にすげなふ仰をかうむつていかはかりかはづか
しうかたはらいたくもさふらふらんわかたてし
道なれは人の上共おほえすたとひまひを御らんし」一七ウ

哥をこそきこしめさす共めされて御たいめんあつて
かへさせおはしまさんはありがたき御なさけにて
こそさふらはんすれ只めさるへしと申たりけれは
入道さらばよべとてよひかへさせ出あひたいめん
し給ひていかに仏けふの見参はいかにもあるまじ
かりつれ共ぎわうが何とおもふてやらんしきりに
申あひだめしたるなり加様にたいめんして
こゑをきかさらんは無念なるへし何事にても今
やう一うたへかしとのたまへばほとけ承つていま
やうひとつぞうたふたる君をはじめて見るときは
千世もへぬべしひめ小松御まへのいけなるかめ
おかにつるこそむれゐてあそふめれとこれを二三二一八オ

べんうたひすましたりけれはみな人かんじあはれ
けり入道相国もおもしろけにおもひ給ひてわうわ
御前いまやうは上手にてありけるやいまやうがお
もしろければまひもさだめておもしろかるらん何事
にても一ばんさふらははやつゝみうちめせとてめ
されて一ばんまはせらるをよそ此仏御せん年は
十六なり見めかたちならびなくかみのかゝりまひ
すがたこゑよくふしもじやうずなれはなしかは
まひもそんすへき心も及はすそまふたりけるけん
もんの人々みなじほくをおとろかさすといふ事
なし入道まひにやめて給ひけん仏に心をそうつ
されけるほとけ御ぜん申けるはわらはもとより一八ウ

すいさんのものにてすけなふ仰をかうむつてはる
〳〵と出さふらひしをもぎわう御前の申状に依て
こそめされまいらせてさふらへおほしめしわすれぬ
御事ならはめされて又は参りさふらふ共けふは
只いとまをたふていたさせおはしませと申けれは
入道すべてくるしかるましたゞともかくもじやう
かいがまゝそとよたゞしぎわうにはゞかるか其
儀ならはぎわうをこそいたさめとのたまへは仏御
前それ又心うてさふらふべしわらはもろともに
めしおかれ参らせんだにもいかばかりはつかしう

かたはらいたくもさふらふべきにましてさやうに
きわう御ぜんをいださせおはしまさんはいよ〳〵心」一九オ
うかるへしと申けれとも入道ぜひをもいはせずき
わうとう〳〵まかりいてよとの使しきなみに三度
までたちけれはきわうすこしもやすらふべきに
あらすとてすむかたのちりひろはせはきのこひ見
くるしき物どもとりしたゝめてすでに出べきにそ
さだまりける日比よりかゝるべしとはおもひまふ
けし事なれともさすがきのふけふとはおほえす
此みとせがあひた住なれしやうじのうちを出る
にそ名殘もおしくかなしくてかひなきなみだそ流
けるきわう出けるがさるにてもとて又立歸りすみ
なれしやうじにかうそ書付ける
　もえいづもかるゝもおなじ野辺の草　」一九ウ
いづれか秋にあはてはつべき
ぎわうくるまにのりて出けるがしきりになみだ
のすゝみければ
今さらに行べきかたもおほえぬに
何となみたのさきにたつらん
とゑいじつゝ宿所に歸りしやうじのうちにたおれ
ふしなくよりほかの事そなき母これをあやしみ
ていかにやいかにとゝひけれども返事をするに
及はすぐしたる女にたつねてそさる事ありとは
しりてけるかゝりけれは京中の上下あわやぎわう
こそ西八條殿よりいとまたふていたされたんなれ
いさや見參してあそはんとてあるひは文をつか」二〇オ
はす人も有あるひは使者をつかはす者も有けれ共
きわういまさら人にげんざんしてあそびたはふる
べきにあらずとて文をとりあげ見るにをよはねは
ましてつかひをあひしらふまでの叟はなかりけり
かくて其年もくれ春のころにもなりしかば入道
きわうがもとへ使者をたてゝいかにきわう其後は
何事かありし仏があまりにつれ〳〵げなるに

參りてまひをもまひいまやうをもうたふて仏なく
さめよとのたまひつかはされたりけれはきわうあ
まりの心うさに返事にもをよはす入道かさねて
宣ひける是いかにきわうなどへんじをば申さぬそ
まいりまじきかまいるましくは其やうをすみやか」二〇ウ

に申せ聞きつてはからふむねありとぞの給ひ
けるはゝのとぢあれほどの仰なるになと御返事
をは申さぬそぎわうまいらんと思ふ道ならはこそ
やがて參るとも申さめまいらざらんものゆへに
なにとか御返事をは申べきめすにまいらずははか
らふむねありとの給ふは都のうちをいたさるゝか
さらずはいのちをめさるゝか是二つにはよも〔過〕(フセンメイ)し
たとひみやこのうちをいたさるともいつくか終の
すみかなるたとひいのちをうしなはるゝともおし
かるべきいのちかは一度うき物に思はれまいらせ
てふたゝひおもてをむかふべきにあらすとてなを
へんたうにも及はす母かさねて申けるはなんによの」二一オ

ゑんしゆくせいまにはじめぬ事そかし千年万年
とちぎれともやがてはなるゝ中もありたゞかり
そめと思へともながらへはつるなかもありたゞ世
にさだめなきはなんによのなからへ也すでにわご
ぜたちはあそび者の身なれは一日二日めしおかれ
まいらせんだにもいかはかりか有かたふさふらふ
べきにまして此みとせが間めしおかれまいらせぬ
れは今生の思出何事かこれにすくべきめすに參
らずははからふむね有とのたまふは都の内をこそ
出されすらめいのちをめさるゝまでの事はよも
あらしたとひみやこのうちを出さるゝともわ御前
たちはわかけれはいつくのうらは岩木のはさまに」二一ウ

てもすぐさん事はやすかるべしわらはかとし老
おとろへたる身のならはぬひなのすまゐをかねて
おもふこそかなしけれたゞわらはをみやこのうち
にてすみはてさせんとおもひ給へそれこそ何にも
すくれたる今生後生のけうやうにてあるべけれと

なみたもせきあへす申たりけれはぎわうさらは
參るにてこそあれとてなく〳〵たち出けりひとり參
らんも物うければとていもおとの義女をもぐし
けりおなじやうなるしらひやうし二人そうして四人
ひとつくるまにとりのりて西八條殿へそ參りたる
入道日比めされしところよりはるかにさがりたる
所に座敷してこそおかれたれ義王こは何事の」二二オ

とがぞやはてはさしきをさへさけられつる事の
心うさよこれにつけてもなにしにかまいりけん
と思ふにけしきを人にみえしとおそふる袖の
したよりもあまりてなみだそなかれける仏御前ひ
ころめされぬところにてもさふらはすたゞこれへ
めさるべしさらすは出てげんざんせんと申けれ
とも入道なんでうとてゆるされざりけれはちから
をよはす其後入道出あひたいめんし給ひていかに
きわう其後はなに事かありし仏かあまりつれ
〳〵げなるになにごとにてもいまやう一うたへ

かしとのたまへはきわうまいる程にてはたゞとも
かうも入道殿の仰にこそとおもひければおつる」二二ウ

なみだをおさへていまやうひとつそうたふたる月
ふけ風おさまりて後こゝろのおくをたつぬれは仏
もむかしはぼんぶなりわれらも思へはほとけなり
いつれも仏性ぐせる身をへたつるのみにておろか
なれとこれを二三べんうたひすましたりけれは
みな人あはれをそもよほしける入道相国いしうも
うたふたりやがてまひをも見るべけれともいさゝか
まきるゝ事出来たり此のちはめさすともつねは
參つてまひをもまひいまやうをもうたふて仏なく
さめよゑいとぞのたまひけるぎわう宿所に歸り
しやうじのうちにたおれふしなくより外の事そ
なきおやのめいをそむかしとふたゝびうきみちに」二三オ

おもむきはては座敷をさへさけられつる事の心
うさよなをもうき世にながらへてあるならば重て

かくうき事をこそ見きかんずらめかゝるつゐてに
火の中水のそこへも入なばやとそかなしみける
あね身をなげばいもおとのきによもともにみを
なげんといふ母のとぢうらむるもことはり也日比
はこれほどまでなさけなかりける人とは露おもひ
よらずしてとかうけうくんしてまいらせつる事
の心うさよあねみをなげはいもおとの義女もとも
に身をなげんといふにわらはが年老おとろへ
たるみの一人殘りとゞまつて何にかはせんともに
身をこそなけんずらめただししごも来らぬおや」二三ウ

に身をなげさせんは五きやくざいにてもやあらん
すらんみだ如来は西方じやうどをしやうごんし一
ねん十ねんおもきらはす十あく五ぎやくさいをも
みちびかんといふひぐはんましますなる四十八の
せいくはんの中に第三十五のくはんには我等か
やうにぐちもんまうなる者をみちびかんといふひ
くわんましますなり我等このたびおもひてある事

もなふてふたゝび三づにしつみなば又いつの世
にかはうかふべきかほとめてたきみやうがうにす
かつてこくらくしやうどのふたひのほうとにまい
らんとはおもひたまますやとなみだもせきあへす
申たりけれはぎわうまことにしごもきたらぬおやに」二四オ

身をなけさせんは五きやくさいうたがひあらすと
ても身をなげん事をばおもひとまり廿一にてさま
かへけりいもおとの義女もともにと契りし事
なれは十九にてさまかへけり母のとぢあれ程に
さかりなるふたりのむすめのさまをかふる世の中
にわらはが年老おとろへたる身のしらがをつけ
ても何にかはせんとて四十五にてさまかへけり三
人さがのおくなる山里にねんぶつ申てわうしやう
けつちやうりんじう正ねんこそいのりけるかくて
春すぎ夏たけぬ秋のはつ風たちぬればほしあひの
そらをながめつゝあまのと渡る梶のはに思ふ事
かくころなれや物思はさらん人だにも暮行秋の」二四ウ

ゆふべはかなしかるべしいわんや物おもふ人の心
のうちおしはかられてあはれなり西の山のはに
かゝる日をみてはあれこそ西方のじやうどにてあん
なれいつかわれらも彼ところに生れて物をおも
はで過ごさんすらんこれにつけてもむかしの事
の忘られでつきせぬものはなみた也日もやう〳〵
くれければ三人の者ともひとつ所にさしつとひ
仏前に花かうそなへともしびかすかにかゝげつゝ
ねんぶつしてゐたるところにとぢふさきたる竹の
あみどをほと〳〵とたゝく音しけり三人のもの共
ねんふつをとゞめていか様是は我等がやうにぐち
もんまうなる者のねんふつしてゐたるをさまた」二五オ

げんとてまゑんの来れるにこそたゞしまゑん
ならばあれ程のたけのあみとをおしあけていらん
事はやすかるへしたゞすみやかにあけたらん
ほどにたすけば一ふつたとひいのちをうしなは
るゝとも此程たのみたるねん仏あひかまへておこ
たるなと心にこゝろをいましめて三人手に手を
取くみとぢふさひたるたけのあみとを思ひきつて
あけたれはまゑんにてはなかりけりほとけ御前そ
出来るぎわうはしり出仏がたもとにとりつゐて
こはさらにうつゝともおほえさふらはぬものかな
ひるだにも人目まれなる山里へたゞいま何として
来り給へるそといひければほとけごぜんいまさら」二五ウ

申せは事新しきにゝたり申さねは又思はぬに
にたれははじめより申すそよわらはもとすいさん
の者にてすげなふおほせをかうむつてはるぐと
出さふらひしをわごぜの申状によつてこそめされ
まいらせてさふらへやかてわごぜのいたされたま
ひし事かならす人のうへともおほえすいつか又
我身のうへにてあらんすらんとおもひしにあわ
せてしやうじにいづれか秋にあわではつべきと
書おき給ひし筆のあとやがておもひしられてこそ
さふらひしがいつぞや又わこせのめされまいらせ

ていまやううたひ給ひし時座敷をさへさけられ
給ひし事の心うさ申はかりもさふらはす其後は」二六オ

いつくにともうけたまはらざりしが此ほどきゝ
出してうらやましき事に思ひまいらせいかに
いとまを申せとも大かたゆるされまいらする叉も
さふらはすつく〳〵物をあんするにしやばのゑい
ぐわはゆめの夢たのしみさかへも何かせん人身は
うけがたくふつきやうには又あひかたし出るいき
入をまたずかげろふいなつまよりもなをあやうし
加様の事を思ふにもいとゝ心のとゞまらすして
此ひる思ひもかけぬひまのありつるに逃出てかく
成てこそ參りたれとてかつきたるきぬをうちのけ
たるを見ければさしもはなやかなりしゑいくわの
たもとをひきかへてあまになりてそ出来る日比の」二六ウ

とがは是にゆるし給へゆるさんとの給はゝお
なしあんしつにねんぶつ申てともに後生をいのる
べしなをゆるさしとのたまはゝ是よりいつくへも
あしにまかせてまよひゆき岩のかとこけのむしろ
松のねにたをれふすまでもねんふつ申てみた
三尊のらいかうにあつからんとなみだもせきあへ
す申たりけれは義王あなはづかしのわごぜの心
のそこのいさきよさよ日比はこれ程まで思ひ給ふ
人とはいかてか露ほともしるべき何事もうき世の
中のさかなれはかならず人をうらみと思ふべか
らず身のうき事をこそしるべきにやゝもすれは
わごぜの事のみ忘られでかた心にかゝつて今生」二七オ

も後しやうも中々にしそんじたるやうにおほえ
てやるかたもなかりつるにわこせは何事おも思ひ
給はす年も未十七とこそきくにゑどをばいとひ
じやうどをねかふべしとの心こそまことの道心者
にてはおはしませわらはが廿一にてさまかへし
をこそ人もありがたきことに申身ながらもふしぎ
の事に思ひしにいまわこせの出家にくらぶれは

ことの数にてあらざりけり日比のとかはなにし
にかつゆほども殘るべきいさやさらばおこなはん
とて四人おなしあんしつにねん仏申てともに
こしやうをいのりけるがちそくこそありけれとも
終はわうじやうのそくわいをとげけるとぞ聞えし」二七ウ

さる程に入道仏をうしなふててんてをわかつて
たづねさせられけれどもなかりけれはじやうかい
か仏はあまりに見めよかりつれはてんぐがとり
たるにこそとそのたまひける其後ほどへてきゝ出
されたりけれともさやうになりたらんするもの
をばとてたつねさせられずされば後白川の法皇の
ちやうがうだうのくわこちやうにもぎわうぎによ
とぢ仏等かそんりやうと一所にいれられけるとそ
承るあはれなりし事ともなり

二代のきさき

鳥羽院御あんかの後はひやうかくうちつゝひて死
さいるけいけつくはんちやうにんつねにおこな」二八オ

はれてかいだいもしつかならす世間も未らつきよ
せずおうほうちやうくはんのころほひは院のきん
じゆしやをば内よりいましめられ内のきんしゆ者
をはゐんよりいましめられしかば上下おそれを
のゝひてやすき心ちもし給はすたゞんゐんに
のそんではくひようをふむにおなし其比の主上
と申は二條の院上皇と申は後しらかわの院の御
事也主上しやうくわう父子の御あひだなりけれは
何事の御へたてかわらせ給ふべきなれとも思ひの
外の事ともあつてしゆしやうつねは院のおほせ
をも申かへさせおはします是もたゞよげうきに
及て人けうあくをさきとするゆへなりそのころ人」二八ウ

しほくをおとろかし世もつて大きにそしりかた
ぶけ申事ありそのゆへは故近衛の院のきさき太
皇太后宮ときこえさせ給ひしはおほいの御門の右
大臣公能公の御むすめなりせんていにおくれまい
らつさせ給ひてのちは九重の外近衛河原の大宮の

御所にうつりそすませ給ひけるいつしかさきの
きさいの宮にてふるめかしうかすかなる御すまゐ
にてそわたらせ給けるちやうくわんのころほひは
御年廿二三にもやならせおはしましけん御さか
りもすこし過させ給ふほとなりされとも天下第一
のびじんの聞え渡らせたまひしかば主上つねは
色にのみそみたる御ありさまにて行力使に」二九オ

じようじくわいきうにひきもとめしむるに及で
ひそかに大みやへ御しんしよあり大みやあへて御
返事もなかりけれは主上ひたすらほにあらはれて
きさき入内有べきよしを大臣家へ仰下さる此事
天下におゐてことなる勝事なりけれは公卿せん
ぎあつてをの〳〵いけんにいはくかのそくてん
くはうごうは太宗のきさきかうそうくわうていの
けい母なり太そうほうぎよの後くわうこうあまに
なりてしやうこう寺にろうきよし給へりかうそう
くわうていねがはくはきうしつに歸つてまつり

ごとをたすけ給へと御使五度たつといへ共くわう
こうあへてしたかはず時にくわうていじやうこう」二九ウ

寺へりんかうあつてちんまつたくわたくしのこゝ
ろさしをとけんとにはあらずたゞきうしつに歸つ
てせんてい大宗の世をおさめしめ給へとねかふば
かり也さらずはわれ大そうのほたいをとぶらはん
がためにしやくもんにいつてぢんおくにかへる
へからすとてばうぜんとしてひるがへらずしかる
あひたかうそうのきんしんよこしまに取奉るが
ごとくにしてみやこへ入たてまつる皇后かうそう
めてたくしてまつりごとをし給へりしかはその御
代をば二和の御宇とぞ申けるかくて代をおさめ
給ふ事三十四年くにとみたみゆたかなりかう
そうほうぎよの後くわうごう女躰として位につき」三〇オ

給へりねんがうを神切元年とかうしてしう
わうのそんなるゆへにたいしうのそくてん大上

くはうていとなつてさいゐ二十二年とかや其後
かうそうの御子ちうそうくわうていにゆつりたて
まつらるちうそうの代をあらためてねんがうを神
龍元年となつくこれは我朝の文武天皇のぎよう
きやううん二年にあたれりちうそうの代又七ケ年
とそ聞えしただしそれはいてうのせんぎなれは
べつたんの事本朝にじんむ天皇よりこのかた
にんわう七十余代におよはせ給ふまでいまだ二代
のきさきのれいを聞ずと諸卿一同にうつたへ申
されたりけれはしやうくわうも此儀大きにしかる」三〇ウ

べからさるよしいさめ申させ給へ共主上仰なり
けるは天子に父母なし我十ぜんのよくんによつて
いま万乗の宝位をたもつされはなどかこれら程の
事をゑいりよにまかせさるべきとてすでに御入
内の日を御さだめありけるうへはちから及はせ給
はす大宮かくときこしめされし日よりしてなのめ
ならす御なみだにしづませおはしますせんてい

におくられまいらせしきうじゆの秋のはじめおなじ
草ばの露共きえやがて家をも出世をものかれたら
ましかは今かゝるうき事をはきかさらましとそ
御なげき有けるちゝのおとゝまいらせ給ひてこし
らへ申させ給ひけるは世にしたがはさるをもつて」三一オ

きやうじんとすとみえたりすてにぜうめいをくだ
されぬるうへは子細を申にところなしはやく御
じゆだいあるへし知らす王子御誕生有て君もこく
もとあふかれ給ひぐらうもくわいそといはるべき
すいさうにてもや候はん是ひとへにぐらうをた
すけさせおはします御かう〳〵の御至りなるべし
なんと申させ給ひたりけれとも大みやあへて御
返事もなかりけるか何となき御手ならひのつゐて
に御すゝりのふたにかうそあそばされける

うきふしにしつみもやらてかわたけの
世にためしなき名をやながさん

世にはいかにしてかはもれにけんゆうにやさしき」三一ウ

ためしにそ申侍りけるすでに御入内の日にも
なりしかばち丶のおと丶供奉のかんだちめしゆつ
しやのぎしきこ丶ろことにいたしまいらつさせ
給ひけり大宮ものうき御出なりけれはとみにも出
させ給はすはるかに月ふけさよもなかば過て後
なく〳〵御くるまにたすけのせられさせ給ひけり物
うき御出なりけれはいろある御衣をはめさすしろ
きおんそ十五はかりそめされけるうちへまいらせ
給ひてはれいけいでんにうつりそすませ給ひける
御あさまつりことをす丶めまいらつさせ給ふ計也
かのししんでんのくわうきよにはげんじやうの
しやうじをたてられたり伊いんていごりんぐせい」三二オ

なん太こうばうろくりせんじやうりせきしはり
将軍がすがたをさながらうつせるしやうじも有
手なかあしなか馬がたのしやうじおにの間几帳
の間小野の道風が七くわいけんじやうのしやうじ
と畫流せるもことはり也彼せいりやうてんのくわ
との御しやうじにはむかしかなおかゝうつせる
ゑん山の有明の月もありとかや故院のいまだよう
しゆにわたらせ給ひしそのかみ何となき御手ま
さくりにかきくもらかさせたまひしかありしな
からにかはらぬを御らんしてさすがせんていの御
おもかげ御こひしうや思ひまいらつさせ給ひけん
かうそあそばされける」三二ウ

おもひきやうき身なからにめくりきて
おなじ雲井の月を見んとは
其御あひだの御なからへいひしらす何となくもの
あはれなりし御事ともなり
かくうちろん
かくて主上はゑいまん元年の春のころより御
ぶよの御事聞えさせ給ひしか夏のころにもなり
しかは事の外におもらせ給ひけりこれに依て
大くらの大ゆふいきの兼盛がむすめのはらに今上
一の宮の二歳にならせ給ふがわたらせ給ひけるを

太子にたてまいらすべしなんときこえさせ給ひし
か同き六月廿五日にわかにしんわうのせんじを」三三オ
かうむらせたまひて其夜やがてじゆぜんありし
かば天下なにとなふ物あはてたる様也けり其比の
ゆうしよくの人々の申あはれけるは本朝にてとう
ていのれいをたづぬるに清和天皇九さいてもん
とく天皇の御ゆつりをうけさせ給ひしはかのしう
こうたんのせいわうにかはりなんめんにして
一日はんきの御まつりことをおさめ給ひしになす
らへてくわいそちうじんこうようしゆをふちし
まいらつさせたまひし是攝政のはじめなり鳥羽院
五さい近衛の院三さいそれをこそ人いつしかなり
と申しにこれはわづかに二さいにならせ給ふ
せんれいなしとぞ申されける物さはかし共おろか」三三ウ
なり同き七月廿七日新帝大極殿にして御そくゐ
あり天下のゆうきもとにあひまじはりてよろつ
何事もとりあんぬ御事ともにてそわたらせ給ひ
ける同き廿八日上皇終にほうぎよならせ給ひけり
御位をさらせ給ひてわづかに三十余日そまし
〳〵ける今年は廿三にならせおはしますつぼめ
る花のちれるがごとし玉のすたれにしきのちやう
のうち御なみだにしづませ給ふ人々御名殘をおし
み奉て八月七日までおきまいらつさせ給ひけり
さてしも渡らせ給ふべきならねばくわうりう寺
のうしとられんだい野のおくふなおか山のふもと
にをくりおさめ奉る大宮二代のきさきにはたゝせ」三四オ
給ひしかともさまでの御さいわひもわたらせたま
はす又この君にさへおくれまいらつさせたまひ
しかはつゐに御ぐしおろさせ給ひけり祇園のへつ
たうてうれん法印のいまだごん大僧都にて山より
くだられけるか御さうそうのけふりを見奉つて
かうそゑいじ給ひける
　つねに見し君か御幸をけふとへは

かへらぬたびときくそかなしき

かゝりける御さうそうの夜ゑんりやくこうふく両寺の大衆かくうちろんといふ事仕出してたかひのらうせきに及ぶ一天の君ほうぎよの時は南北二京の大衆悉ぐぶして御むしよのめくりにわか寺」三四ウ

〳〵のかくを打事ありけりまづしやうむ天皇の御くはんあらそふべき寺なければとて東大寺のがくをうつ次にたんかい公の御くわんこうぶく寺のかくを打北京にはこうふく寺にむかへてゑんりやく寺のかくをうつ次に天武天皇の御くわんちせう大しのさうさうとておんじやうしのかくをうつしかるを今度山門にいかゞはおもひけんせんれいをそむいてこうふくじのうへにがくをうつ間南都の大衆いきとをりこうふく寺のさいこんだうしゆにくわんおんばうせいしばうとて二人のあく僧ありくわんおんばうはもよきのはらまきにしらえの大長刀のさやをはつしせいしはうは黒いとおとしの」三五オ

よろひに大だちをぬき二人はしりかかりゑんりやくじのかくを切て落すきよみつ法師にぢもんはうはしりよつてかくをさん〳〵にきりやぶつてけりうれしや水なるはたきの水日はてる共たへずとうたへつねにとうたへとはやしあけてわか方へそはしりかへりける

清水ゑんしやう

一天のきみの御代をはやうせさせおはしまさん時はこゝろなき草木までもうれへたるいろをこそあらはすべきに此あさましきに上下みな四方へにけちりぬ山門の大衆狼藉をいたさば手むかへすべき所にこゝろふかふねらふかたもやありけん」三五ウ

ことはもいたさす同き八日山門の大衆下らくすと聞えしかば内裏ならびに院の御所へ軍兵めされけり京中のさうとうなのめならす又なに者か申出しけん一院山の大衆に仰て平氏ついたう有べきよし聞えしかはへいじの人々こはいかゝせんとそ

さはかれける小松殿のいまだ其比左衛門のかみに
ておはしけるかたうじ何事に依てさやうの御事
わたらせ給ふべきとせいせられけれともさわぎの、
しる事なのめならす同き九日山門の大衆すてに
げらくするあひだ武士検非違使西坂本に行む
かひけれとも大しゅ事ともせず打やぶつてらん
にうすかかりけれは一院六波羅へ御幸なる清盛公」三六オ

其時は大納言の右大將にておはしけるが大きに
さはかれけりされとも大しゅそぞろなる清水寺に
おしよせたりきよ水法師ふせぎたゝかふといへ共
ふんないはせはしぶせいではあり一たまりもたま
らず落にけり山ほうし寺中にみたれ入て火を
はなちだうたうそうばう一宇も殘さすやきはらふ
せいすい寺はこれこうぶく寺の末寺なるによつて
去ぬる御さうそうの夜のくわいけいのはちをきよ
めんか爲にやくなりとそ申ける大しゅかへり
のほつての後朝にくわんおんくわきやうへんじやう
ちはいかにとふたにかいて大門にたてたりけれ
はりやくこうふしぎとこれをいふなりとへんさつ」三六ウ

にそたてたりけるいかなるあどなし者のしわざ
にてかありけんおかしかりし事ともなり扨事
しづまりしかは一院寶住殿前へくわんぎよなる
左衛門のかみ御倶にまいられたり父の大納言は
とゞまり給ふ是はなを六波羅のようじんの爲こそ
おほえたるさゑもんのかみほどなふかへりまいられ
たり父の卿宣ひけるはさるにても一院の御幸こそ
大きにおそれ入ておぼゆれいかさまこれはおほせ
あわせらるゝむねの有にこそとのたまへは左衛門
のかみゆめ〳〵左様の御事御ことばに出させ
給ふへからす人にちゑつけかほに中々あしう
候ひなんすたゞいくたびもゑいりよにそむかせ給」三七オ

はて人のためにぜんをほどこさせおはしけれは御
身のおそれも有ましう候とてたゝれけれはあはれ

此重盛程何事につけても大やうなる人はなかり
けりとそちゝのきやうも宣ひけるさる程にほう
ぢう寺殿には一院くわんぎよの後御前にうとから
ぬ人々をめしてさるにても露おほしめしよらぬ御叉
を何ものか申いたしたりけん夢のやうなる事
かなと仰ける西光法師申けるは天にくちなし人を
もつていはせよと申事の候なれは平家あまり
にくわふんに成行く間ほろぶべきせんべうにて
天のつけにてもや候らんと申たりけれは人々是
よしなしかべにみゝありとてをの〳〵くちをそと」三七ウ

ぢられける今年はりやうあんなれはとて御けい
大じやうゐをもおこなはれすけんしゆんもんゐん
のいまだ其比ひんがしの御かたとてわたらせ給ふ
御はらに一院のみことの今年五さいにならせ
給ふが渡らせ給へは十二月廿四日親王のせんじ
をかうむらせたまひけりあくれはかいけんあつて
仁安元年とそ申ける

付とうくうだち

去年親王のせんじかうむらせ給ひたりし王子
同じき十月八日東三條殿にしてとうぐうにたゝせ
給ふとうぐうは御おぢ六歳主上は御おい三さい
じようもく相かなはせ給はす但一條のゐん七さい」三八オ

三條のゐん十一さいにしてとうくうにたゝせ給ふ
さればせんれいなきにはあらずとそ人申ける然に
主上二さいにて御位につかせ給て五さいと申し
にんあん三年二月十五日御くらゐをさらせ給て
いつしか新院とそ申けるいまだ御げんぶくもなく
して太上天皇のそんかうかんか本朝是やはじめ成
らん六でうの院の御事也おなじき三月廿日新帝
大極殿にして御そくゐあり今年は八さいにならせ
おはしますをよそ此君の朝家をしろしめされける
ことは一かう平家のはんじやうとそみえしその
ゆへは國母けんしゆん門院は入道相國の北のかた
八てうの二位殿のいもおと也平大納言時忠の卿は」三八ウ

けんしゆん門院の御せうとなれは主上のくわいせ
きなり内外に付てしつけんのしんとぞみえし
じよいぢもくもひとへに此卿のまゝなりけれは
彼やうきひがさいわひし時やうこくちうがさかへ
たりしかことし仁安四年六月十四日かいげん
あつてかをう元年とそ申ける

殿下のりあひ

かほう元年七月十六日一院御年四十三にて御
出家あり院御出家の後もなをばんきの御まつりご
とをしろしめされけれはゐんに候はれける公卿殿
上人上下のほくめんに至るまでくはんゐほうろく
身にあまりたりされとも人のこゝろのならひにて」三九オ

なをあきたらず平家の人々の國をもしやうをもふ
さけたることをば世にめざましき事におもひ
あはれ其人ほろひなば其國はあきなんその人うせ
なば其くはんにはなりなむなんとうとからぬとち
はさしつとひさゝやく時もありけり法皇も内々仰
けるはむかしよりてうてきをたいらくる者おほし
といへともかゝるれいは未なしさだもりひで里か
まさかどをほろほしらいきかさだたうむねたうを
せめ義家か武平家平をうちたりしにもけんしやう
おこなはるゝ事わづかにじゆりやうには過ざり
き然るを清盛入道かかく心のまゝにふるまう事
こそしかるべからねこれもたゝ世すゑになつて」三九ウ

王法のつきぬるにこそとおほしめされけれ共次で
もなけれは御いましめもなし平家も又別して朝家
をうらみ奉る事もなかりけるに世のみたれそめ
けるこんほんは小松殿の次なん新三位の中将すけ
もりのいまだ其比越前の守にて生年十三になられ
けるかいんじかおう二年十月十六日ゆきは
はたれにふつたりけりかれ野のけしきのおもしろ
さにわかき侍二三十騎めしぐしてたるともあまた
すへさせつゝ右近の馬場むらさき野北野のへんに
うち出てうつらひはりおつたて〳〵ひめもすかり

くらしはくほに及て大宮の大路よりこうぢなり
に六波羅へこそ歸られけれ其時の摂籙は松殿にて」四〇オ

わたらせ給ひけるが中の御門の御宿所を御出
あつてゆうはう門より入御なるべきにて東のとう
ゐんをくだりにおほいの御門を西へ御出なるほり
川いのくまのへんにてすけもり殿下の御出にはな
つきに參りあふあまりにてうおんにのみほこつて
世を世とも人を人共せさつしうへめしぐしたり
けるさふらひみな廿より内のわかきものどもにて
れいぎこつほうをも存ぜず一せつ下馬もせずせん
ぐみすいじんとも何者そ狼藉也ぎよしゆつのなる
に乗物よりおりさうらへ〳〵といらてけれ共みゝ
にも聞入ずかけわつてこそとをりけれ殿の御倶
の人々くらさはくらし太政入道のまご共つや〳〵」四〇ウ

ぞんぜず又給とはしつたれともそらしらずして
すけもりをはじめさふらひともみな馬よりとつて

ひきおとしあておとしすこふるちしよくに及けり
すけ盛はう〳〵六波羅におはしておうぢ太政の
入道殿に此由うつたへ申されけれは入道大きにい
かつてたとひ殿下にても渡らせ給へ入道かあたり
をばなどかおほしめしはゞからせ給はさるべき左様
においさきあるおさなきものともになさけなふ
ちじよくをあたへられける事こそかへすゞ〳〵も
いこんなれかゝる事よりして人にはあさむかるゝ
そ此事おもひ知世中さてはえこそ有まじけれ
とのたまへは小松殿のいまだ其比大納言の右大將」四一オ

にて御前におはしけるか此よしを聞給ひて夢〳〵
さやうの御叉思食よらせ給ふべからす重盛か子共
なんといひたらんする者の殿下の御出に參りあふ
てのり物よりおり候はざりつる叉こそかへす〳〵
もびろうには候へ其上よりまさみつもとなんと云
源氏共にあざむかれても候はゝこそ一門のちしよく
にても候へけれ是はすこしもくるしう候まじとて

中門に出其時事にあふたる侍ともをみなめし
よせてじごんい後もなんぢら能々こゝろうへし
あやまつて殿下へむらいのよしを申さばやとこそ
思へとぞのたまひける其後入道小松殿には宣ひも
合られすしてかたゐなかのさふらひのきはめて」四一ウ

こはらかなるか入道のおほせより外はおそろしき
事なしとおもひけるなんばせの尾をさきとして
都合六十余人をめして来廿一日に主上御げんぶく
御さだめの御ために殿下參内あらんするそ道にて
待うけ奉りせんぐみすいじん共がもとどりなりて
すけもりがはちすゝげとのたまへばこれらかしこ
まつてうけたまはりつかうそのせい三百余騎にて
殿下の御出をいまや〳〵とまちたてまつる殿下は
此事夢にもしろしめされす主上御げんふく御さだ
めの御かくわんはいくわんの御爲に今日より七日御
ちよくろにわたらせ給ふへきにてつねの御出
よりはひきつくろはせ給てせんぐみずいじん共に」四二オ

至るまで花やかにこそいて立たれ今度はたいけん
門より入御なるべきにて中の御門を西へ御出なる
ほり川いのくまのへんにて六波羅の兵共ひたかぶ
と三百余騎殿下の御出を待うけ奉り御くるまの前
後左右にて時をとつとそ作りけるけふをはれと出
立たりけるせんくみすいじんともを爰におつつめ
かしこにかけつめ馬より取て引おとしさん〳〵に
れうりやくして一々にみなもととりきるせんく六
人かうち藤蔵人の大夫たかのりかもとゞりをきる
とては是はなんちかもとゞりと思ふべからずしう
のもとゝりと思ふべしと云ふくめてぞ切たりける
ずいしん十人がうち右のふしやうたけもとがもと」四二ウ

どりもきられにけり供奉の公卿殿上人のくるまの
物見うちわりうしのむなかいしりかいきりはなつ
たりけれはくもの子をちらすがごとくにそなりに
けるすたれかなくりおとし殿の御くるまのうちへ
も弓のはすつきいれなんとしけれは殿下あまりの

おそろしさにや御くるまよりこぼれ落させ給ひて
あやしのしつかせうおくになく〳〵立そしのはせ
給ひけるつはものとも加様にさん〳〵にしちらして
六波羅に歸參つて此由申たりけれは入道しん
べうなりとそのたまひける其後御くるま仕る者も
なかりけれは因幡のさい使鳥羽の國久丸と云者有
けらうなりけれともさか〴〵しきに依て御くるま」四三オ

仕る攝政殿はさてしも渡らせ給ふべきならねは御
なをしの袖にて御なみだおさへさせ給ひつゝくはん
ぎよのぎしきの淺ましさ申はかりはなかりけり
大しよくはんたんかいこうの御事はあけて申に
及はす忠仁公せうぜん公よりこのかたせつしやう
くわんはくの懸る御目にあわせ給ふ御事は是
はじめとそ承るこれそ平家のあくぎやうのはじめ
なる小松殿このよしをきゝ給ひて其時ゆきむかふ
たりけるなんばせの尾をさきとして都合六十余人
をかんだうせらるたとひ入道ふしぎを下知し給ふ

はなと重盛にゆめをば見せざりけるぞやをよそは
すけもりきくわい也せんたんは二ばよりかうはし」四三ウ

とこそみえたれ重盛か子共なんといひたらんする
者のことしは十二か三になるとおほゆるに今はれい
儀こつはうをも存してこそふるまふべきにかゝる云
かいなき者をめしくしておうぢ入道のあくみやう
をたつふけうのいたりなんちひとりにありとて
すけもりをもかんだうし伊勢の國へそおいくだ
されける其比の京中の上下あはれ此大將程何事に
つけてもゆうにやさしき人はなかりけりとほめぬ
人こそなかりけれさる程に主上の御けんふくも
その夜はのひぬ同き廿五日に院の殿上にしてそ御
げんふく御さだめはわたらせ給ひける攝政殿はさて
しもわたらせ給ふへきならねば同き十一月九日」四四オ

兼せんじをかうむらせ給ひて同き十四日に太政
大臣にあかり給ふ同き十二月廿七日に御はいがの

聞えありしかとも世の中にが〳〵しうそみえし
去程にとしくれてかおうも三年に成にけり
　　しゝのたに
かおう三年正月五日主上御げんぶくあつて同き
十三日法住寺殿へてうきんの行幸あり。今年十
一歳にならせおはしますういかふむりの御よそ
ほひ法皇も女院もいかはかりかめてたくおほしめ
されけん入道相國の御むすめ女御にまいらせ給ふ
御年十五さいとそ聞えしめうおんゐんの太政大臣
もろなが公未そのころ内大臣の左大將にておはし」四四ウ
けるか大將をじせさせ給ふ事あり時にとくたい
寺殿も其人にあたり給へりといへり又花山の院の
中納言かねまさのきやうも所望あり其外古中の御
門の藤中納言家成の卿の三なん新大納言成親の卿
はたうじきみの御てうしんなるあひた大將しきり
にのそみ申されければさま〳〵のいのり有まづ
八幡に百人の僧をこめてしんどくの大はんにやを
よませられけるにはんぶに及ておとこ山のかた
より山はと二飛来り甲良の明神の御まへにてくい
あひてこそ死にけれはとは八幡大ぼさつの第一の
使者也宮寺にかゝるふしぎなしとて時のげんきよう
きやう清法印内へ此由そうもんすやがて神祇くはん」四五オ
にて御うらあり天下のさわぎとうらなひ申す
たゞし朝家の御大事にはあらずしんかのつつ
しみとそ申しける大納言是にもおそれ給はすひるは
人目しげけれはほかうにて夜な〳〵賀茂の上の社
へ七夜つゝけて參られけるに七夜にまんする夜
下向してくるしさにや打ふされたりける夢に上の
社へまいりたるかとおほしくて御寶殿のみとおし
ひらき内よりゆゝしうけたかき御こゑにて一しゆ
の哥をそあそばされける
　　さくらはな　かものかわかせ　うらむなよ
　　ちるをはえこそとゝめさりけれ
大納言これにもなをおそれをいたされずかもの上」四五ウ

の社のうしろなるすぎのほらにだんをたてある
ひしりをこめてだきにの法を百日おこなはせられ
けるに有時にわかにそらかきくもりいかづちおひ
たゝしうなつてかの大すきに落かかり火もへあ
がつてしやだんすでにあやうくみえけるを宮人共
おこつて是をうちけすさてかの外法おこなひける
ひしりをついしゆつせんとしけれは我たうしやに
百日参詣の心さしありけふは七十五日になる全
いづまじとてはたらかす其時神人はくぢやうを
持てかのひしりかをなしをしらけてついしゆつし
てんけり神はひれいをうけさせ給はす大納言ひ
ふんの大將をいのり申されけれはにやかゝるふしぎ」四六オ

ぞ出来にける其比のじよゐぢもくは院内攝政くはん
はくの御せいはいにもあらす一かう平家のまゝ成
ければ徳大寺花山の院もなり給はす入道相國の
ちやくし小松殿大納言の右大將にておはしけるが
左にうつり給ひて御おとゝの宗盛中納言にて候ら
はれけるがすはいの上らうをてうおつして右に
くわはり給ふこそ心もことはもをよばれね徳大寺
どのは一の大納言くわそくゑいゆうさいかくゆう
ちやうにてこえられ給ふそいこんなるされはとく
大寺殿は世のなりゆくやうを見んとや思はれけん
大納言をはしし申されてしはらくろうきよとぞ
聞えしさる程に中の御門の新大納言成親の卿は」四六ウ

徳大寺の花山の院にこへられたらんはいかゞせん平家
の宗盛に越られぬるこそいこんなれ是も只平家の
思ふ様なるかいたす所也さればいかにもして平家
をほろほし我ほんまうとけばやと思はれけるこそ
おそろしけれ父の卿はこのよわひにてはわづかに
中納言にてこそおはせしかこれはその末子にて位
正二位くはん大納言にあかり大國あまた給て子息
所從に至るまてくはんゐ奉禄身にあまりたり
されはなんのふそくにかかゝる心のつかれけん
是偏にてんまのしよゐとそおほえたる去ぬる平治

にも越後の中將とてのぶよりのきやうに同心の間
すてにちうせらるべかりしを小松殿のやう〳〵に」四七オ
申てくびをつき給へりしかるに其おんをわすれて
外人もなきところにひやうくをとゝのへ軍兵を
かたらひあつめていくさ合戦のいとなみのほかは
又たしなしとそみえたりける東山しゝの谷と云所
は俊寛僧都がりやうなりけるかうしろは三井寺へ
つゝひてくつきやうのじやうくわくなりければ
かしこに引籠平家をほろぼさんこそぎせられける
このしゆんくはん僧都と申は京極の源大納言が
しゆんのきやうのまごきてらの法印くはんかの子
なりそぶ大納言はきわめてはらあしき人にて我家
の前をは人をもやすくとをさす中門に立てはをく
いしはつておはしけれは人はくいの大納言とそ申」四七ウ
けるかくいかれる人のまごなりけれはしゆんくはん
もふつうの僧にてはなかりけりある時法皇しやう
げん法印をめしくしてひそかにしゝの谷へ御幸
なり扨この事いかゝあるべきとおほせけれはほう
いんあな淺まし人あまた承候もし此事の天下へ
もれ聞え候はゝたゞいま世のみたれ出来候はんする物
をと申されたりけれは大納言気色大きにかはつて
御前をまかり出られけるがいかゞはせられけん御前
に立られたりけるへいじのくちにかりきぬの袖を
かけて引たをされたり法皇あれはいかにと仰けれ
ば大納言たちかへり平氏たをれ候ひぬとぞ申され
ける法皇大きにゑつほにいらせおはしまして物」四八オ
ともまいつてさるがく仕れと仰けれは平判官やす
より御ぜんに參りへいじのあまりおほふ候に
もてゑいてこそ候へと申しゆくわんかさてそれ
をば何とか仕候べきと申せばれいの西光かつつ
參りへいじをはくびをとるにしかしとてへいじの
くちをとつてあなたへはわたすこなたへはわたす
とてそ入にけるほういんあまりのあさましさに

法皇をすゝめ奉ていそぎ法住寺どのへくはんぎよ
なし申されけり今度のむほんによりきのしゆうは
たれ〳〵そ近江中將入道れんじやう山城の守もと
かぬしきぶのたゆふまさつな宗判官のふふさ新平
判官すけゆき平判官やすより法勝寺のしゆぎやう」四八ウ

俊寛僧都つの國源氏多田の藏人ゆきつなをさきと
してほくめんのともがら共おほくよりきしてけり中
にも多田の藏人ゆきつなをは大納言大事の者に
し給ひて御へんをは一方の大將にたのむなり若
此事しおふする程ならば國にてもしやうにても
所望によるべしまづ弓ふくろのりやうにとてしろ
ぬの五十たん承りつかはさるそも〳〵上古にはほく
めんはなかりけり白川の院の御時はじめおかれて
より以来ゑふ共あまた候けりためとし盛重わら
はよりせんじゆ丸今いぬまるとて是らは左右なき
きりもの也又鳥羽院の御時はすゑよりすゑのり父
子共に朝家にめしつかへてつねはてんそうする事」四九オ

も有なんと聞えしかども是等は身の程を存知して
もこそふるまひしにこの御ときのほくめんは以外
にくわふんにて公卿殿上人をも事ともせす下北
めんより上北めんに上り上ほくめんより殿上の
まじはりをゆるさるるもありけりかくのみふるま
ひしほとにこれらはおごれるものともにて加様
のことにもくみしてけり

うかわかつせん

かのほくめんのともがら共の中にもろみつなりかげ
と申者有これはこせうなごん入道信西のもとに
こんでいわらはもしはかくごしやにてけしかる者
にてそ候ひけるもろみつは阿波の國のさいぢやう」四九ウ

なりかげは京のものなりさか〳〵しきに依てつね
は院の御まちにもかゝりもろみつは左衛門のぜう
なりかけは右衛門の尉とて二人一度にゆきゑの
せうに成て信西ことにあひし時ともに出家して
左衛門入道西光右衛門入道さいけいとて出家の後

もなを院の御くらあつかりにてそ候ひける彼さい
くはうが子にもろたかと申ものありこれも左右
なきき り者なりけれは検非違使五位のせうまでへ
あかりあまつさへあんげん元年十二月廿九日の
ついなのぢもくに加賀の守にそふせられけるし
たかつてこくもをおこなふあひたひほうひれいを
ちやうきやうし神社仏寺けんもんせいけのしやう」五〇オ

ゑんをもつたうしてさん〳〵の事ともにてそ
ありけるたとひせうこうかあとをへだつといふ共
おんびんのまつりごとをこそおこなふべきにかく
のみふるまひしほどに安元二年の夏のころおとゝ
近藤判官もろつねをかがの目代にさしくださる
かがのこうのへんにう川のうんせん寺と申山寺
有もろつねげちやくのはじめかの寺にらんにうし
寺僧とものゆをあびけるをおいあげわか身もあび
家の子らうどうにもあひせあまつさへざう人ばら
をいれて馬のゆあらひなんとせさせけれは寺僧等

大きにいかつてむかしより此ところに國方の者の
にうぶするやうなしたゞせんれいにまかせてすみ」五〇ウ

やかにうぶのわうばうをとゞめよといひけれは
もろつね申けるは前々の目代はふかくにてこそ
いやしまれたれたう目代におゐては全其儀有まじ
たゞ法にまかせよと云程こそありけれ寺僧等は國
方の者をついしゆつせんとす國方の者はつゐてを
もつてらんにうせんとしけるあひだうちあひはり
あひさん〳〵にふるまふてもろつねがさしもひ
さうしける馬のあしをそうちおりける其後はきう
せんひやうちやうをたいして討合切あひすこく
たゝかふ夜にいりけれはもろつね宿所にかへり
けり次の日もろつねたう國のさいちやう一千余騎
を引そつしてうかわにおしよせたりふせぐ所の」五一オ

大衆数十人打ころさる其後寺中にみたれ入て火
をはなちだうしやたうべうふつかくそうはう一宇

も殘らすやきはらふう川と申は白山の中宮の末
寺なるによつて三社ならびに八院のしゆとおこり
あへり八院のしゆとのちやうほんにちしやくがく
みやうほうたいばうしやうちかくい土佐のあしや
りそすゝんたるつかう其せい二千余人同き七月九
日の日のさるとりのこくにもく代もろつねかたち
ちかくこそおしよせたれ今日はくれぬ明日の軍
とさだめて其夜はよせてゆらへたり露ふきむすぶ秋
風は射むけの袖をひるがへし雲井をてらすいな
つまは甲のほしをかゝやかすもろつねかなはしと」五一ウ

やおもひけん夜逃にして京へのぼる次の日の卯の
こくに大衆おしよせてときをどつと作たりけれ共
城の内には音もせず人を入て見せけれはみな落て
候と申大しゆちから及ばで引しりぞくせんする所
此由を山門へうつたへて公家へそうもんせんとて
白山めうりごんげんの神よをひゑい山へふり奉る
同き八月十一日のむまのこくはかりにめうりごん
げんのしんよひゑい山東坂本へつかせ給ふと申程
こそありけれにはかにそらかきくもりいかづち
おひたゝしうなりさかつて北國の方よりみやこを
さしてなりのほるにはくせつくだつて地をうつみ
山上らくちうおしなへてときはの山のこすゑまで」五二オ

みなしろたへにそなりにける三千の大衆東坂本
におりくだりしんよをはいし奉りすなはちまらふ
との社へいれ奉る山門にきやくじんごんけんと申
ははくさんこんげんの御事にてぞ候ひける申せ
は父子の御中也沙汰のじやうぶはしらね共しやう
かいの面目たゞ此事のみにありかのうら嶋か子の
七世のまこにあへりしがことしたいないの者の
りやうぜんの父を見しにおなじ三千の大しゆくひ
すをつき七社の神人袖をつらね時々こく〳〵のき
ねんほうせこゝろもことはも及はれず

くはんだて

山門の大衆そうじやうをさゝけてなけきけれとも」五二ウ

いまだ御承引なきあひださもしかるべき公卿殿上
人の宣ひあはれけるはあはれ此事とふして御
さいきよあるべき物を山門のそせうは他にこと
なり大くらきやうためふさださいのそつすゑなか
は朝家のてうしんたりしかとも山門のそせうに
依てるさいせられきさればもろたかもるつねなん
どが事はことの數にやあるべきなんとのたまひ
あはれけれとも大臣は禄をおもんしていさめず
せうしんはつみにおそれて申さずといふ事な
れはをの〳〵くちをとぢられける賀茂川の水すご
六のさい山法師是そまろかこゝろにはかなはぬと
白河の院もおほせなりけんなる又鳥羽院の御とき」五三オ

越前のへいせい寺を山門へつけられける事もたう
山の御歸衣あさからさるによつて山門のそせうは
ひをもつてりとせよとせんぎせられてこそ院せん
をもくだされけんなれくはんむ天王てんげう大し
ゑんりやくのころほひふかくけいやくをむすび給
ひて御門は山城の國平安城を立てまのあたり一乘
ゑんしうをあかめ給ふだいしはがうしうなからの
山をひらきとうじんのやくしのきやうさうを作り
あらはして百わうの御くはんにそなへ給へり皇帝
つねにりんかうあつて御らんせられけるゆへに
こそゑい山とは名付られけれ又ちんご國家の道場
あめがしたにならびなけれはひゑい山とも申也」五三ウ

守護の神明は大和の國たけちのこほりにまします
大明神にて渡らせ給ふてんち天皇の御とき近江の
みつうみに五宮の波たつて一さいしゆしやうしつ
う仏性とゝなふるこゑにしたかつて大和の國より
近江のみつうみにやうがうあつて田中のうし丸
つね世と申つり人の舟にめされてからさきの
うしまるかもとへ入せ給けりうしまる大きにさは
いてたゞ人にてはわたらせ給はすとてあたらしき
むしろをしき御座しつらふてしやうじたてまつる
かくてうしまるをめしてなんちは神人となつて我

に供御をまいらせよと仰けれは折節あわのはんの
候けるをまいらせけりそのれいにて今に至るまで」五四オ

あわのぐごをまいらするとかや扨うしまるいつく
にわたらせ給ふべきそと申せはこれよりいぬゐに
した山のふもとにあとをとむべきなりとそ仰ける
うしまるかしこまつてうけたまはりこのころてん
たい山と名付たるなからの山の坂本に草をむす
ひてあかめ奉りしよりこのかた日本ぶさうのれい
神日吉山王これなりけにもがうそつきようはうの
きやうの申さるゝ様に大衆しんよをさゝけ奉て
そせうをいたさんにおゐては君をいかゞはせさせ
おはしますべきとそ法皇も仰なりけんなる又ほり
川の天皇の御宇かほう元年のふゆのころみのゝ
かみ源のよしつなの朝臣たうこく新立のしやうを」五四ウ

たをすによつて山の久住者ゑんおうをせつかいす
是に依て日吉のしやじゑんりやく寺のしくわん

都合三十余人子細をそうもんのためにぢんとうへ
こそはつかうすれ後二条のくはんはく殿大和源氏中
づかさのせうよりはるにおほせてこれをふせかせ
らるよりはるが郎等矢をはなつきずをかうむる者
八人死するは四人也しやじしよしらおめきさけん
で四方へみなにけちりけり是によつて山門大きに
いきとをり七社のしんよをこんほん中だうへふり
あげ奉て後二条のくはんはく殿をさま〳〵にしゆ
そし奉りけるとそ聞えし又三千の大衆東坂本に
おりくだりいわう寺ごんげんの御前にてしんどく」五五オ

の大はんにやをよまれけるにちういん法印の未
其比ちういんぐぶにておはしけるか高座にのほり
けいひやくのかねうちならしけうけのことはこそ
おそろしけれ我等かなたねの二ばよりおほしたち
給ふ神たちと知ながらむし物にあふてこしが
らふたまふ後二條のくはんはくとのにかぶら矢一
はなちあてたへ大八わう子ごんげんとかうしやう

にの、しつたりけるにそ聞人みな身のけよだつ
ておほえたるやがて其夜のねのこくばかりに八
王子の神殿よりかふら矢のこゑ出て王城をさして
なつて行しこそ人の夢にはみえにける次の日の
また朝後二條のくはんばく殿の御宿所の御かうし」五五ウ

あけけれは只今山よりとりて来りたることくなるし
きみの花一ゑだつゆにぬれたるがすたれにこそ
たつたりけれこれ大きにふしぎのすいさうと申し
ほどにやがて其後後二條のくはんはく殿山王の御
とがめとて御ぢうひやうをうけさせたまひかかり
けれはやう〳〵の御くはんをたてさま〳〵の御
いのりありまづ日吉の社にて百ばんの一物百はん
のしはでんがくけいばやぶさめすまうをの〳〵百
はんゑんりやく寺にて百座のにんわうかう百ざの
やくしかうどうじんのやくしのきやうざう百躰
しやかあみた一ちやくしゆはんのざうをの〳〵百
たい作りくやうし奉らるくわんはく殿の御母儀は」五六オ

京極の大殿の北の政所にてさいあひの御一子にて
わたらせ給へば御ぼぎことに御なげきあつて忍び
つゝひよしの社へまいらせ給ひて七日御參籠まし
ましていのり申させ給ふ御心中に三つの御くはん
あり人これをしり奉らすある夜きせん上下まいり
あつまれる中にみちのくよりはるぐとたつね
のぼりたりけるわらはみちのはじめて此御社へ參
りたりけるか夜はんばかりにはかにせつじゆす
上下こはいかにと見る所にやがていきかへりわれに
八わうしごんげんの乗ゐさせ給へりとてたゝせん
していはくしゆじやうらたしかにうけたまはれ
たうじくはんはく殿山わうの御とかめとて御ぢう」五六ウ

ひやうをうけさせ給ひてやう〳〵の御くはんを立
さま〳〵の御いのりあり御母儀ことに御なけき
あつて忍びつゝ此御社へまいらせ給ひて七日御參
籠まし〳〵ていのり申させ給ふ人これをしり奉
らず御心中に三の御くはんあり我まさに知たり

第一の御くはんには今度くわんはく殿御ぢうひやう
たる所にいへさせ給はゝ大鳥ゐより始て社々の宝
前八王寺に至るまでくわいらう作りかけんと也第
二の御くはんには今度くはんはく殿御じゆみやう
ちやうおんの御叉ならはわれさまをやつし八わう
寺の下殿成もろ〳〵のかたわうどの中にまじはり
庭のちりをはらひ千日の御宮つかへとなりたい三」五七オ

の御くわんには今度くはんはく殿の御ちうびやう
たちところにいへさせたまはゝ八王子ごんげん
の御まへにてまい日法花もんだうかうおこたり
あらしと承るいつれも〳〵有かたふこそきこしめ
せまことに社參のともがらのあしたにはきりをはらひ
ゆふべに霧をしのぐにくわいらうあらん事あらま
ほしうこそ思食せたゞし此しゆとはなんきやう
くきやうのこうつもつて今度生死をはなれんとな
れは今さらくわいらうをよろこふへきにもあらず
たい二の御くわんにわのちりをはらひ千日の御宮

つかへとうけたまはる神の一さいしゆしやうを
おほしめすもたゞおやの子を思ふがことし日比は」五七ウ

京極の大殿の北の政所にて玉のすたれの内にしき
のちやうにまとはれてたへなる御身にてわたらせ
給ひしかとも子を思ふみちにはまよはせ給ふにや
まことに見るもいふせく淺ましげなるかたわうと
なかにまじはり一日二日の事ならす千日までの
御みやつかひをば神としてもいかてかあはれみ奉
らさるべきこそはおほしめすらめとあはれなり
是もさる御事にては候へとも第三の御くはん法花
もんだうかうこそまことにありがたふ候へわれ此
山のふもとにあとをたれ一さいしゆしやうを度
するも偏に一乗けちえんのため也一け一くの法門
たにもいかはかりか有かたかるべきにましてまい」五八オ

日おこたりなからん事のめてたさよまことにさも
あらば今度くはんはく殿の御ぢうひやうちやうがう

かぎりとは申せ共神かの御身にあひかはつて
みとせのいのちをたすけ申さうするはいかに位
くわんはく殿のしやじしよしらにはなちあて給ふ
矢は神の此躰にあたれりまことそらごとは是等し
れとてかたぬきたるを見れば左のわきの下に大き
なるかわらけのくちはかりうけのひてそみえける
上下めをおとろかしみなすいきのなみだをそ流し
ける其時北のまんところ山わうの御たくせんしん
しつに思食て人目をつゝませ給はすきせんの中に
あらはれ出させ給ひて御なみだにむせはせおはし」五八ウ

ますとて申ところの三のくはんいつれもたかひ
さふらはす一日二日のひんたにもいかばかりか有
がたかるべきにまして三年があひだとうけたま
はる今度の參りの御りしやうたゞこの事にこそ
さふらへ法花もんだうかうにおきさふらひては御
うたかひさふらふましと申させ給ひたりけれは
御倶の人々扨いかなる御叉の渡らせ給てかなをも
御いのちのゝひさせ給ひ候ふへきと申あはれけれは
神も三年の後はちから及はせたまはすとて山
わうあからせ給ひけりやがてつきの日都へ御下向
あつてくはんはく殿の御重代の御家りやうきいの
國田中のしやうと云所を八王子へ御きしんあつて」五九オ

まい日法花もんたうかう末代のいまにたらすとそ
承るかかりしほどにくわんはく殿御やまひかろ
ませ給てもとのごとくにならせたまけり一日
二日とせしほどにみとせの過るはゆめなれや
ゑい長元年六月廿一日の夕へよりくはんばく殿御
ぐしのきはにあくさう出来させ給ひてうちそふさ
せ給ひける山里の御やくそく今の月日をかぎらせ
給ふ事なれはたゞじこくたうらいをまたせ給ふ
ほとに同き廿八日のあかつきかた御年三十八にて
終にかくれさせ給ひけり御心のたけさりのつよさ
さしもたゞしき人とこそ聞えさせ給ひたりしか
ともまめやかに事のきうにもなりしかは御」五九ウ

いのちをおしませ給けりまことにおしかるべし未四
十をたにもみたせ給はで大殿にさきたちまいらつ
させ給ふそ淺ましきかならずおやをさきたつへし
といふ事にはあらねども生死のおきてにした
かふならひ万どくゑんまんの世尊十地くきやうの
大士たちも力をよはせ給はすじひぐそくの山わう
大しりもつのはうべんなれはとがめさせたまは
さるへし共おほえすされば山門のそせうはおそ
ろしき事にのみこそ申つたへたれさる程に
年暮て安元も三年になりにけり

みこしふり

あんげん三年三月五日めうおんゐん殿太政大臣」六〇オ
にてんじ給ふかはり小松殿大納言さだふさの卿
をこへて内大臣の左大將にあかり給ふ大臣大將
めてたかりきめうおんいんどのをしあけられさせ
給ひけり一のかみこそせんどなりしかとも父あく
さふの御れいそのはゞかりありとそ聞えし同き十
三日小松殿には大臣のたいきやうおこなはるそん
しやは大いの御門の左大臣つねむね公とそ聞えし
同き四月に山門には日吉のさいれいをおしとゞ
めおなじき十三日大みやろうもんの前に三たう
くわいかうしてこくし加賀の守もろたかるざい
にしよせられもく代もろつねきんこくせらるべき
よし度々のそうもんに及といへとも御さいだん」六〇ウ
おそかりけれは十ぜんじまらふと八王寺三社の
しんよをかきさゝけ奉つて子細をそうもんのため
にぢんとうへこそはつかうすれ西坂本さかり松き
れつゝみたゞすむめたゞやなぎ原東北院のほとり
にしゝつゝみの音おひたゝしくきこゆ神人宮じ
しら大衆賀茂河原にみち〳〵たりしんよは一條を
西へ御幸なる御神寶は天にかゝやककきらめき
わたつて日月地に落させ給へるかとぞおほし
たかくわうきよには源平両家の大將軍ちよくを承
はつて四方の門をかためて大衆をふせく平氏には

小松殿三千余騎にて東おもてやうめいたいけん
ゆうはう門三の門をかためらる右衛門のかみより」六一オ
もり一千余騎にて南おもてのぢんをかためらる平
宰相のりもり是も一千余騎にてにしおもてのぢん
をかためらる源氏には大内守護の源三位よりまさ
渡邉のはふくさつくをさきとして都合そのせい三
百余騎北おもてぬいとのちんをかためて大衆をふ
せく大路はひろしせいはすくなしまばらにこそ
みだりけれは大しゆぶせいたるに目をかけて北お
もてぬいとのぢんよりしんよをふり入奉らんとす
すてにかうとみえけるによりまさのきやうゆみを
はつしかぶとをぬいてしんよをはいし奉らる大
將のかくしけるうへは家の子郎等共もみなした
かつてかくのことしよりまさの卿しばらくしゆとの」六一ウ
御中へ申べきむねありとて使は渡邉の長七と
なふとそ聞えしとなふが其日のしやうぞくには
きちんのひたゝれに小ざくらをきにかへしたる
よろひをきこくしつの太刀をはき廿四さいたる大
中黒の矢おひぬり籠籐の弓わきにはさみつゝ甲
をばぬいてたかひもにかけおき道よりあゆみいて
大衆のまへにひざまつきこれは源三位殿より申
せと候今度山門の御そせうりうんの條もちろん
に候たゞし御さいたんちゝこそよそにてもい
こんに存候へ扨はしんよを此ぢんよりあけていれ
まいらせん事いとやすき御叉にては候へ共あけて
入まいらせんぢんよりいらせおはしましたらんは」六二オ
山門の大衆は大せいにおそれて目たりかほをし
けるになんと京わらべの申さん叉後日のなんにて
もや候はんすらん又ふせぎまいらせ候へは年来い
わう山わうにかうべをかたふけまいらせたるより
まさがけふよりしてながく弓矢の道にわかれはて
候ひなんずされば とてふせかねはせんじをそむく
にゝたりかれと云これと云かた〳〵なんぢのやうに

候ひがしおもてのぢんとうをは小松殿の三千余騎
にてかためられて候あのぢんより入せおはしまし
たらんは山王の御いくはうもいよ〳〵めてたくしゆ
との御いしゆもあらはれて御そせうやがてたつし
ぬとおほえ候といひおくつたりければとなふが」六二ウ

かく申にふせかれて神人みやじしはらくゆらへ
たり若大衆あく僧ともは何條たゞこのぢんより神
よをふり入たてまつれやとせんぎすすでにかうと
みえけるに爰に三千のちやうほんつのりつしや
かううんすゝみ出て申けるは我等今度しんよを
さゝけ奉つてそせうをいたさんにおゐては大せい
のなかをうちやぶつていつたらんこそ後代の聞え
もあらんすれそのうへ此よりまさのきやうと申は
六そんわうよりこのかた源氏ちやく〳〵のしやう
とう弓矢をとつて天下になをあくるのみならすや
まとことばにもゆうにやさしかんなるそ近衛の院
の御時たうざの御くわいのありしにしんざんの」六三オ

花といふたいの出たりしをすいふんの人々のよみ
わつらはれたりしにこのよりまさのきやうこそ
しう哥にはよみたりしか

　　み山木のそのこすゑともみえざりし
　　さくらは花にあらわれにけり

と申すめいか仕て御かんにあつかつし其やさ
おとこかかためたる門にこそあんなれいかゝなさけ
なふちしよくをばあたふべきたゝそのしんよかき
返し奉れやとせんぎしければせんちんよりご
ぢんに至るまでみなもつとも〳〵とそ同じける
扨十せんじの神よをさきたて奉つてひがしのぢう
とうへまいる武士共しばしささへてふせぎけれ共」六三ウ

大衆こととともせずうちやふつてらんにうしける間
たちまち狼藉出来てたいけん門かためたる武士六人
矢をはなつ其矢十ぜんしごんけんの御こしにたつ
是をはしめとして兵共矢さきをそろへてさん〳〵
に射けれは神人宮じ射ころされしゆとおほくきず

をかうむつておめきさけぶこゑ上はほんでんまで
も聞え下はけんらう地神もおどろきさわぎ給ふ
らんとそおほえたる大衆三社のしんよをはぢん
とうにふりすて奉てなく〳〵本山にこそ歸上りけれ

内裏ゑんしやう

其後内裏にはにはかに公卿せんき有てせんれいを
大けきもろ久にたづねさせらるまづ寶安四年四月」六四オ

にしんよじゆらくの時は座主に仰せてせきさんの社
へ入奉らる又ほうゑん四年七月にしんよじゆらく
の時は祇園のへつたうに仰て祇園の社へ入奉らる
今度はほうゑんのれいたるべしとてきをんのへつ
たうてうけんに仰てぎをんの社へいれ奉いるかの
やしろのしやじしよしらへいしよくに及で神よを
うけ取奉て御やしろへいれ奉る御こしに立矢をば
神人してぬかせらるいんしゑいきうよりあんげん
の今に至るまで大衆しんよをふり奉つてそせうを
いたす叟六度也まい度ぶしをもつてこそふせかせ
らるゝにしんよにや射かけ奉る叟是始とそ承れは
しんいかりをなす時はさいかいちまたにみつとも」六四ウ

いへりおそろし〳〵とそ人申ける同き十四日山門
の大衆又けらくすと聞えしかば主上ようよにめし
て夜中に法住寺殿へ入せ給ふ中宮も御くるまに
めしてぎやうけいなる小松の大臣なをしに矢おふ
て供奉せらる其外くはんはく以下大臣公卿殿上のし
しん大きにさわいてはしりまとへり然共山門には
神人みやじ射ころされしゆとおほくきすをかう
ふりしかは日吉の大宮二のみや延暦寺のちうだう
かうだうすべて諸たうをやきはらつてみな山りん
にまじはるべしとぞ三千一同にせんぎしける君も
此事御承引有べきよし聞えしかは山門のじやう
こうちもんとの大衆に此由ふれんとと山しけるを」六五オ

大しゆ大きにいかつて西坂本よりおつかへす同き
廿日平大納言時忠の卿の未其比左衞門のかみにて

上けいにたゝる山門の大衆大かうだうの庭にしゆゑしてせんきしけるはせんする所しやうけいをとつてひつはりかふりを打落てみつうみへしづめよなんとそ申けるすでにかうとみえけるに左衞門の守しばらくしゆとの御中へ申すべきむね有とてふところより小すゝりたたうかみを取出し一くをかいて大しゆの中へそ送られけるしゆとのらんあくをいたすはまゑんの所行明王のせいしゆをくわふりはぜんぜいのかごなりとそかかれたる大しゆもつとも〳〵とて谷々にくだりばう〳〵へこそ入」六五ウ

にけれ一し一くをもつて三たう三千のいきとをりをやすめこうしのはちをきよめ給ふ時忠の卿こそやさしけれ山上らくちうおしなへてほめぬ人こそなかりけれ同き廿三日にほり川の大納言忠親の卿を上けいにてこくし加賀の守もろ高尾張の井ど田へるざいにしよせられ目代もろつねきんこくせらるしんよに矢射懸奉る武士六人こくでうせらる是は小松殿のめしつかはれける所の軍兵共也同き廿八日の夜のねのこくばかりにひぐちとみの小路より火出来り折節たつみの風はけしうふいて京中おほくやけにけり北野の天神のこうはい殿ぐへい親王のちくさ殿西三條かもゐ殿東三條そめ殿ふゆ」六六オ

つきのおとゞのかん院どのてい仁公の小一條せうせんこうのほり河殿たちばなのいちせいかはい松とのおに殿に至るまでむかし今の名所きうせき廿余ケ所公卿の宿所十七ケ所までやけにけり其外諸大夫侍の家々は中々申に及はすくるまのわのことくなるかむらが三町五ちやうをへたてつゝすじかいに飛越〳〵いぬゐをさしてやけゆけはおそろしなん共おろか也はては大内にふき付たりしゆしやく門より始ておう田門くわいしやう門大極殿しよし八しやうぶらくゐんあいたん所くはんのちやう大かくりよに至るまで只一時か間のくわしんのちりとぞ成にける家々の日記代々の文書七ちん万寶」六六ウ

さながらちりはいとなる其外のつゐえいくそはく
ぞや人のやけ死ぬる事數百人ぎう馬のたぐひかす
を知す是只叉にあらすひゑい山より大き成さる共
が一二千おりくだりてんでにたいまつをとほして
やくとそ人の夢にはみえにけり大極殿のやけに
けるこそ淺ましけれ大こくでんは清和天皇の御宇
ぢやうくはん十八年にやけたりしかは同き十九年正
月三日の日やうせい院御そくゐはぶらく院にてそ
とけられけるくわんきやう元年正月に叉始あつて
同き二年四月に作出し奉てせんかうなし奉たり
しを又後れいぜん院の御宇てんき五年二月廿六
日にやけたりしかはぢりやく四年八月にこと」六七オ

はじめあつて同き十月十日の日御むねあげとは
さだめられたりしか共後れいせん院作りも出され
すしてほうぎよ成ぬ然を後三條の院のぎょうゑん
きう四年四月につくり出し奉て同き十五日に
せんこうなしまいらせけりれい人がくをそうし文
人しをたてまつるいまは國のちからもおとろへて
其後はつゐにつくられす

平家物語巻第一終　」六七ウ

寛永三年の春の比藤田検校
城慶加賀國にて筑紫方検校城一
用ゆ雲井の本と奥書侍る平家
物語を求侍き此本則其雲井の
本を写畢筑紫方検校城一本と奥
書侍る故に藤田検校城慶此本を
用て八坂方の平家と号す　」六八オ

平家物語巻第二目録

座主流し
一げう
西光がきられ
こけうくん　あい　少將のこひうけ
大けうくん　付　ほうくわ
新大納言のなかされ
あこやのまつ
新大納言のしきよ
徳大寺うつくしままふて
山門めつはう　付　善光寺ゑんしやう
やすよりのつと　」一オ
そとばながし
そぶ　」一ウ

平家物語巻第二

座主流し

安げん三年五月五日天だい座主めいうんたい
そうじやうくじやうをちやうじせらるるうへ蔵人
を御つかひにてによいりんの御ほんそんをめし
かへして御ぢそうをかいゑきせらるすなはちし
ちやうのつかいをつけてこん度神よ内裏へふり
奉るしゆとのちやうぼんをめされけりこの事は
加賀の國にさすの御坊りやうありこくしもろ
たかこれをてうはいのあひだそのしゆくいに依て
大しゆをかたらいそせうをいたさるすでにちよう
かの御大事にをよふよしさいくわうほうし」二オ

ぶじかざんそうによつてほうわう大きにげきりん
ありけりことにぢうくわに行はるへしと聞
ゆめいうんはほうわうの御きしよくあしかりけれ
はゐんやくを返し奉つてさすをじし申さる
おなじき十一日鳥羽院の七のみやかつくわいほう
しんわうてんだいざすにならせ給ふこれはしや
うれんゐんのたいそうじやうきやうげんのおんで

しなりおなしき十二日せんざすしよしよくをと
どめらるるうへ検非違使二にんをつけて井に
ふたをし火にみつをかけすいくわのせめに
をよぶこれによつて大しゆなをさんらくすと聞え
しかば京中又さわきあへりおなじき十八日大」二ウ

じやうだいじん以下のくぎやう十三人さんだいし
てぢんのざにつきさきのざすざいくわの事きぢ
やうあり八てうの中なごんながかたのきやうそ
のときはいまださだいべんのさいしやうにてばつ
ざに候はれけるがすゝみ出て申されけるはほつ
けのかいじやうにまかせしざい一とうをげんし
をんるせらるへしとはみえて候へどもさきのざす
めいうんはじやうぎやうじりつなる上けんみつけ
むがくして一ぜうめうぎやうをくげにさつけたて
まつり三じゆじやうかいを法皇にたもたせたてま
つるあるいはをんきやうのしなりあるひは御か
いのしなりぢうくわのをんるにおこなはれむ事」三オ

みやうのせうらんはかりかたしされはげんぞくお
むるおもともになため申さるべきかといさゝかはゝ
かる所もなふ申されたりけれはたいざのくぎや
うみなながかたのきやうのぎにどうずとはの給ひ
あはれけれともほうわうの御いきとをりふかかり
けれはなをぢうくわに思食さだめけり僧をつみす
るならひとてどゑむをとつてげんぞくせさせ奉り
大なごんのたゆうふち井のまつゑたといふぞくみ
やうを付られけるこそうたてけれ同き廿日せんざ
すをはすでに伊豆の國へ流し奉るへきよしきこえ
しかは入道しやう國も此事なだめ申さんとて
ゐんざん申されたりけれとも法皇御風の心ちと」三ウ

て御前へもめされさりければいきとをりふかけ
にてそ出られける同き廿二日せんざすをはけふす
でにみやこのうちをおい出し奉るべしとてをつ
たてのくはん人りやうそうしとうしらかわの御
ほうに参りむかつてこのよし申たりければせん

ざすすこしもやすらふべきにあらすとていそぎ
御坊を出させ給ひその日はあわたぐちのほとり一
さいきやうのべつしよになく〳〵立そしのはせ給ひ
ける其程に山門の大しゆ大かうどうのにわにしゆ
ゑしてせんきしけるは西光がむしつのざんそうに
よつてこそかやうにはをこなわるれされは我らか
かたきはさいくわうほうし父子なりとてかれら」四オ

おや子かみやうじをかいてこんぼんちうだうに
おはしますごんびらだいじやうのひだりの御あし
の下にふませ奉りねがはくは十二神じやう七
千夜しや時こくをめくらさす西光ほうしふし
がいのちをめしとらせたまへやとおめきさけむて
しゆそしけるこそおそろしけれ同き廿三日せんざ
す一さいきやうのべつしよをなく〳〵たちそ出させ
給ひけるさしもほうむのだいそうじやう程の人に
かうぞめのさころもをはきせ奉りながらてん馬の
うたてけなるにのせ奉りおつたてのくわん人り

やうそうしらかさきにけたて奉てけふをかぎり
にせきのひがしへおもむかれける御心の中おし」四ウ

はかられてあはれなり大つのうち出のはまにもな
りしかばもんじゆろうののきばのしろ〳〵とし
てみえけるを二めとも見給はす袖をかほにおし
あてなく〳〵そこをそすぎられける中にもぎ
をんのべつたうてうけんほうゐんのいまだそのこ
ろごんだいそうづにておはしけるがせんざすの御
なごりをおしみ奉りあはづまでうちをくり奉て
歸られけるにせんざすてうけんのはる〳〵とこれ
まてとぶらいきたり給へる心ざしの程をかんし給
ひてねんらい御しん中にひせられけるてんだい
ゑんしゆのひほう一心三ぐはんのもんならびにけち
みやくさうぜうのしだいをてうけんにさづけらる」五オ

そも〳〵くこのひほうと申はしやくそんふぞくので
しはらないこくのめみやうびくなんてんちくのり

うじゆぼさつよりこのかたしだいにさうでんし
きたれりしかるをけふのなさけにてうけんにこれ
をさつけらるさすが我朝はそくさんへん地のさか
へぢよく世まつだいとは申ながらてうけんこれ
をふぞくしてありかたさにほうゑのそでをかほ
にあてなく〳〵歸り給ひけりこのめいうんと申奉る
はむらかみのてんわうにだい七のわう子ぐへいし
むわうに五代のそんこがの大なこんぬきみつの
きやうの御子なりじやうぎやうぢりつなるうへけ
むみつけんがくしてならひなきかうそうにてまし」五ウ

〳〵けれは六せうじのべつたうてんわうしの
べつたうをもかね給へりにんあん三年二月十
五日てんだいにならせ給ふそのときあへのたい
しん此みやううんを見奉てぎやうとくのほどは有
がたけれともたゞし御なこそこゝろへられねめい
うんはかみに日月のひかりをならへてしもにく
もありとそなんし申けるむかしでんげう大し

中だうのはうざうにこめられたりけるはう一
しやくの箱ありしろききぬにてつゝまれたりか
の中にわうしにかけるもん一巻あり是はでんげ
うだいしまつだいのざすのしだいをかねてあ
そはしおかれたり代々のざす御はいだうの時かの」六オ

ふたをあけもんをひらいてわれなのある所まては
見給てそれよりをくおはみすしてまきおさめて
おかるゝならひありされは此めいうんも御はいだ
うの時かのふたをあけもんをひらいてみ給ふにぎ
しんくわしやうよりこのかたてんだいざすはし
まつて五十五代めいうんと申御なありか程めて
たきかうそうにてまし〳〵けれともいかなるつみ
のむくひにかいまるざいせられ給ふらん去程に山
門の大しゆ大かうだうのにわにしゆゑしてせん
ぎしけるはでんげうじかくの御事は中〳〵
申にをよはすぎしんくわしやうよりこのかた天
だいざすはじまつて五十五代いまだるざいのれ」六ウ

いをきかすつら〳〵事の心をあんするにさん
ぬるゑんりやくのころほひくわんむてんわうでん
げう大し御ちぎりをむすばせ給ひくわうていは
ていとをたて大したうざんによぢのぼりこの
ところに四めいのけうぼうをひろめ給ひしより
このかたながく五しゆうのによ人あとたえて三千
のじやうりうへきよをしめたりみねには一ぜう
どくじゆ年ふりてふもとには七しやのれいげん
あらたなりかの月しのりやうぜんはていとの
とうぼくにそばたつてだいしやうのゆうくつたり
じついきのゑいがくはわうじやうのき門にあたつ
てごくのれいちたりされば代々のけんわうじ」七オ

しんみなこの所にだんぢやうをしむ末代といはむ
からにいかてか我山のくはんじゆをた國へうつさ
るべきこは心うしなんとおめきさけふ程こそあり
けれ三千のだいしゆ一人ものこらずみなひかしさ
かもとにおりくだるその後三千のだいしゆ十ぜん
じごんげんの御前にしゆゑしてせんぎしける
はおつ立のくはん人りやうそうしらかあんなれ
は我らこんどあわづにゆきむかひる人をうはい
とゝめ奉らん事ありかたしいまは十ぜんじごん
げんの御ちからのほかは又たのみ奉るかたなしと
てかんたんをくたひていの奉りけるにこゝにぜう
ゑんせつしかわらわにつるまるとてしやうねん」七ウ

十八さいになりけるか身じんをくるしめ五たい
よりあせを流しわれに十ぜんじごんげんののり
ゐさせ給へりとてたくせんしていはくしやう〳〵
世々にこころうし末代といはむがらにいかでか
我が山のくわんしゆをたこくへはうつさるへき
さらんにとつてはわれ此やまのふもとにあとを
たれてもなにかはせんとなり大しゆずいきの
なみたを流しまことのれいげんにてましまさは我
らしるしを奉らんまづ一のずいさうをみせしめ給
へとてをもてにたちならびたるらうそう千よ人

かてんでにもちたるじゆすどもを大ゆかの上へ
そなげあげたるくだんの物つきはしりめくりつか」八オ
のごとくにとりあつめてすこしもたがへすもと
のぬしにくばりわたすだいしゆいまは十ぜんじ
ごんげんのれいげんあらたにまし〳〵けり我ら
こんどあわづにゆきむかひ流人をうばいとゝめ
奉らんことうたがいなしとよろこうていさみをな
してそむかひけるあるひはへう〳〵たるしが
からさきのはまぢにあゆみつゝけるだいしゆも
ありあるひは山だやはせのこしやうにふねをし
出すしゆともあり大せいうんかのことくにむかひ
けれはさしもきびしげなりつるおつたてのくはん
にんりやうそうしらざすをばあわづのこくぶん
じのみだうの前にすておき奉てみなちり〳〵に」八ウ
こそなりにけれ大しゆ參りたりけれはせんざすの
給ひけるはちよくかんのものは月日のひかりに
だにあたらずとこそうけたまはれいかにいはん
や時こくをめくらさすけふすてにみやこのうち
をおい出すべしといふゐんぜんせんじのなりぬ
るうへはすこしもやすらふべきにあらすしゆと
とう〳〵歸りのぼり給へとてはしちかふゐ出て
の給ひけるはさんだいくわいもんのいゑをいて四
めいけい〳〵のまどにいつしよりこのかたひろく
ゑんしゆうのけうぼうをがくしけんみつのりやう
しうをまなんでひとへにわか山のこうりうをのみ
思へりしゆとをはごくむ心ざしもふかゝりし又こ」九オ
くかをいのり奉ることもあさからさりしりやう
しに山上山わう七しやもさためてせうらんし給ふ
らんつみなくしてとがをかうむる事これひとへ
の前世のしゆくしうとのみ思へば世おもひとおも
かみをもほとけをもうらみ奉らずしゆとの是まて
はる〳〵ととふらひきたり給へるはうしこそい
つのよまてもわすれかたけれとてかうぞめの御

ころものそでしぼるはかりにみえられけれは大
しゆもみなよろひのそでをそぬらしける大しゆ御
こしさしよせいまはとう〳〵めさるべう候と申
たりけれはせんざすの給ひけるはわれすてに流人
の身としていかてかちゑふかきしゆがくしややご」九ウ

となきだいとくたちにかきささげられてはのほ
るべきたとひかへりのぼるともわらぐつなんどし
ばりはきておなじうあゆみつゝけきてこそのぼる
へけれとてさうなふのり給はすこゝにさいたう
のぢうりよかいじやうばうのあじやりゆうけいと
てそのたけ七しやくはかりありけるがふしなわ目
のよろひのかねませたるをくさずりながにきな
しくわがたうつたる三まいかふとのおをしめし
らゑの大なぎなたのさやをはついてつゑにつき
はるかのごぢんに立たりけるかかぶとをはぬい
てうしろへかつはとなけけるを下人のほうし
とつてけり大せいの中をおしわけ〳〵せんざす」一〇オ

の御前につつとまいりだいのまなこをみいから
かしざすをはつたとにらみ奉つてあなあさましそ
の御こゝろにてわたらせ給へはこそかゝるうきめに
はあはせ給へとう〳〵めさるべう候とて御手をと
つてあらけなくひつたてまいらせけれはざすあま
りのおそろしさにやいそき御こしにそめされける
だいしゆせんざすとりえ奉たる事をよろこふて
いやしきほうしばらにあらずちゑふかきしゆ
がくしややことなきだいとくたちかきさゝげてそ
のぼりけるさきこしをはゆうけいかぐ人はかはれ
ともゆうけいはかはらすごぢんはよはれともせん
ぢんはつかれすこしのながゑもなぎなたのゑもをれ」一〇ウ

よくだけよともつまゝにさしもさかしきひひがし
さかのへいぢを行がごとくにて大かうだうのに
わにそかきすへたるその後三千の大しゆ又大かう
だうのにわにしゆゑしてせんぎしけるはわれら
こんど流人をうばいとゝめ奉ていかてかわか山の

くはんしゆとはあがめ奉るべきとせんぎしける所
にゆうけい又さきのことくにすゝみ出てそれ我
が山は日ぼんぶさうのれいちんごこくかのだう
ぢやうなり山わうの御いくわうさかんにしてぶつ
ほうわうぼうごかくなりさればしゆとのいしゆ
もよさんにこえいやしきほうしばらに至る
まてよもつてこれをかろんせずちゑあつきにして」一一オ

三千のくわんしゆたりとくぎやうをもくして一山
のわじやうたり我らこんとけんみつのあるじを
うしなひ奉つてけいせつのつとめをこたらん事
とうだいこうぶくおんしやうのあざけり山上らく
中のいきとをりにあらすやゆうけいこんどち
やうぼんにしよせられきんごくるざいかうべを
はねられ參せん事こんじやうのめんぼくめいと
のおもひてなるへしとてなみだをはら〳〵と流しけ
れはだいしゆもつとも〳〵とて又御こしかきさ
さげ奉てとうだうのみなみだにみやうくわうはう

へいれ奉るそれよりしてそゆうけいをばいかめ
ばうとは申けるゆうけいがでしのゑけいりつ」一一ウ

しをは時の人こいかめばうとそ申へけるされ
ばときのりうさいおはいかなるこんけの人ものか
れ給はさるにや大たうの一ぎやうあしやりはげん
そうくわうていの御ぢそう成くわうていのきさき
やうきひになたち給へる事ありこれあとかた
なきむしつのざんそうによつてくわら國へそなが
されけるくだんの國へは三のみちありゆうちだう
りんちだうあんけつだうとそ申けるゆうちだう
は御幸みちりんちだうはざう人のかよふみち中
にもあんけつだうと申はぢうぼんのものをつか
はすに七日七夜か間月日のひかりをみすして
ゆくみち也一ぎやうぢうぼんの人なれはとてかの」一二オ

あんけつだうよりそながされけるみやう〳〵とし
てひとり行かうほに千どきよひしん〳〵として

山ふかくたゝかんこくの一こゑばかりにてこけの
ぬれきぬほしあへす天たうむしつのつみをあはれ
ませ給ふ叟なれは九ようのかたちをげんして一ぎ
やうをてらし給ふ時に一きやうみぎのゆびを
くひきつてひだりの袖に九ようのかたちをそうつ
されけるわかんりやうてうにしんごんのほんそん
たる九ようのまんだらこれなり

西光かきられ

今度山門のだいしゆのさきの座主とりとゝめ奉た
る事を法皇きこしめされていとゝやすからすお」一二ウ

ほしめす所にれいの西光か申けるはむかしより
山門のだいしゆははつかうのみたりかはしきうつ
たえ仕候事いまにはじめすとは申ながらこれ
ら程のらうぜきをはいまだ承をよはすよく〳〵御
はからい候べしこれを御いましめ候はすは此のち
は世が世にても候ましと我身のたゝいまほろびん
するおもしらす又山わう大しのしんりよにもはゝ
からすかやうに申てしんきんをなやまし奉る
そうらんもからんとすれは秋のかせこれをやふり
わうしや明なむとすれはざんしんこれをくらます
ともいへりまことなるかなざんしんは國をみだり
とふはいゑをやふるともかやうのことおや申へ」一三オ

き去程に法皇新大納言なりちかのきやう以下御
きんじゆの人々そのほかほくめんのともがらに仰て
山せめらるへしとそ聞えし山門のだいしゆこの
よしつたへうけたまわつて我らわうどにはらま
れながらさのみぜうめいをたいかんすべきにあら
すとてない〳〵はゐんぜんにしたかひ奉るしゆと
もせう〳〵有なんと聞えしかはせん座主はみやう
くわうはうにおはしけるかこのよしをきゝ給ひて
又いかなるうきめにかあはんすらんとてやすき
心もし給はすされともるざいのさたはながりけり
去程に新大納言なりちかのきやうはたうじ山門の
さうどうによつてわたくしのしゆくいをはしはら」一三ウ

くをさへられたりそも〳〵ないけしたくはさま〳〵
なりしかとも大かたのぎせいばかりにてはいか
にもかなふべうもみえさりけるにむねとたのま
れたりけるつの國源氏多田蔵人行つなこの事
むやくなりと思ふ心そおきにけるゆぶくろのりや
うにとて送られたりけるぬのをはひたれかたびら
にたちぬわせいへの子郎どうともにきせつゝ目
うちしばたゝいてゐたりけるかつら〳〵平家のは
むじやうを見るにたやすくかたふけかたし又大
なこん殿のかたらはるゝ所の軍兵いくほどなしゆ
きつなよしなき事にくみしたり此事天下
にもれなはまつゆきつなさきにうしなはれなんす」一四オ

されば人のくちよりもれぬさきにこの事平家
へかへりちうしていのちいけふと思ければ同き五
月廿九日の夜にいつて入道相國の宿所西八條
殿へ參り行つなこそ申べき事ありて參り
て候へとゆい入たりけれは入道何事そあれきけと
て主馬のはうくはん盛國を出されたり人つてには
申ましき事なりとゆうあひださらはとて入道
出あひたいめんし給ひてこの夜ははるかにふけぬ
らんにそも何事そとのたまへは行つなひるは人
めのしげう候あひた夜にまぎれて參て候此程
ゐん中の人々の兵ぐをとゝのへ軍兵あつめられ
候をばいまだしろしめされ候はぬやらんと申」一四ウ

けれは入道世にも事もなけにてわふそれは法皇
の山せめらるへしとこそきけとのたまへは行つ
なゐうつて小こゑになりいやそのぎては候はす
たうじ御きんじゆの人々の御一門をかたふけまい
らせんとこそきせられ候へと申たりけれは入道
以外におどろき給ひてたてさやうの事ともをは
いんにもしろしめされたるか申にや及候しつ
しのべつたう新大納言殿の軍兵あつめられ候ひし
にもゐんぜんとてこそもよおされ候ひしかしゝ
のたにてやすよりかと申て俊寛かかう申て

西光かとふるまふてなと始よりありのまゝにもさ
しすぎて申ちらしいとま申てまかりいつ　」一五オ

入道以外の大こゑをもつてさふらいともよひのゝ
しり給ふおそろしき行つななましいなる事
申出して我身もそのせう人にやひかれんすらん
とおそろしう思ひければ人もおはぬにとりばか
ましつゝ大のに火をはなつたる心ちして門前に
はしり出てばばなる馬にうちのつていそぎ宿所
へにげ歸る入道さだよしとめすちくごのかみさた
よし御前へ參りかしこまる入道やゝさだよし京中
にたうけかたふけうとするむほんのともがらどもが
みち〳〵たんなるそ人々にもふれ申せさふらい
ともめすべしとの給へはさだよし承て京中をもよ
おしけるに小松殿ばかりこそ何事にもさわぎ給」一五ウ

はぬ人にて參られね一門の人々にはう大將むね盛
三位中將とももりとうの中將しげひらさ馬のかみ

以下のくきやうてんしやう人みなかつちうをよろ
ひきうせんをたいしてわれも〳〵とはせまいらる
其外さふらひともうんかのごとくにはせあつまる
夜の程に西八條殿には六七千きにこそなりにけれ
あくれは六月一日のまたくらかりけるに入道
けんひいしあべのすけなりをめしてやゝすけなり
ゐんの御所に參りだいぜんのたいぶよひ出しそう
せうずるやうよな御きんじゆのともがらどもかあま
りに過ぶんにてあまつさへじやうかいをかたぶ
けふとけつこう仕候を一々にめしとつて事の」一六オ

子さいをたつね承り申さうするをはゐんには
しろしめさるましう候と申せとてつかはさる
すけなりゐんの御所にまいりだいぜんの大ぶの
ぶなりをまねいて此よし申たりければ法皇あ
はれこれはひころはかりしことのはやもれきこえ
たるにこそとおほしめすよりあさましくてこは
何事そとはかりにてふんみやうの御へんじもなか

りけれはすけなりさればこそとむやくにていそぎ
歸りまいるべきよしをいひいれつゝ西八條にき
さんして此よし申たりけれは入道されはこそよ
も御へんじはあらじ行つなはまことをいひ
けり此事つげしらせすは入道あんをんにやはあ」一六ウ

るべきとてやがてなんばせのおをめしてむほんの
ともがらともからめとるべきやうを一々しだいに
下らせらるまつ中の御門からすまるの新大納言
なりちかのきやうのもとへざうしきを以てきつ
とたちよられ候へいさゝか申あわすべき事の候
との給ひつかはされたりければ大納言あわれ是
は法皇の山せめらるべき御けつかうあるを申
なためられんするにこそ御いきとをりふかけ也
いかにもかなふまじき物をとて我身の上とは
つゆしり給はすないきよげなるほう衣たをやか
にきなしつゝ八ようのくるまのあざやかなるに
のり給ふうしかいざうしきに至るまてつねよりも」一七オ

はなやかにてそ出られけるそもさいごとは後にそ
思しられける大納言西八條ちかふなるまゝに其へ
むをみ給へは物のぐしたる兵どもか四五ちやう十
ちやうに所もなくみち〳〵たる大納言こはなに支
やらんとむねうちさはぎ門をさし入てみ給へは門
のうちにも軍兵ひまはざまもなくみち〳〵たりち
う門のくちにはおそろしげによろふたるむしや二
人大納言殿にたちむかい奉り大納言殿の左右の手
をとつてひつはりにわへひきおとし奉てこはい
ましめ奉るべうもや候らんと申とき入道れんち
うよりみ出し心ちよけにてあるへからすとの給へ
はゑんのうへえひきのほせ奉つて一ま成所におし」一七ウ

こめ奉る大納言たゝゆめの心ちそし給ひける御と
もに候へけるしよ大ぶさふらひともこはいかにと
あわてけるか大ぜいにをしへたてられて物をた
にも申さすうしかいさうしきいろをうしない
くるまをすててみなちり〳〵にとこそなりに

けれこれを始として平家のさふらいとも二百よき
三百よきところ所におしよせ〳〵むほんのともがら
とも一とにみなからめとるまつあふみの中將入道
れんじやう山しろのかみもとかねしきふのたい
ふ正つなそう判官のぶふさしん平判官すけ行平
判官やすよりほうしやうじのしゆぎやう俊寛そう
つもからめられてそ出きたり西光法師此由を聞」一八オ

て我身のうへとや思けん此事ゐんへそうせんと
ていそぎむちあぶみあはせてはせ參る平家のさふら
ひともみちにて行あふたりいかに御坊西八條殿
よりめしのさうぞきつと參り給へといひけれは
西光これはいさゝかゐんへそうすべき事あつてま
いり候いかさまにもやがてまいらむする候とてう
ちすぎんとすにつくひ入道めが何事をかそうすべ
きさないはせそといふまゝに爲よりとつてひき
おとしてからめとる日のはじめよりとういよりき
の者なりけれはしたたかにいましめて入道相國の

宿所西八てうへさげて參り御つぼのうちにそひ
つすへたる入道大ゆかに立てしはらくにらみあな」一八ウ

にくやじやうかいをかたぶけふとせしやつはらと
もかなれるすがたのおもしろさよしやつこゝゑひ
きよせよやとてゑんのきはにひきよせさせまつ
大きなるむちをもつて心のゆく〳〵うつての給ひ
けるはやれをのれかやうなる下らうのはてを君の
めしつかはせ給てなさるましきくはんしよくをた
ふて父子ともに過ぶんのふるまひをせしやつ
原と見しにあはせてあやまたぬ天だい座主流ざい
に申おこなひあまつさへじやうかいをかたふけふ
とせしむほん人にくみしてけるなりひの始
よりみな人しつたりいさゝかつゝますそのやうをす
みやかに申せとのたまへは西光もとより勝たる」一九オ

大かうのものなりけれはちつともいろもへんせず
わるひれたるけしきもなくゐなおりいて〳〵西光

のあつこうせんとてあざわらつて申けるはいゝ
やさもさうぬそとよしつしのべつたう新大納言殿
のゐんせんとて軍兵あつめられ候ひしあひだゐん
中にめしつかはるる者の身なれはくみせぬとは
申ましそれはくみしたりたゞし御へんはみ
みにとゝまる事をものたまふ物かな他人の前は
しらす西光なんどか前にてさやうの過ぶんのこと
ばをゑこそのたまふまじけれみさうさつし事
か御へんはこぎやうぶきやうの子にてありしか十
四五までは出仕もせすこ中の御門のとう中納言」一九ウ

かせいのきやうのもとに立より給ひしをは京
わらんべはれいのたか平太とこそわらひしかゐん
じほうゑんのころかとよ御へんのちゝ忠盛のは
かりこといみしうしてかいぞくのちやうぼん人四
十よ人からめて出されたりしけんじやうに御
へんのいまだ其ころ十八か九にて四いして四いの
ひやうへのすけといはれ給ひしをこそ人過ぶん
なりと申しかひころはてんじやうのましわり
をだにもきらはれ給ひし人の子そんの今はきん
じきざつはうをゆりれうらきんしうを身にまと
ひあまつさへ太政大臣になりあかつて君をも君
とせずしんをもしんとせぬこそめさましけれさ」二〇オ

ぶらい程のものゝじゆりやう検非違使になる叉
せんれいはうれいなきにあらすされは何事か過
ぶんなるべき入道殿とはゝかる所もなふいゝちら
したりけれは入道あまりにはらをすへかねて
しはしは物をもの給はすやゝあつて入道のたまい
けるはしやつそこにひきふせよやとてゑんのき
はにあをのけにひきふせさせしやつらを物はき
ながらむす〳〵とふんてしやつかかうべさうなふ
きるなよく〳〵きうもんして事の子さいをたつ
ねとふてのちしたをぬけくちをさけとそいかられ
けるまつらの太郎いへとしと申者ちうにくくつ
て出にけり其後あし手をはさみがうきにかけて」二〇ウ

さま〳〵にいためとふ西光もとよりあらかはさつ
しうへきうもんはきひしかりけり事の子さ
いのこりなふこそおちたりけれはくじやうかみ四
五まいにぎせられけりさて五條西のしゆしやか
にひき出ししたをぬきくちをさきついにかうべを
はねられけりじなんこんどう判官もろつねきんこ
くせられたりけるをひきいだいてぢうせらるをと
こ左衞門のぜうもろひらともにかうべをはねられ
けり丼にらうどう三人きられにけりちやく子かが
のかみもろたかをばおわりの井どたへ流された
りけるがどう國のちう人をぐまのぐんしこれす
へに仰てうたせらるもろたかさん〳〵にたゝか」二一オ

ひけるがかなはしとやおもひけんたちに火かけ
じがいしてこそうせにけれこれらはみないうかひ
なき者のひいてあやまたぬ天だい座主るさい
に申行なひ山わう大しの神はつみやうはつ
を立所に候てわか身もしそんも悉ほろひぬるこ
そあさましけれ

こげうくん

去程に新大納言なりちかのきやうは一まなるところ
にをしこめられてあせ水になりつゝおはしける
かあはれこれはひころはかりしことのはやもれ
きこえたるにこそたれもらしけんさだめてこれは
ほくめんのともがらともの中にもやあるらんなん」二一ウ

とおもひのこすこともなふあんしつゞけておはし
けるところにうしろのかたよりあしをとたか
らかに人のきたるをとのしけれは大納言すはたゞ
いまこれにて我いのちうしなはんとてもののふと
ものきたるにこそと思はれけるにさはなくて
入道相國そけんのころものみじからかなるに
しろき大くちふみふくみひしりつかのかたなおし
くつろけてさすまゝに大納言のおはしけるうし
ろのしやうじをあらかにさつとあけてしはらく
にらまへてそ立給ひけるやゝあつて入道いかに御

へん去ぬる平治にのぶよりのきやうかむほんの
とうしんによつてすでにちうせられ給ふへかりし」二二オ
お小松のだいふかやう〳〵に申てくびをつき
給ひし人そかしいつしか其おんをわすれてあ
まつさへじやうかいをかたふけんとのけつこうと
そしかるべからねおんをしるを人というおんをし
らぬをちくしやうというそひころのむほんけつか
うのしだいをたゝいまたつね承り申さうする
はいかにとのたまへはなましいに大納言いかさま
にもそれは人のざんげんにてそ候らんくわしく
御たつねあるべう候とその給ひける其時入道やゝ
さだよしそれなりつる西光めかはくじやうもつて
まいれとの給へは承てかみ四五まいにかいたる物
おもつてまいりたり入道ひきひろけ二三へんかほ」二二ウ
とたからかによみきかせあらにくや此うへはこゝ
おなにとかあらかひ給ふべきそれよくみ給へとて
大納言のかほにさつとなけかけいそぎしやうじ
おちやうとたててそ入給ひける其後入道なんば
せのをとめされけれはつねとうかねやすまいりた
りあのおとことつてひつはりにわへひき出しあけ
てをといておめかせよとの給へは二にんの者とも
小松殿のかへりきこしめされんする所もいかゝ候へか
るらんとてふかふかしこまつてそ候ひける入道よ
し〳〵さきいつじやうかいかめいをはかるむして
だいふはなをおそろしいとやそのぎならはをのれ
らむねをこそ心へめとのたまへは二人のものとも」二三オ
あしかりなんとやおもひけん大納言の左右の手を
とつてひつはりにわへひきいだし奉り左右の御
ところくちをよせささやいていかさまにも御こ
ゑのいつべう候とてあけてはとうとおき〳〵二三
度あけおとしたりけれは御こゑ二こゑ三こゑそ出
されたりなをいましめ奉るべうもや候らんと申時
入道すこしはらゐて今はとふ〳〵やすめ申せと

のたまへはうけたまはつて兵す十人が中にとり
こめ奉て又一間なる所におしこめ奉る大納言たゝ
ゆめの心ちしてつや〳〵物もおほえ給はすその
ていめいどにてしやばせかいのざい人どもかつみ
のきやうぢうによつてあるひはごうのはかりに」二三ウ

かけられあるひはじやうはりのかかみにひきむ
けられしよさのごうによつてかしやくをくわへ
ぎやうばつをおこなはるらんもこれには過じと
そみえしせうはんとらはれとらはれてかんはう
にらぎすされたりてうそりくをうけしうぎつみせ
らるたとへはかのせうがはんくわいかんしんはう
ゑつこれらはみな高僧のこうしんたりしかとも
せう人のざんによつてくわはいのはぢをうくとも
かやうの事をや申へき大納言我身のかやうに
なりゆくにつけてもちやくし丹波の少將も今
は定てめしやこめられぬらんのこりとゝまるあと
のありさまさこそはあるらめなんとおもひのこす」二四オ

事もなふあんしつゝけておはしけるにさし
ものごくねつにしやうそくをだにもくつろけ給
はねはあせもなみだもあらそひてそなかれけるを
とくはいまたをはせぬやらんさりともよもすてを
き給わじとはおもはれけれともたれしてのたまふ
べしともおほえねはくれをもまたてつゆの身のき
ゑぬへうこそ思はれけれ小松殿はなに事にもさ
はぎ給はぬ人にておはしけれははるかに日たけて
後ちやくしごんのすけ少將これ盛をくるまのし
りにのせつゝゑふ四五人ずいじん三四人程めし
くして軍兵ともをば一人もぐせられずのとやかけ
にてそおはしたる入道をはじめ奉つて一門の人々」二四ウ

世にもあしげにみ給へばちくごのかみさだよし御
まへをついたつておとゞに參むかひ奉りこれ程
の御大事になと軍兵ともをは一人もめしぐせら
れ候はぬやらんと申たりければおとど大事と
は天下の大事をこそいへされは是はわたくし叟

なんでふ事のあるべきとて入給へばかつちうを
よろひきうせんをたいしたる者どもとみなそそ
ろいてそ候ひけるおとと中門におはして大納言
のをはする所はいつくやらんとかしここゝのしや
うじをひきあけ〳〵見給へはこゝにくもでゆふ
たる所ありこれやそなるらんとてひきあけて見給
へは折節大納言はおとどの事思出しなみだに」二五オ

むせひうつふしておはしけるかおとどさていかに
やとの給ふこゑをきゝ付て目をもちあげ世にをう
れしけに見給たるけいきごくあくじんぢうのざ
い人かぢさうぼさつにあひ奉るらんもこれには
すきしとぞみえし大納言のたまひけるはこは
何事にて候やらん身には一さいあやまつたる事
は候はねともけさよりかやうにめしこめられまい
らせてゆふさりすでにうしなはるべしとやらん承
り候さてわたらせ給ふをこそたかき山ふかきうみ
ともたのみ奉て候へ去ぬる平治にもいのちたすけ
られまいらせてその御おんいまだほうじつくし
がたふて候今度も能やうに申てたすけさせおは」二五ウ

しまし候へかしかいなきいのちだに候はゝやがて
もととり切ていかならんかた山さとにもとちこも
り一すちにごしやうぼたいのいとなみを仕候はん
と思なつてこそ候へとのたまへはおとゞいかさま
にもそれは人のざんげんにてそ候らんさりながら
今度も又よきやうに申てたすけ奉らんとこそ存
候へ重盛かうで候へは御心やすくおほしめされ候
へしとて出られけり大納言おとゞのおはしつる
ほどはいさゝかたのもしうおもはれつるかおとど出
給ひて後は世にもこゝろほそけにて又うつぶし
てそおはしける其後おとど父の御まへにおはして
さてあの大納言をばきられんするにて候やらんと」二六オ

申されたりければ入道子さいにやをよぶこの
くれをまつなりとそのたまひけるおとゞ申され

けるはあの大納言さうなふうしなはるべからす其
ゆへはかれがせんぞ六條のしゆりのだいぶけんき
のきやうしらかわのゐんにめしつかへてよりこの
かたいへひさしうへのぼり位正二位くはん大納言
にあかりことにはたうじの君のぶさうの御いと
おしみにて候なる物をさうなふうしなはるべき叉
いかで候へかるらんかやうには又きこしめされて候
とももし此事のひが給事ならはいよ〳〵ふびんのい
たりなるべし北野の天神はしへいのおととの
ざんげんによつてうきなを西かいのなみに流し」二六ウ

西のみやの大臣は多田のしんほつかざんそうに
依てその身をせんやうの雲にかくし給ふをの〳〵
むしつなりしかともるざいせられ給ひにき是みな
ゑんぎのせいしゆあんわの御門の御ひが事とそ申
つたへたるしやうこもつてかくのことしいはん
や末代におゐておやけんわうなを御あやまり有
いはんやほん人におゐてをやよく〳〵御あんを

あるべしくわしう御たつねも候へしこうくわい
さきにたゝすとこそ承候へけいのうたがわしき
おはかるむせよこうのうたかはしきをはおもん
せよとこそみえて候へかやうに申候へはしげも
りの大納言かいもをとにあいぐしたりこれ」二七オ

もり又むこなりかた〳〵したしけれは申とやお
ほしめされ候らんまつたく其ぎにては候はすたゞ世
のためいゑのためをそんぢしてかやうには申候
なりむかしさがのくわうていの御時右兵衛のかみ
藤原のなかなりかちうせられし事をみかどくわ
しみ給てしにたる者のふたゝび歸る事なし
これふびんのいたりなるへしとて保元まてはきみ
廿五代たえてひさしかりししざいをしんせい入道
しつけんのときにあいあたつて宇治のさふのし
がいをほりおこしかうべをはね大ちをわたしじつ
けんせられし事なんとはぶたうの至りあまり
なるまつり事とこそ見候ひしかされはこじんの」二七ウ

ことばにもあまりにしざいを行なへばかいだ
いにむほんのともがらたえすと申しにあはせて
中二年あつて平治に事おこりしんせい都の
うちを出つゝいきながらうづまれいくほどなふて
ほりおこしかふべをはね大ちをわたいてごくもんに
かけられし事なんとはいつしかそのむくい
かとおぼへて返々もおそろしうこそ候へ是はさせ
るてうてきにても候はすせめてみやこのうちを出
されたらんにことたり候ひなんす太政大臣まて
もきはめさせ給ひぬれは御ゑい花殘る所は候はね
とも子々そん〳〵まてのはんじやうこそあらまほ
しう候へぶそのぜんあくは子そんに及ひしやく」二八オ

ぜんのいゑによけいありせきあくのかどによわう
とゝまるとこそ承候へなんとやう〳〵に申され
たりけれは入道けにもとや思われけんしざいを
は思そとゝまり給ひける
あひ

其後おとゞ中門に出さふらひともにむかつて
のたまひけるはたとひ入道ふしぎをげぢし給ふ
とものあの大納言さうなふきるべからすひが事して
重盛うらむな御はらのたちのまゝに物さはかしき
御事ならはさだめて御こうくわいあるべしさるに
てもつねとうかねやすがけさあの大納言にあらけ
なくあたりつる事こそ返々もきくわいなれかた」二八ウ

い中の者ともは万の事にかかるそとよとの
給へはなんはもせのおもされはこそけさわれらか
申つる所もこゝぞかしとてふかうおそれいりて
そ候ひけるおとゞはかやうに下ぢしつゝ小松殿
へそ歸られける去程に大納言の倶に候ひけるしよ
だいぶさふらひとも中の御門からすまるの御
宿所に歸り參つてかみにはけさよりして西八條殿
にめしこめられさせ給てゆふさりすでにうしなは
れさせ給ふへしとやらん承り候又少將殿を始奉
てきんだちをもみなむかへ參らせんとぎせられげ

に候と申たりければきたのかたわか君ひめ君
にうばうたちきもたまいしをうしないてこゑ〳〵」二九オ

にをめきさけひ給けりにうばうたちいまは六波羅
よりついふくのくわん人ともの參りむかひ候らん
にいつくへもしのはせ給はてと申あはれけれは
きたのかた今これほどになりぬるうへはいづかた
へかしのふべきをなし一夜のつゆときゑんこそ本
いなれさてもけさをかぎりとしらざりつる事こ
そかなしけれとてふしまろひてそなかれけるすて
に六波羅よりついふくのぶしともの參りむかふ
よし聞えしかばきたのかたはちかましくうき
めをみんも心うかるべしとて十さいのわか君八さ
いのひめきみひとつくるまにとりのつていつく
おさすともなくやり出し大みやをのぼりにきた」二九ウ

山のほとりうんりんゐんへ入奉りあさましけなる
そうばうにおろしおき奉る御ともの人々は身々

のすてかたさにいとま申てみなちり〳〵にこ
そなりにけれきたのかたきんたちばかり殘りとゝ
まらせ給ひてくれゆくかげを見給ふに付もあはれ
や大納言はゆふさりすでにうしなはれさせ給ふべ
きなれはつゆの御いのちいまきほどそやと思やる
にもきへぬへし去程に大納言の年ころめしつか
はれたるさふらひにうばうめのわらは物をたにも
とりしたためすかちはたしにて門前にはしり出
みなちり〳〵にこそなりにけれ門をだにもをした
てすむまやには馬ともなみたちけれともくさかふ」三〇オ

ものもなし昨日までも門前には馬くるまのひまな
くうちにはひんかくざにつらなつてあそひたわふ
れまいかなで世を世ともせずちかきあたりの者と
もおちおそれてこそありつるに夜のまにかはる世
のならひじやうしやひつすいのことはりは目のま
へにこそあらはれたれたのしみつきてかなしみ
きたるとかゝれたるがうしやうこうのふでのあと

いまこそ思ひしられけれ

少將のこいうけ

去程に新大納言なりちかのきやうのちやくし丹波の少將なりつねはその夜しもゐんの御所にうへふ　ししていまだまかりも出られざりけるに大納言」三〇ウ

のさふらひいそぎほうぢうじ殿へ參り少將をよび出て此由申たりければ少將なとこれ程の叉お今まて宰相のもとよりはつげられぬやらんとの給ふ所にしうと宰相のもとよりつかいありこの宰相は入道相國の弟宿所は六波羅のそうもんのわきなれは門わきの宰相とそ申ける西八條よりぐし奉てきつときたれと候とふ〳〵とのたまひつかはされたりけれは少將はやこゝろへ給て御きんじゆのにうばうたちをよび出し奉つてかかることこそ候へ昨日よりせけんなにとなふさう〳〵に候ひつるをれいの山法師のくだるかなんとこそに存して候へは今はなりつねか身のうへにてこそ候」三一オ

へさても八さいにて御めにかかり十二より此御前にしこう仕てあさゆふふびんの仰まかりかふむり候ひしにゆふさり父大納言うしなはれ候はゝ成つねもおなじみちにそ行なはれ候はんすらんいま一度御ぜんへ參り君をもみまいらせたくは候へともかかる身にまかりなり候ひぬるうへは世におそれてこそまかり出候はねとそ申されけるにうばうたち御ぜんに參り此よしそうし申されたりけれは法皇なにかはくるしかるべきと一ど是へとおほせらるゝ間少將なく〳〵御ぜんへは參られたりけれとも申出さるるむねもなく法皇も又仰出させ給ふかたもなかりけりさてしもあるべき」三一ウ

ならねは少將いとま申てこそ出られけれ法皇は少將のうしろをはる〳〵と御らんし送らせ給ひてたゝ末代こそ心うけれ又もらんせられぬ御叉もやあらんすらんとて御みだにむせはせおはします其外御所中の人々も少將の袖にすかりたもと

にとりつきみななみたをそながされける少將はけ
さゐんの御しよを出るよりなかるゝなみだもつき
さるにしうと宰相のもとにおはしてまつきたの
かたのありさまをみ給ふにせんかたなけにそ
みえられけりきたのかたはちかふさんし給ふへ
きにて月ころも何となふうちなやみ給ひけるか
又この事さへうちそひていのちもきへ入心ちそ」三三オ

せられける少將のめの人に六條と申にうばう
あり少將のそでをひかへ奉て君のちのなかにわた
らせ給ひしをとりあけいたきそたてまいらせて
よりこのかたわか身の年のおい行おもしらすい
つかとくしておとなしくならせ給はんすらんと申
あかし申くらしことしは廿一年はなれまい
らせさふらはすいんへもうちへも御參あつてをそ
ふ出させ給ふをだにかつうは御こひしうもかつう
は又おぼつかなふも思ひまいらせつるにたゝいま
西八條へ出させ給ひていかなる御目にかあはせ給

はんすらんとてなきけれは少將いたふなけいそ
宰相のさてましませはいのちばかりをば申て」三三ウ

たすけ給はぬ事あらしとはのたまへとも六條た
だもたえこかれたをれふしなくよりほかの事そ
なきさる程に西八條よりつかいしきなみに
立ければ宰相さらは出てこそともかうもならめ
とてくるまにのつてそ出られける少將もどうしや
してこそ出られけれ宰相のうちの上下なん女みな
くるまよせまてはしり出なき人をいたすかやうに
こゑをあけてそなかれける保元平治よりこのかた
平家の人々たのしみさかへは有しかともうれ
へなけきはなかりしに此宰相ばかりこそよしな
きむこゆへにかかるなけきはし給ひけれさる程に
宰相西八條におはしてあんないを申されたりけれ」三三オ

は入道少將をは門のうちへはかなふましとの給ふ
間そのへんちかきさふらひのもとにおろしおき

奉て宰相はかり入給ふいつしか兵とも少將をうち
かこみ奉つてしゆごし奉るさしもさりかたふた
のまれつる宰相にははなれ給ぬ少將の心のうちさ
こそはたよりなかりけめ宰相中門におはして出あ
はるゝかとたいめんをまたれけれとも入道とみにも
出られさりければげんだゆふの判官すへさだを以
て申されけるはのりもりよしなき者にむすほゝ
れて今さらくやしう候へどもちから及ひ候はすか
れにあひぐせさせて候ものゝうちなやむ事の候
か又此事さへうちそへていのちもあやうくこそ」三三ウ

候へあはれかれか身々とならん程丹波の少將をの
りもりにあづけさせおはしまし候へかしのり
もりかうで候へはなしかはひが事せさせ候べき
と申されたりけれはすへさだ御まへにまいつて
このよし申入道あはや又れいの宰相の物にも心
へぬ事をのたまふ物かなといかれるさまにてと
みにも返事し給はすやゝあつて入道のたまひける

はそも〳〵かの新大納言なりちかのきやうといつはむ
ほんをくわたててたうけをかたむけんとすされ
ともこの一門うんつきさるによつてこの事はや
くあらはれたりもし此むほんとげましかは御へん
とてもあんおんにやをはすべき此少將は新大納言」三四オ

かちやくしなりうとふもおはせよしたしうも
をはせよゑこそなだめ申ましけれむこも子もま
ことの時はたゝ身にまさる事やあるとその給ひ
けるすへさだ宰相殿に此由を申せは宰相かさねて
申されけるは保元平治よりこのかた度々の合戰に御
いのちにかはりまいらせ候ぬ此後もあらきかせ
おはまつふせぎまいらせんとこそ存候へたとひ
のりもりこそ年おひて候ともわかき子ともあま
たもちて候へはなどか一はうの御かためになり
まいらせでは候べきそれにしばらく少將をのり盛に
あつけさせおはしませと申に御ゆるされもなき
はよくのりもりをもふたこゝろある者におほし」三四ウ

めされたるにてこそ候へこれ程うしろめたい物
におもはれまいらせてのりもり世にありても何に
かはし候へきあはれ出家のいとまを給て高野こか
わにもとぢこもり一すぢにごしやうぼだいのいと
なみを仕候はやよしなきうき世のましはりなり世
にあれはこそのそみもあれのそみのかなはねはこ
そうらみもあれしかしうきよをいとひまことのみ
ちに入なんにはとぞ申されけるすへさだ又御前に
まいつて宰相殿ははや思食きつて候そともかうも
よきやうに御はからい候へと申たりけれは入道
以外におどろき給ひてさてはさやうに宰相の出家
入道なんとまて申さるなるこそけしからねさら」三五オ

はしはらく少將を宰相の宿所におかれ候へと申
せと世にもしふ〳〵にこその給ひけれすへさだ又
宰相殿に此由を申せはあはれわか子にむすほ
ほれさらんにはなにしにかこれほど心をばくだ
くべきよしなかりけるをんな子かなとてなみだに
むせびてそ出られける少將殿うけ奉てさていかに
候とのたまへは宰相さればとよ入道あまりにいか
つてのり盛にはついにたいめんもし給はすいかにも
かなふましかりつるをのりもりか出家入道なんと
まて申たれはにやらん其きならは御へんをはし
はらくのりもりにあつくるとはの給へとも行衛た
のもしからすとそのたまひける少將さては御めん」三五ウ

おもつてしばらくのいのちのたすかり候ごさんなれ
さてち、大納言の事をは何とかきこしめされた
るやらんとのたまへは宰相いさとよいかにもして
そこの事をこそ申さはやとはしつれそれまて
の事はおもひもよらずとその給ひける少將なみ
だをはら〳〵と流てあの大納言ゆふさりうしなは
れ候はんずるにおゐてはなりつねおもおなじみち
に申させ給はてとの給へば宰相世にも心くるし
けにてそれも小松のだいふのけさよりしてやう
〳〵にとり申さるなれはしはらくのいのちたす

からせ給ふやうにこそ承りつれとの給へは少將
手を合てそよろこはれけるまことに子ならさらん」三六オ

人のわが身のうへをさしおきてたれかはかやうに
よろこぶべきまことのちぎりはおや子のなかにそ
ありけるされは子に過たるたからなしとやがて
思そかへされけるさる程に宰相くるまにのつ
てそかへられける少將もけさのやうにとうじや
してこそ歸られけれ人さきにまいつて少將殿はべ
ちの御叉もわたらせ給はて歸らせ給て候と申たり
けれは宰相のうちの上下なん女みなくるまよせま
てはしり出しにたる人のいきかへりたる心ちし
てよろこびのなみたをそながされける

大げうくん

入道相國は新大納言なりちかのきやう以下御きん」三六ウ

じゆの人々其外ほくめんのともがらともに至るま
ておほくいましめをかれてもなを心ゆかすや思
はれけんあかじのにしきのひたたれにくろいと
おどしのはらまきのむないたせめそのかみいまだ
あきのかみたりし時いつく嶋の大明神よりれい
むかうむりうつゝに給はられたりけるしろかね
のひるまきしたるこなぎなたつねのまくらをはな
たす立られたりけるをわきにはさみつゝ中門
のらうへそ出られけるそのきそくゆゝしうそみえ
し入道さだよしとめすちくこのかみさだよしむ
くらんぢのひたゝれにひおとしのよろひきて御
まへに參りかしこまる入道やゝさだよしいかゞは」三七オ

からふ去ぬる保元におぢ平馬のすけたゝまさをさ
きとして一門なかはすぎ新院の味方にまいりにき
一のみやの御ことはこぎやうふきやうの殿のやう
くんにてわたらせ給ひしかはかた〳〵見はなちまい
らせかたふは存しつれともこゐんの御ゆいかい
にまかせてこの御かたにまいりさきをかけたり
きこれ一の奉公にあらすや又平治元年十二月

のふよりよしともかむほんの時いんうちをしこめ
奉つて天下悉くらやみとなりたりしにも入道い
のちをすてすしてはいかにもかなふましかつし
あひだ味方にてぞくとをうちたいらげのふよりよ
しともをちうりくしつねむねこれかたをめしいま」三七ウ

しめしに至るまて君の御ためにいのちをすつる
事度々にをよふされば人いかに申とも此一門
をはいかてか七代までも思食すてさせ給ふべきそ
れになりちかというむようのいたづら者西光といふ
下せんのふたうじんか申す事に君のつかせ
おはしましてたうけをかたぶけんとの御けつこう
こそしかるべからねなをもぞんそうするものあら
ばかさねてゐんぜん下されつとおほゆる也てうてき
と成なん後はいかにくるともゑきあるましされは
しはらくも世をしづめむほど法皇を鳥羽のきた殿へ
うつしまいらするかしからすは御幸をこれへ
なりともなしまいらせはやと思ふはいかゞあるべき」三八オ

さらんにとつてはほくめんのともがらとものなか
に矢をもひとついつとおほゆるなりさふらひど
もにそのゑういせよとふるべし大かた入道ゐんか
たの奉公におひては思ひ切たり馬にくらをけきせ
ながとり出せよとそひしめかれけるしゆ馬の判官
盛國いそぎ小松殿にはせ參つて申けるは世は
はやかうとこそみえさせおはしまし候へそのゆへ
は上に御きせながをめされ候間兵ともみなうつ
たつてたゞいますてにゐんの御所法ちう寺殿へよ
せ候そや法皇をは鳥羽殿へとひろうしてない〳〵
はさいこくのかたへ流しまいらすへしとぎせられ
げに候と申たりければおとゞいかでかさる御叉」三八ウ

の渡らせ給ふべきとは思はれけれともけさのせん
門のふるまひさる物くるはしうおはしつれはもし
さやうの事もやおはすらんとていそぎくるまを
とばせ西八條におはして門前にてくるまよりをり
門をさし入てみ給へばけにも入道はらまきをちや

くし給ふうへ一門のけいしやううんかく數十人思
ひ〳〵のひたたれに色々のよろひきて中門のらう
に二行にちやくせられたり其外諸國のじゆり
やうゑふ所しなんとはゑんにもいこほれてに
わにもひしとなみいたり兵ともはたさほをひきそ
はめ〳〵馬のはるびをかためかぶとのをゝしめて
たゞいますでにうつたゝうするきそくなるにおとゞ」三九オ

は又けさのやうにゑぼしなおしに大もんのさし
ぬきのそはとつてざやめきいり給ふことのほかに
そみえられける入道相國ふしめになつてあはや
れいのだいふが世をへうするやうにふるまふもの
かなつゐてをもつて大きにいさめはやと思はれ
ければなぎなたひさのしたにおきゐたけだかに成
てそおはしけるさすかだいふは子ながらもうちに
は五かいをたもつてじひをさきとしほかには又五
じやうをみたらす禮義をたゞしうし給ふ人なり
あのすがたにはらまきをちやくしてむかはん叟

さすかをもはゆうはつかしうもや思はれけんしや
うじをすこしひきたてそけんのころもをとつて」三九ウ

はら巻の上にあわてきにき給ひけるかむないたの
かな物のはつれてすこしみえけるをかくさんと衣
のむねをとつてしきりにひきちかへ〳〵そし給ひ
けるおとゞは御おとゝ右大將むねもりのざしやう
につかせられけり入道相國の給ひ出させ給ふむね
もなしおとゝも又申出させ給ふ事もなかりける
にやゝあつて入道相國のたまひけるはそも〳〵かの
新大納言なりちかのきやうかむほんは事のかず
ならず一かう法皇の御けつかうとこそうけたまは
れ叟あたらしき申事なれとも入道代々のてうて
きをほろぼしてくはんいをすゝむ事ありがたき
てうおん也たゞしそれもゆみやとるならひせん」四〇オ

れいなきにあらずたむらまるはぎやうぶきやう坂
の上のかつたまるか子なりしかともわつかにとう

いをたいらけしけんじやうに大納言にてさこん
の大將をけんじきせい代しやうこにもやしんを
さしはさむとういついたうのくんこうかくのこと
しいはんや入道わういをうはわれ給はんとせし
二か度の忠せいばくたいなりしかのみならすこう
しんちやく〳〵の身としてうてい度々のはぢを
きよめきそれになりちかどいふむようのいたづら者
西光といふげせんのふたうじんが申事に君
のつかせおはしましてたうけついたうの御けつか
うこそしかるべからねなおもざんそうするものあ」四〇ウ

らばかさねていんぜんくだされつとおほゆる也てうて
きと成なん後はいかにくゆともゑきあるましされ
はしはらく世をしつめんほど法皇を鳥羽のきた殿
へうつしまいらするかしからずは御幸をこれへ
なりともなしまいらせはやと思ふはいかゝあるべ
きとのたまへはおとゞ此事きゝもあへ給はすま
づさめ〳〵とぞなかれける入道さていかにやいかに

とあきれ給へはやゝあつておとゝなみだをおさへ
て申されけるはこの仰うけ給候に御うんははや
末になりぬとおほえてまづ重盛かふかくのなみた
のさきたち候なり人はかならすうんめいつきんと
てはかゝるあくぎやうをおもひたつ事にて候さ」四一オ

すか我朝はそくさんへん地のさかいと申ながら
天照太神の御子そん國のあるしとしてあまつ
こやねのみことの御へうゑいてうのまつり事をお
さめ給ひしよりこのかた太政大臣のくはんにいたり
給ふ程の人のかつちうをよろいまします事これ
禮きをそむくにあらすや就中御出家の御身也
それ三世のしよぶつげだつどうさうのほうゑをぬ
きすててたちまちにかつちうをよろひまします叉
うちにははかいむざんのつみをまねかせ給ふのみ
ならすほかには又じんぎれいちしんのほうにもす
でにそむき給ひぬらんとこそみえて候へかた〳〵
おそれある申事にては候へともしはらく御こゝろ」四一ウ

おしつめて重盛か申状つふさにきこしめさるべう
もや候らんかつうはさいこの申状なり心のうちに
しいしゆを残すへからすまつ世に四おん候しよ
きやうのせつさうにどうにしてないげの存ぢかく
べつなりとは申せどもしんちくはんぎやうの
もんにもとかれてか天地のをん國わうのをん父母
のをんじゆじやうのをんこれなり其中にもつとも
おもきはてうをんなりふ天の下悉わうどにあら
すといふ事なしさればゑいせんの水にみゝ
をあらひしゆやう山にわらひをおつしけん人も
ちよくめいそむきかたき禮きをは存ちすとこそ承
れいかにいはんやいまだせんそにもきかさつし」四二オ

太政大臣のくわんをきわめさせ給ふいはゆるしげ盛
なんとかむざいぐあんの身をもつてれんふくわい
門の位に至るしかのみならすこくくんなかばは一
家の所りやうたり田園は悉一門のしんしたり是
き代の朝をんにあらずやいまばくたいの御おん
をわすれてみたりかはしく君をなみしまいらつ
させ給はん事天照太神正八幡宮の神りよにも
そむかせ給ひ候ひなんすそれ我朝は神國なり神
はひれいをうけさせ給はすてうてきと成なんもの
はちかくは百日とおくは三年をすこさすとこそ
承り候へしかれは君の思食立所だうりなるはな
きにあらすをよそ此一門は代々のてうてきをた」四二ウ

いらけて四かいのげきらうをしづむる事ぶさう
の忠とは申ながらそのしやうにほこる事かへ
つてばうじやくぶ人とも申つべし家のめいを以
ては君のめいをじせされわうふのめいをもつて
は父のめいをじせよとこそみえて候へたうけの
うんめいいまだつきさるによつて御むほんすでに
あらわれぬ其上おほせあはせらるゝ大納言以下の
よたうのともがらにしよたうのさいくわい行れ
ぬるうへはいそぎうしなはれずとも何のおそれか
候べき今はしりぞいてことの子さいをぢんし申

させ給て君の御ためにはいよ〳〵奉公のちうきんを
つくしたみのためにはます〳〵ぶいくのあいれん」四三オ

おほどこさせおはしまさはしんめいのかごにあ
つかつてぶつたのみやうりよにもそむくへからす
神明仏だかんおうあらは君もなどか思食なをさせ
給はて候へきされはしやうとく太子十七か條の御
けんぽうにもみな人心まち〳〵なりをの〳〵しう
ありわれをぜしかれをひすかれをぜし我をひ
すぜひのことはりたれかよくさだむべきあひとも
にけんぐなりはしなくしてたまきのことしこゝ
お以てたとへ人いかるといふともかへりてわかし
つをおさめよとこそみえて候へ君としんとをなら
ふるにしんそわくかたなしきみにつき奉るはちう
しんのほうだうりとひが事をくらへんにいかて道」四三ウ

りにつかさるべきこれは君の御ことはりにて候へ
は重盛はかなはぬまてもゐん中をしゆごしまい
らせんとこそ存候へそのゆへは重盛はじめじよし
やくよりいま大じんの大將に至るまて一として
てうをんならすといふことなしそのをんのおもき
ことおをもへは千くわ万くわのたまにもこえその
ふかきいろをろんすれは一入さい入のくれなゐにも
なを過たるらん重盛か身にかはらんいのちにかは
らんとちきつて候さふらひとも少々候らんかれら
おめしぐして院の御所に參り門々をかためてふ
せぎ參せんはゆゝしき御大事にてこそ候はん
すれかなしきかな君の御ために奉公のちうきんを」四四オ

いたさんとすれはめいろ八万のいただきよりなを
高きちゝのをんたちまちにわすれなんとすいたま
しきかなふけうのつみをのかれんとすれはきみ
の御ためにはすてにふ忠のぎやくしんともなり
ぬべししんだいこれきわまれりぜひいかにもわき
まへかたしせんする所君をもしゆごしまいらせ候
まし又院參の御とものをも仕へからす申うくる

所しげ盛かくびをめさるへしらうしの詞こそ思ひ
いだひて候へこうめいかなひとげて身をしりぞけ
すくらひをさらざれはすなはちがいにあふとも
申すかのせうかは大こうかたゑにこゑたりし
に依てくはん大相國にあかりけんをたいしくつ」四四ウ

おはきなから殿上へのほる事をゆるされたりし
かともひとたびゑいりよにそむく事ありし
かはかうそこれをいましめてをもふつみせられきか
やうの叟を思ふにもふつきといひゑいくわといひ
てうをんといひてうじよくといひかた〳〵きはめ
させ給ひねれは御うんのつきさせ給はん事かた
かるべしともおほえすふつきのいゑにはろくい
重てうせりなをふたゝびみなるきは其様かならす
いたむとこそうけたまわれいつまてながらへて
かやうにみたれん世をも見候へきたゝ末代に
しやうをうけてかゝるうきめにあひ候重盛かくわほ
うの程こそつたなふ候へたゞいまもさふらひ一人に」四五オ

仰つけおつぼのうちにひきいだし重盛かくびを
はねられんはいとやすき御事にてこそ候はむす
らめこれよくをの〳〵きゝ給へとてなをしのそで
しほるばかりにみえられければ入道相國をはし
め奉つて一門のけいしやううんかくみなよろひの
袖をそぬらされける入道相國たのみきつたるだい
ふはかやうにの給ふよろつちからもなけにていや
〳〵それまての事は思ひもよらずあくたうとも
の申す事に君のつかせおはしましてもし御
ひが事なんともやいてこんすらんとおもふばかり
にてこそあれとのたまへはおとゞたとひいかなる
御ひが事わたらせ給ひ候とも君をは何とかしまい」四五ウ

らつさせ給ふべきとそ御前をついたつて中門に出
さふらひともにむかつての給ひけるは御前にて申
つる事ともをはなんちらは承らずやしげもりけ
さより是に有てか様の叟ともを申しつむへかり
つれともこれていにひたさはきなりけれは歸り

たりつるなりゐんざんの御倶においては重盛が
くびのはねられんを見て申べしさらはをの〳〵參
れとて小松殿へそ歸られけるされともたうけぢう
だいからかはといふよろひこがらすといふ太刀を
は忍びつゝくるまに入られけるとそうけ給るよう
いのほどこそおそろしけれ其後小松殿にはおとゝ
歸り給て主馬の判官盛國をもつてふれられけるは」四六オ

重盛こそ別て天下の大事聞出したれ重盛を重盛
と思ひあはれんずる人々はみなもののぐして參る
へしとふれられたりけれはひころはをほろけにて
もさはき給はぬ人のいまかやうに仰なるは別の
子さいそあるらんいさや參らんとてよどはつかし
宇治をかのやたいこをぐるす日野くはんしう寺を
はらしつ原せれうのさとむめづかつらにあふれゐ
たりける兵ともにあるひはよろひきてかぶときるも
有きぬもありあるひは矢おふてゆみとるも有とら
ぬもありかたあふみふむやふますにて我さきに
〳〵と小松殿へそはせたりけるしかる間西八條に
數千ぎありける兵ども小松殿に大事出来たり」四六ウ

ときゝてければ入道相國に此由かくとも申入す
みなさやめきつれて小松殿へそまいりけるこれを
見る人去ほうげんに左馬のかみよしともがちゝ
ためよし入道のかふべをはねけんやうにそあらんす
らんとさゝやきあへりさる程に西八條にはちく
ごのかみさだよしかほかわきうせんにたつさはり
ぬべき人一にんもなしたゝおいたるあまあをにう
ばうふてとりなんとそ候ひける入道さだよしとめ
すちくごのかみさだよし御まへに參かしこま
る入道やゝさだよし何とてたいふはこれらをばか
やうによひとるやらんこれはいかさまけさこれ
にていひつるやうに入道かもとへうつてなんとも」四七オ

やむけんすらんなとのたまへはさたよしなみだを
はら〳〵と流て申けるはいかてかさるおん事の

わたらせ給ひ候べきけさ御まへにて申させ給ひつ
る御叉ともをも今は定て御こうくわいそ候らんと
申たりけれは入道いや〳〵だいふとなかたかふ
てはゆゝしき大事そとていそぎ物のぐぬぎおき
そけんの衣にけさうちかけながじゆすつまくつて
いと心もおごらぬねんしゆしてこそおはしけれ
ひとへに物くるひのくるひをめたに叉ならす其後
小松殿には主馬の判官盛國承てちやくたうつけけ
り承りこもる兵とも一万よ人としるし申すちや
くたうひけんの後おとゝ中門に出さふらひともに」四七ウ

むかつての給ひけるはひころのけいやくたかへす
みなしんへうに參りたりたゞしいこくにさる
ためしありむかししうのはうわうと申し人ほう
じとてさいあひのきさきをもち給へり天下だい
一のび人なりされどもこのきさきいさゝかわらふ叉
おし給はすはうわうこれをほんいなきことに思食
ところにかの國のならひにてててんがに事の

出来たるときは都よりはじめてひをあけたいこを
うつて國々のつはものをめさるゝならひありこれを
ほうくわとな付ある時ほうくわをあげたりけれは
きさきこれを御らんしてあなおびたゝしや火も
あれほどにたかふあかるものかとてはじめてわら」四八オ

い給ひけり一たひゑめはもものこび有とかやはう
わうふしきやこのきさきはほうくわをあいし給
へりとてうれしき事にし給ひつゝつねは其事
となくひをあけたいこをうつてきさきをなくさめ
奉らるしよこう来るにあたなしあたなけれはすな
はちさるかやうにすること度々にをよふある時
りんこくよりけうそくをこつてはうわうのみやこ
おせめけるにほうくわをあけたいこをうちけれ
ともれいのきさきのひにならつて參りちかつく
者もなしそのとき都かたぶひてはうわううたれ
給ひけり其後かのきさきはきうびのしやくこと成
てかきけすやうにそうせられける世にはかゝるため」四八ウ

しのあるそとよ重盛別て天下の大事きゝ出し
たりつれとも又ひが事にきゝなしたりじこん
以後もこれよりめさはかくのごとく參べしさらは
をの〳〵かへれとてさふらひともをそ歸されける
まことに天下の大事聞も出されすまた父といくさ
をせんとにはあらねとも我身にせいの付やつか
ぬをもしりかうして入道相國のあく心おもやはら
けんとのおとゝのはかりことをそ承る君々たらす
といふともしんもつてしんたらすんはあるへから
す父々たらすといふとも子以て子たらすんはある
へからす君のためにはちうあつてちゝのためには
かうあれとぶんせんわうの給ふにたかはす法皇」四九オ

ない〳〵きこしめされて今に始ぬことなれとも
だいふか心のうちこそはつかしけれあたをはおん
を以てほうじたりとそ仰けるくわほうこそめて
たうて大臣の大將にいたらめようきたいはい人
にすくれさいちさいかくさへ世にこえたるべき
やはとそみな人かんしあはれける國にいさむ
るしんあれはその國かならすやすしいゑにいさ
むる子あれは其家かならすたゝしといへりしやう
こにもまつたいにもありかりし大臣なり

新大納言の流され

同き六月二日新大納言成ちかのきやうをは西八條
のくぎやうのざへ出し奉つて御ものまいらせたり」四九ウ

けれともむねせきふさかつて御手をだにもかけら
れすさてしもあるべきならねはつはものともくるま
をよせてとう〳〵めさるへう候と申せはこゝろ
ならすのり給ふくるまのぜんご左右を見まはせは
軍兵とも所もなくみち〳〵て我かたさまの人は一
人もなしいかにもしていま一度小松殿にみえ
奉らはやと思われけれともそれもかなわすたとひ
ぢうくわをかうむつてをんごくへ行ものも人一
人身にそへぬ事やあるとくるまのうちにてか
きくとかれければしゆごのぶしともみなよろ

ひのそでをそぬらしけるとしころみなれ奉りし
ざうしきうしかいに至るまてなみだを流したもと」五〇オ

おしほらぬはなかりけりまして都に殘りとゝまり
給ふきたのかたおさなき人々の心のうちをしはか
られてあはれなり此きたのかたと申は山城のかみ
あつかたのむすめごしらかわの法皇の御てうめい
ならひなきびじんにておはしけるを新大納言あり
かたきてうしんにてくだしたまはられたりけると
かや見めはさいわひの花なれはなりちかのきやう
さいあひしてわりなふ思はれけれともかいらうの
ゑんつきはてわかれ給ふこそかなしけれ西のしゆ
しやかをみなみへゆけはおふうち山も今はよそに
そみ給ひける鳥羽殿を過給ふにもひころ此御所へ
御幸なりしには一度も御倶にははつれさりし物」五〇ウ

おとて我山ざうすすあまどのをもよそにみてこ
そ過られけれ鳥羽のみなみのもんに出て兵とも

舟おそしとぞいそかせける大納言こはいつちへと
て行やらんおなじううしなわるへくはみやこち
かき此へんにてもあれかしなんと宣ひけるとそせ
めての事なれちかふそい奉るぶしともはたそと
とい給へはなんばの二郎つねとをと名乗申も
此へんに我かたさまのものやあるたつねてまい
らせよふねにのらぬさきにいひおくべき事
ありとの給へはなんばの二郎そのへんをはしり
まはつてたづねけれともわれこそ大納言殿の御か
た様のものと申人一人もなかりけれは候はすと」五一オ

申大納言さりとも我世にありし時はしたか
いつきたりしもの上下一二千人もこそ有つらん
に今はとそにてたにもとふらふ者のなき事よと
のたまひけるそいとをしきひごろ熊野まうてて
わうしまふてなんどのありしにはふたつかはら
みつむねに作つたるふねにのり次のふね二三十そ
うこぎつつけさせてこそをはせしにいまはいつし

かけしかるかきすへやかたふねのともへあれたる
に大まくひきまわさせみもなれぬ兵ともとのりく
してけふをかぎりに都のうちを出られける心の
うちさこそと思ひやられたりよどのかわつらこぎ
とをりこつとのうどのはしらもときむやかた野の」五一ウ

なきさのおかいりゑ〳〵をうちすぎて其日はつの
國大物のうらにつき給ふ此新大納言なりちかの
きやうはかおう元年のふゆのころいまだ中納言
にてみのゝ國を知行せられたりけるに目たい
右衞門のぜうまさとも山門の所りやう平野のしや
うの神人と事をしいだしたりしに依て山門
大きにいきとをりこくしなりちかるさい目代正
ともきんごくせらるべきよしそうもん申たりけ
れはひつ中へながさるべきにて西の七條まて出
られたりしを君おしませ給ひてめしかへされぬ
これによつて山門の大衆なりちかのきやうをさま
〳〵にしゆそしけるとそ聞えししかりといへとも」五二オ

せう安二年正月十日じゆ二位し給ふ同三年
三月十三日右兵衞のかみをけんして検非違使
のべつたうにそなられけるあぜちのすけかた花山
の院かねまさこえられ給けりすけかたはいゑの人
かねまさはせいくわの人家ちやくにてこへられ
給ふそいこんなり是は三條殿さうしんのしやうと
そ聞えし又あんげん元年七月五日じやう二
位し給ふ其時は中の御門の中納言むねいへのき
やうこへられ給けり同二年十月廿二日けんひ
いしのべつたうよりごん大納言にそあかられける
かくのみさかへ給ひしかはひとあさけつてあはれ
山門のたいしゆにはのろはるへかりける物かなと」五二ウ

そ申けるされとも神ばつみやうはつはときも
有おそきもありならいにて終にはかゝるうき目に
あはれけるこそあさましけれ同き三日大物のうら
には都より御つかいありとてひしめきける大納言
ただいまこれにて失へとのつかいやらんと聞給へ

はさはなくて備前のこ嶋へ流し奉れとのつかい也
又小松殿より御ふみあり大納言ひらいて見給へは
みやこちかきかた山ざとにもをきまいらせんとて
やう〳〵に申候ひしかともかなわぬ叟こそ
世にあるかいも候はねさりながらいつくのうらに
もをわせよ重盛がいのちのあらんかぎりはとぶら
ひ奉るべし御心やすくおほしめされ候へなんとそ」五三オ

かゝれたる其外たひのそらのよそほひこま〳〵と
さたし送られたり又なんはかかたへも御ふみ有あ
いかまへて御こゝろにたがいたてまつらでよく
〳〵御みやつかへつかまつれけたえして重盛うら
むなとそあそばされたる大納言はさしもかたしけ
なふおほしめされける君にもはなれまいらせつか
の間もさりかたふ思はれける北のかたおさなき人
々にもわかれはてゝこはいつちへとてゆくやらん
二度こきやうに歸てあひ見ん事もありかたし
一とせ山門のそせうに依てすでにひつ中へ流
さるべきにて西の七條まて出たりしを君をしませ
給てめしかへされぬされは是は君の御はからいに」五三ウ

もあらずこはいかにしつる叟ともそやとてさめ〳〵
とそなかれけるあけければふねおし出てくだり
給ふにたゝなみだにのみむせんて行さきさらに
みえわかすながらふへしとはおほえねともさすが
つゆのいのちはきえやらすあとのしらなみへたつ
れは都はしだいにとをさかりゑんごくはまたち
かづきぬ肥前のこ嶋にこぎよせてたみの家のあさ
ましけなるしはのいほりに入奉る嶋のならいうし
ろは山前はうみまつのかせなみのをといつれもあ
われはつきせず

あこやの松

をよそ新大納言一人にもかきらするさいにおこ」五四オ
なわるともがらおゝかりきあふみ中將入道れんじや
うさどの國山城のかみもとかねはうきの國しきぶ
のたいふまさつな播磨の國そう判官のふふさあは

の國新平判官すけゆきはみまさかの國とそ聞えし
入道相國かやうにさん〳〵にしちらして我身は
いそぎふくはらへこそくだられけれ同き廿日つの
さゑもんもりずみをしやにておとゝ門脇殿のも
とへ今は丹波の少將をとう〳〵くだされ候へかし
とのたまひつかはされたりけれは宰相さらはあり
し時ともかうもなし給はてふたゝび物を思はする
事よとそ宣ひけるねうばうたちあはれ宰相の今
一度よきやうに申させ給へかしなんとの給ひ」五四ウ

あはれければ宰相存る程の事をは申ついまば
のりもりか世をいとふよりほかの事をは何事を
か申べきさりながらいつくのうらはにもをはせ
よのりもりかいのちのあらんかぎりははくくむべ
しとそ宣ひける此少將は今年三さいになり
給ふおさなき人をもち給りひころはわかき人にて
いとこまやかなる事もをはせざりしかともいま
はの時にもなりしかはさすか心にかゝつてや思
はれけんあはれおさなきものを今一度見はやとの
給へはめの人いだひて參りたり少將ひざのうへに
おきおさなきひとのかみかきなてゝ宣ひけるはむ
ざんやなんぢ七さいともならはげんぶくせさせ院」五五オ

へまいらせんとこそ思ひしに今はかいなしもし
いのちなからへておとなしくなりたらは法師に成
てなりつねか後世とふらふてゑさせよとおとなしき
人にむかいての給ふやうにかきくとひての給へ
ばこのおさなき人未いとけなき心に何事をかきゝ
わけ給ふべきなれともうちうなづき給ひけりさて
こそねうばうたちもいとゝ袖をはぬらされけれ御
つかひ今夜は鳥羽まて出させ給ふべきよしを申
少將いくほどものびざらん物ゆへにこよひばかり
は都のうちにてあかさはやとのたまへとも御つか
ひゆるし奉らねはちから及す鳥羽へそ出られけ
る同き廿二日につの左衞門の少將殿をぐそくし」五五ウ

ふく原へくだり入道相國に此由申たりければ入道
少將をはひつ中の國のぢう人せのをの太郎か
ねやすに仰てひつ中のせのをへこそ流されけ
れかねやす門脇殿のかへりきこしめされんする
所をもはゝかりおもひけれは少將殿をやう〳〵に
いたわり奉るされとも少將はいさゝかくつろぐ心ち
もし給はすたゝあけくれほとけの御なをとなへて
父大納言殿の事をのみそいのられけるさる程に
大納言は備前のこ嶋におはしけるあつかりの
ぶしなんばの二郎つねとをこゝはなを舟付な
れはびんきあしかりなんとてそれよりちにわた
し奉り肥前びつ中両國のさかひなんばにはせ」五六オ

のがうきびの中山のふもとありきの別所といふ
所におき奉るそれより少將のおはしけるびつ中
のせのをへはわつかに五十よぢやうのあひだなれ
はさすかそなたの風もなつかしうや思はれけん有
時少將かねやすをめしてこれよりちゝ大納言のを

はしけるありきのべつしよとかやへはいか程の道
そととい給へはかねやすちかきよしを申てはあし
かりなんとやおもひけん十二三日にゆく所にて
候と申少將なみだをはら〳〵とながいて日本は
むかし三十三か國なりしを天ぢ天わうの御とき
六十よしうにはわけられたりされはあつまにき
こゆるわうしうもむかしは六十六くんなりしを」五六ウ

もんむてんわうの御う大ほうきやううんに十二
ぐんさきわかつてでわの國とはな付られたり中
ごろさねかたの中將のあつまへながされたりしに
みちのくに阿古屋の松といふめいしよあり中將
是をみんとてたう國のうちをまはつてたつねられ
けれともなかりけれはちから及はす歸られける
みちにてらうおう一人ゆきあふたり中將らうおう
の袖をひかへてやゝ御へんはふるひ人とこそみれ
みちのくのあこやのまつといふめい所やしり給ひ
たるとい給へはたうごくのうちには候はすと

申す中將ふしぎや世すへになれはめいしよおも
はやよみうしなへるにこそとて歸られけれは老」五七オ
おう中將のそでをひかへてやゝ君は
　みちのくのあこやのまつにこがくれて
　いつべき月の出もやらぬか
とよめるうたの心をもつてたう國のめい所あこや
のまつとはしろしめされて候かそれはむかし両
國か一國にて六十六くんなりし時よめるうたなり
十二くんさきわけて後はではのくににや候らんと
いひけれはさらはとてさねかた中將ではのくに
にこえてこそあこやのまつをは見たりしかすでに
十二三日はほとんど都よりちんぜい下かうごさん
なれつくしのださいふよりはらかのつかいのうへ
にてかちぢ十五日とはきけ就中せんやうだうに」五七ウ
それほとの大國有とはきかぬ物を備前ひつ中両國
のさかいいかにとをしといふとも両三日にはよも
過しちかいをとおう申なすは父大納言殿のをはす
る所を成經にしらせしとにこそとて後にはこいし
けれともとい給はす中にも平判官やすより法勝寺
のしゆぎやう俊寛そうづをはさつまかたきかいが
嶋へそ流されける丹波の少將をもあひそへてこそ
つかはされけれやすよりはすわうむろつみといふ
所にて出家して法名性せうとぞ名乗ける出家はも
とよりののそみ也けれはかうそ思ひつゝけたる
　終にかくそむきはてける世の中をとく」五八オ
　すてざりし事そくやしき
きかいがしまと申は都を出てはる〳〵と八重の
しほぢをしのひて行所なれはをほろけにては
舟もかよはす嶋には人まれなりをのつから人はあ
れともおとこはゑぼしもきず女はかみもさげず身
にはしきりにけおひつゝいろくろくしてうし
のことしいしやなけれは人ににずしよくする
ものもなけれはたゝせつしやうを以てさきとす
しづか山田をうたされはべいこくのたぐひもなく

そののくわをもとらさればけんはくのたぐひさら
になしむかしはおにがすみければきかいが嶋と
はな付られけり又いわうといふ物おゝかりけれは
いわうかしまとも申す嶋のなかにはたかき山有」五八ウ

山のいただきにはとこしなゑに火もゑつゝつね
はいかつちのなりさがりなりあかればふもとのさ
とにあめしげし一日へんしつゆのいのちなが
ろふべしともみえざりけり

新大納言の死去

さる程に大納言は備前の國ありきの別所におはし
けるかいさゝかくつろぐ事もやと思はれけるに
さはなくてちやくし丹波の少將もきかいが嶋へ
なんと聞えしかばよろつ心ほそくや思はれけんこ
松殿へいとま申年四十三にてうき世をよそに
すみぞめの袖となられけるこそあはれなれ去程に
大納言の北のかたは都北山のほとりうんりんいん」五九オ

におはしけるかさらてだにすみもならはぬかた山
さとはさひしきにいとどしのはれければをのつ
から過行月日をくらしかねあかしわつらふ
御様なり大納言の年ごろめしつかはれける諸大
ぶさふらひともいくらもありけれともあるひは世
におそれあるひは平家にはゝかつてまいりち
かつく者もなしその中に源ざゑもんのふとしは
かりそつねは參りけるある時北のかたのぶとしを
めしてやゝのぶとしや殿は肥前のありきのべつ所
とかやにをはすなるせめてふみを奉て返事を也
ともみてなくさまはやと思ふはいかゞ有べきと宣ひ
けれはのぶとし申けるはこれはようせうより君」五九ウ

の御おんあくまてまかりかうふり候ひしかはつね
はいさめられまいらせし御事のきもにめい
しそのごまてもめされたりし御こゑのはるかにみ
みのそこにとゝまつてかた時わすれまいらする
事も候はす都を御出の時ももつとも御倶仕るへ

うぞんじ候ひつれとも平家ゆるされ候はねはちか
らをよび候はす今度はいかなるうきめにもあひ候
へ御行衛をしたいまいらせてたつねまいらはやと
こそ存し候へ御ふみも給はらんと申たりけれは
北のかたなのめならすよろこび給ひてやがて御ふ
みあそはしてそたふたりけるのふとし御ふみ給は
つて夜を日について下程にほどなふ備前の國」六〇オ

ありきのべつ所にくだりつきしゆごのぶしにむ
かつて申けるはこれは大納言殿の年ころめし
つかはれしさふらひにげんさゑもんのぶとしと
申者にて候か御ゆくゑをしたひまいらせてたづね
參りたるよしを申たりけれはなんばの次郎の
ぶとしかはる〳〵これまてたつねくだりたりこゝ
ろさしの程をかんして大納言殿にこのよし申す
折節大納言は都の事思ひ出しなみだにむせひ
うつふしておはしけるかのぶとしかこれへ〳〵と
のたまへはのぶとし御そはちかふまいつて見奉る

にをはする所のあさましけなるもさる事にては
やさまかへておはしけるを見奉るにつけてもつき」六〇ウ

せぬものはなみだなり大納言さて都の事はいか
にとの給へはみやこの御事は中〳〵思食やら
せ給ふべし北のかたよりの御ふみ候とて取出して
奉る大納言ひらいて見給へは北のかたのみづくき
のあとはなみたにかきくれてとかくうらみくど
きてかかれたるより出されき人々のいまだいとけ
なきにてのすさひ成にこいし〳〵とかかれたるを
見給ひてひころのこひしさは事の數ならすと
てそなかれける五六日ありてのふとし申けるは
今しばらくも候ひて御行衛をもみまいらせたくは候
へとも北の御かたよりはあいかまへて御返事給は
つていそぎまかりのぼるべきよしを仰られ候ひし」六一オ

に行ゑもなく候はん事大きにおそれ入ておぼ
へ候へは今度はまづまかり上り又こそ參り候はめ

と申たりければ大納言入道かさねてなんぢか
くだらんまていのちいきてみゑん事もかたかる
へしあいかまへてなりちかか後世とぶらふてゑさ
せよとそ宣ひける扨のぶとし御返事給はつて出に
けりのたまひぬべき事はかねてよりみなつきけ
れとせめてのしたはしさにやはる〳〵といてたり
けるのぶとしをいましばし〳〵とてたひ〳〵よひ
そかへされけるさてしもあるべきならねはのぶと
し都にのほりうんりん院に參りつゝ大納言殿
の御べんじを奉るきたのかたわか君ひめきみ三人」六一ウ

一つ所にさしつとひひらひて見給へばふみのおく
にびんのかみの一ふさありけるをふた目とも見
給はすそでをかほにおしあてゝはやさまかへ給
ひけりかたみこそ今は中〳〵あたなれとてなき
給へはおさなき人々もふしまろひてそなかれける
安元三年八月十六日にかいげんあつてぢせう
元年とそ申ける同き廿二日大納言入道ありき
のべつ所にてうせ給へりさいごのあり様さま〳〵
にきこゆはじめはさけにどくを入てすゝめ奉り
けれともそのしるしもなかりけれはのちには二
ぢやうばかりありけるきしのしたをほりにほつ
てひしをうへさせきしのうへよりつきおとし」六二オ

たりければひしにつらぬかつてうせられけるとそ
承るむけにあさましかりし事ともなり北のかた
はうんりんゐんにおはしけるか此由をつたへき
き給ひてやがてほたいゐんよりひしりをしやうじ
年三十九にてさまかへ一かう大納言入道の後し
やうぜん所おそいのられけるわか君ひめきみ北の
かた野辺に出ては花をたおりさわべにおりて
は水をむすび後世ぼたいのいとなみのほかは他叉
なしさる程に時うつり事さり世のかはりゆく
ありさまたゞ天人の五すいとそみえし

徳大寺いつく嶋まふて

徳大寺の大納言しつていのきやうは平家に大將を」六二ウ

こへられて大納言をぢし申てろうきよせられ
たりけるをさのみなにをかごすべき出家せんとそ
のたまひけるされば徳大寺殿のめしつかはれける
しよ大ぶさふらひさしつとひていかゞせんまことに御
出家なんとあらすわれらまどひものになりなんと
てなげきあゑり其中にとう蔵人しげかぬとて何事
もぞんじしたりけるが徳大寺とのをなくさめ奉る
ある時大納言しげかぬにの給ひけるはわれこそ
出家せんとおもひたちたりそのゆへは平家のはん
じやうを思ふにこれもりとてちやくそんあり又
どももり重ひらものぞむらんいつをかぎりにまつ
べきこゝろぼそくおほゆるそ今はおもひ切てある」六三オ

なりとのたまへはしげかぬなみたをなかして申
けるはさやうに候はゝ奉公のともがらみなまどい
ものになり候いなんすしげかぬめつらしき事を
こそあんし出して候へあきの國いつく嶋の大明神
へ御參り候へかしかの社にはないしとてゆふなる

まいひめを數十人入道相國をかれて候なる御參り
候て七日御參ろう候はゝ定てかのないしともちか
つきまいらせ候はんすらん何事の御いのりに御
參り候やらんと申そありのまゝに大將の御いのり
のためにと仰られ候へしさて御しやうらくの時
しかるべく候はんするないしを一両人御どうしん
候て御のぼりあつて御ひきてものたひよく〳〵も」六三ウ

てなさせ給ひて候へさせおはしまし候はゝさだめて
西八條へそ參り候はんすらん入道たいめんして何事
に上りたるそとたづねられ候はゝ有のまゝにそ申
候はんすらん入道はきわめて物めでし給ふ人にて
候へはこはいかにじやうかいかあかめ奉る御神
へまいりて大將のきせいをせらるゝこさんなれと
ていからわるゝむねもあんぬとこそおほえ候へと
申けれはとく大寺殿まことにさる叟もありなんと
てにわにしやうじんはじめていつくしまへそ
まいられけるしやとうのけいき都にてきゝしよ

りはすぐれてありかたかりけりしんしんきもに
めいしけれは平家の人々のあかめ申されける」六四オ
もことはりかなとそ宣ひけるしげかぬか都にて申
たりしやうにないしら數十人參てびわをひき
ぶがくに及てもてなし奉る徳大寺殿ひやうし取て
ふうそくさいばらうたはれけりまことに神めいも
御なうじう有て諸ぐわんじやうじゆうたがいなく
そおぼへたるないしら申けるはこの御神をば平
家のきんたちこそ御しんがう有て御まいりさふら
へとく大寺殿の御參りやことなくめつらしくさふら
ふ何事の御いのりにてさふらふやらんと申けれ
は大將のいのりのためとぞ宣ひける七日參ろうお
わつて徳大寺殿みやこへのぼられけるにむねと
のないし十よ人舟にとりのり名殘をおしみ奉て」六四ウ
一日ぢをおくり奉る扨もあるべからねはいとま申
てとゝまりけるをさりとては今一日をくれとの給
へは二日ぢおくり奉る徳大寺殿此なごりはいかにす
へしともをほえずこれよりなをいつくしまへまい
らはやとは思へとも又こそまいらめ今一日をくれ
とのたまへは三日ぢをくり奉る此うへはとて都ま
てめしのほせられやう〳〵のひきで物たひ様〳〵
の御もてなしともありけり五六日とゝめ給ひて名
殘はつきせねとも大明神の神りよのほどもおそ
ろしとていつく嶋へそ歸されけるないしら是まて
のぼりたるつゐでにいさや西八條殿へ參らん
とて入道相國の宿所西八條へそさんじたる入道」六五オ
出合たいめんし給ひていかにないしたち何事の
れつさんそとのたまへはないしらさん候徳大寺殿
いつくしまへ御參りさふらいて七日御さんろう
さふらひしかなごりおしくおほゆるに一日おく
れ二日をくれとてつゐにこれまてめしのほせら
れまいらせてさふらふあひださて參つてさふらふ
とそ申ける入道とく大寺は何事のきたうに參

られたるやとといい給へはたい將の御きせいとこそ
仰られさぶらひしか入道うちうなづき給ひてわう
じやうのれい仏れい社をはさしおきてじやうかい
かあかめ奉るあきのいつく嶋をたつとみ給ふとく
大寺殿こそ神べうなれとてちやくし小松殿の」六五ウ

左大しやうにておはしけるを大將をじし申させ
奉つてとく大ぢとのへそわたされけるされば しげ
かぬかはかり事かしこかりけるかうみやうかな
新大納言なりちかのきやうもか、るはかり事をは
し給わてよしなきむほんくはたて終にむなしくな
られけるこそうたてけれ

山門めつぼう

さる程に法皇は三井寺のこうけんそうじやう
を御しはんとしてしんごんのひほうをでんじゆ
せさせまし〳〵けるか大日きやうこんがうちやう
ぎやうそしつちきやう三ぶのひきやうをうけさせ
給て同き九月四日三井寺にて御くはんぢやう有」六六オ

べきよし聞えしかは山門大きにいきとをりむかし
より代々のみかどのしゆかいくはんちやうはわか山
にてとげさせ給ふ事是せんきなり就中山わう
のけだうはじゆかいくはんぢやうのため也しかる
を今度三井寺にてとけさせ給は、をんじやうじを
やきはらふべしとそせんぎしける法皇此由をつた
へきこしめされてやう〳〵にこしらへなため仰け
れともれいの山門の大衆ゐんぜんにもか、はらす
やほうきすと聞えしかは法皇これ大きにむやく也
とていそぎ御けぎやうを御けつぐわんあつて三井
寺にての御くわんぢやうをは思食と、まらせ給ひ
けりされども御ほんいなれはとてこうけんをめし」六六ウ

ぐして天わう寺へ御幸なり五ぢくわうゐんをたて
かめ井の水をもつて五べうのちすいとして仏法
さいしよのれい地にてそでんほうくはんぢやうを
はとげさせ給ひける法皇は山門のさうとうをしづ
められんかために三井寺にて御くはんぢやうは

なりしかとも山上には又だうしゆがくしやうふ
くわいの事おきて合戦度々に及ふまい度にがく
りようちおとさる山門のめつばう朝家の御大事
とそみえしたうじゆというはがくしやうのしよ
じうなりけるわらんべの法師に成たるやもしは
中けんほうし原にてそありけるこんがうじゆ
ゐんの座主かくじんごんそうじやうぢさんのとき」六七オ

より三たうにけつはんしてげしゆとかうして
ほとけに花まいらせし者ともなりきん年ぎやう
にんとて大衆おも事ともせずふるまひしかかく
度々のたゝかひにうちかちぬたうしゆらしじう
のめいをそむひてかつせんをくわたつすみやかに
ついばつせらるべきよし思食にそうもんしぶ
家にふれうつたふこれに依て入道相國ゐんぜん
を承てきいの國のちう人ゆあさのごんのかみむね
しげ以下きないのつはもの二千よ人だいしゆにさし
そへてだうしゆをせめらるだうしゆひごろはとう

やうばうにありけるか是をきいて三がのしやう
におりくだりすたのせいをそつして又とう山して」六七ウ

さうゐ坂にじやうくわくをかまへてたてごもる
九月廿日たつの一天に大衆三千人くはんぐん
二千よ人つがう其せい五千よ人さういざかにをし
よせて時をどつとそ作りけるじやうのうちよりい
しゆみはつしかけたりければだいしゆくはん
くん數をつくしてうたれにけり其後は大しゆは
くわん軍をさきだてんとすくはんくんは大しゆを
さきたてんとあらそふ程に心々になつてはか
〳〵しうもたゝかわずたうしゆにかたろふあくた
うというは諸國七たうのせつたうがうだう山そく
かいそくらなりけりよくしんしじやうにしてき
しやうふちのやつはらなれは我一人とおもひ切て」六八オ

たゝかうほどに今度も又がくしやういくさにまけ
にけり世末になれはあく人はいよ〳〵ぜん人

は又よはくなるこそかなしけれそののちは山門
いよ〳〵あれはてゝ十二ぜんしゆのほかはしぢう
のそうりよまれなり谷々のかうゑんまめつしてだ
う〳〵のぎやうぼうもたいてんすしゆがくのまど
をとぢざせんのゆかをむなしうせり四けう五じの
はるの花もにほはす三だいそくぜのあきの月も
くもれり三百よさいのほつとうかゝくる人もなく
六時ふだんのかうのけふりもたえやしぬらんだう
じやたかくそひへて三ちうのかまへをせいかんの
うちにさしはさみとうりやうはるかにひゐてゝ」六八ウ

四めんのたるきをはくぶのあひだにかけたりき
されども今はぐぶつをみねのあらしにまかせきん
ようをこうれきにうるほし夜の月ともし火をか
かげあかつきのつゆたまをたれれんざのよそほひ
をそふとかやそれ末代のぞくにをよんで三國の
ふつほうもしたひにすいびしけるにやとおく
てんぢくの仏せきをとぶらふに祇園しやうじやち
くりんしやうじやきうことくをんわしの高ねも此
ころはこらうのすみかとあれはてゝいしすへのみ
や殘るらんはくろちには水たえてくさのみふかく
しけれりだいぼんげぜうのそとはもこけのみむし
てかたふきぬしんだんには天だい山五たい山はく」六九オ

馬寺ぎよくせんじも此ころはぢうりよなきさまと
あれはてゝ大せうしようの法もんも箱のそこに
やくちぬらん我朝あたごたかをのだうたうもむか
しはのきをならへてありしほとも一夜のうち
にあれはてゝてんぐのすみかとなりにけり南都
の七大寺もこのころはとう大こうぶく両寺の外は
殘れるたうじやもまれなり八しう九しうもあとた
えてほつさう三ろん二しうのほかはのこれるほう
もんまれなりさしもやことなかりしてんだいの
仏法もぢせうのいまに及むてほろひぬるにやと
心ある人のこれをかなしますといふ事なしり
さんしけるそうの中にやよみたりけんけかき」六九ウ

ばうのはしらに一しゆのうたをそ書付ける
いのりこしわかたつそまのひきかへて
人なきみねとあれやはてなん
是はでんげう大したう山さうさうのいにしへあ
ぬくたら三みやく三ほたいのほとけたちにいのり
申されたりし其心を思ひ出てやよみたりけんい
とやさしうそ聞えし八日はやくしの日なれとも
南無ととなふるこゑもせずう月はすいしやくの
月なれともへいはくをさゝぐる人もなしあけの
たまかき神さびてしめなわのみや殘るらん
付善光寺ゑんしやう
わうぼうつきんとては仏法さきたつてばうずとい」七〇オ
へりそのころしなのゝ國せんくわう寺ゑんしやう
の事ありけりかの如来はむかし中てんぢくしや
ゑ國に五しゆのあくひやうおこつてじんそおほ
くほろひしかは月かい長者のちしやうによつて
りうぐうじやうよりゑんぶだごんをえてほとけ目
れん長じや心を一つにしてゐあらはし奉る一ちや
くしゆはんのみたの三ぞん三國ぶさうのれいざう
なり仏めつ度の後中天ぢくにとゝまらせ給ふ
事五百よさいされともふつほうとうせんのこと
はりにて百さい國にうつらせ給ひて一千ざいの
のち百さいのせいめいわう我朝のきんめい天わう
の御うに及でかの國より此くにへうつらせ給ひて」七〇ウ
つの國なんはのうらにてせいざうをくらせおはし
ますつねにこんしきのひかりをはなち給ふに
よつて年がうをこんくわうとかうすしかるをす
いこてんわうの御うにしなのゝ國にすみける
おふみのあつまふど本だよしみつ都へのぼり如来
にあひ奉つていさないまいらせてくだりけるにひ
るはよしみつによらいをおい夜はよしみつによ來
にをわれ奉てしなのゝ國へくだりみのちのこおり
にあんぢし奉てよりこのかたせいざうすでに
五百八十よさいゑんしやう是始とぞうけたまはる
やすよりのつと

さる程にきかいが嶋の流人ともつゆのいのちく」七一オ

さばのすへにかかつてをしむべきにはあらねとも
丹波の少將のしうと平宰相のりやう肥前の國かせ
のしやうという所よりいしよくをつねに送られ
けれは其にてそ俊寛そうづもやすよりもつゆのい
のちをはたもちける丹波の少將とやり（→す）より入道は
本より熊野しんじんの人々にておはしけれは此嶋
のうちに熊野三所こんけんをくはんしやうし奉て
きらくの事をいのり申さばやというに俊寛は
天ぜいふしんだい一の人にて是をもちひず二人は
同し心にてもしくまのににたる所やあるとしまの
うちをたつぬるにあるひはりんたうのたえなる
ありこうきんしうのよそをひしな〳〵にあるひは」七一ウ

うんれいのあやしきありへきられうの色一にあら
す山のけしきのこたちに至るまてほかよりもな
をすくれたりみなみをのそめはかいまん〳〵とし
て雲のなみけふりのなみふかく北を歸り見れは又
山がくのが、たるよりはくせきのれう水みなきり
おちたりたきのおとことにすさまし く松風神
さひたるすまゐひれうごんげんのおはしますなち
のお山にさにたりけりさてこそやがてそこをは
なちのお山とは名付けれ此みねは本宮かれはしん
ぐう是はそんぢやうその王子かのわうしとわうし
〳〵のなを申てやすより入道せんたつにて丹波
の少將あいぐしつ、日ごとに熊野まふてのまね」七二オ

おしてきらくの事をぞいのりたる南無こんけん
こんがうどうじねがはくはあはれみをたれさせ
まし〳〵て我らをこきやうへ返し入させ給ひて
さい子どもをも今一度見せしめ給へとそいのりけ
る日數つもつてたちかうべきじやうゑもなけれは
あさの衣をも身にまといさわべのみつをこりに
かいてはいわたかわのきよきなかれと思ひやり高
きところにあかりてはほつしんもんとそくはん

しけるやすより入道參るたひことに三所こん
げんの御まへにてのつとを申すに御へいがみ
もなけれは花をたおつてさゝげつゝ
それあたりきたれるさいしぢせう二年つちのへ」七二ウ

いぬの年月のならひは十月二月日の數三
百五十よか日吉日りやうしんをゑらんてかけまく
もかたしけなくまします日本第一大りやうげんゆ
や三所ごんげんひれう大さつたのけうりやううつ
のひろ前にしてしんじんの大せしゆうりん藤原の
なりつねならびにしやみしやうせう一心しやう
じやうのまことをいたし三がうさうをうの心さし
をぬきんでてつつしんて以てうやまつてまうすそ
れせうじやうだいぼさつはさい度くかいのけうし
ゆ三身ゑんまんのかくわう也両所こんげんはある
ひは東方じやうるりいわうのしゆしゆびやうしつ
ぢよの如来たりあるひはなんはうふだらくのうけ」七三オ

のしゆ入ぢうげんもんの大じにやく王子はしや
ばせかいの本しゆせむいしやの大じちやうじやう
のぶつめんをけんしてしゆじやうのしよくはんを
みてしめ給ふこゝをもつて上一人をはじめ奉て下
もばんみんに至るまてあるひはけんぜあんおんの
ためあるひはごしやうぜんしよのためにあしたに
はじやうすいをむすんてぼんなふのあかをすゝぎ
ゆふべにはしんざんにむかつてほうかうをとなふ
るにかんおうをこたる事なしがゝたるみねの
高きをはしんとくのたかきにたとへけん〳〵たる
たにのふかきをはぐせいのふかきになすらへ雲を
わけて上りつゆをしのいてくだるこゝにりやく」七三ウ

の地おたのますんはいかゝあゆみをけんなんのみち
にはこはんそれこんけんのいとくをあをがずんは
なんそかならすしもゆうゑんのさかいにまし
まさんやよつてせうしやう大ごんげんひれうだい
さつたしやうれんじひの御まなしりをあいなら

べさをしかの御みゝをふり立て我らかむにのたん
ぜいをちけんして一々のこんしをなふじゆせし
め給へまくのみそ〳〵もむすぶはやたまの両所ごん
げんはをの〳〵きにしたかつてあるひはうゑんの
しゆじやうをみちひきあるひはむゑんのくんるい
をすくはんかためにしつほうしやうごんのすみ
かをすて八万四千のひかりをやはらけかりにすい」七四オ

しやくとあらはれて六道三有のちりに同じ給へり
されはぢやうごうやくのうてんぐちやうじゆとく
ぢやうじゆのらいはいそでをつらねへいはくれい
てんをささぐる事ひまなしにんにくのころもを
かさねてかくだうの花をさゝげて神殿のゆかをう
こかししんじんの水をすましてはりしやうのいけ
をたたえへたり神めいなふじゆし給はゝ所くはん
なんそじやうじゆせさらんやあふぎねがはくは十
二しよごんげんをの〳〵りしやうのつはさをなら
へはるかにくかいのそらにかけりさせんのうれ
へをやすめてすみやかにきらくの本くわいをとげ
しめ給へさいはひ〳〵とそ申ける」七四ウ

そとは流し

さる程に二人の人々はある夜本宮せうじやうでん
の御まへにつ夜してねんじゆせられけるかおき
のあらしことにはけしかりけるにいつかたより
ともしらすこのは二つ二人の人々の袖のうへに
ふきかけたり判官入道何となふ是をとつて見ける
にさしも此間たのみをかけ奉る御熊野のなぎのは
にてぞ候ひける二つのなきのはに一しゆのうた
おむしくひにこそしたりけれ

ちはやふる神にいのりのしげければ
などか都へ歸らざるべき

こんけんの御なふしゆうたかいなしとそおほえた」七五オ

るある夜又二人の人々西の御前の御まへにつ夜
してねんじゆせられけるかゆめうつゝともわか

さるにおきのかたよりしろきほかけてかさりじん
じやうにしたる小舟を一そうなきさによせ世に
うつくしきねうはうたち十よ人舟よりあかりつゝ
みとひやうしをうちつゝにしの御せんの御まへにて
今やうをこそうたはれけれよろつの仏のくはんより
も千じゆのちかひそたのもしきかれたるくさきに
もたちまち花さきみなるとこそきけと同おんに三
べんうたふてかきけすやうにそうせられけるやす
より入道きいの思ひをなしこれはいかさまりう神
のけげんとおほへたり西の御ぜんの御本地千じゆ」七五ウ

千げんにておはしますりう神は廿八ぶしゆの其
ひとつなれは定て御やうかうなるらんたのもしか
りし御事なりとそ申けるやすより入道は都
のこいしさのせつなるまゝに千本のそとはを
作りあじのぼじをかきけみやうじつみやう年
かう月日のしたには二しゆのうたをそ書付ける
　さつまかたおきのこしまに我ありとおや
　にはつげよ八重のしほかせ
　おもひやれしばしと思ふたひだにもなを
　ふるさとはこひしきものを
是をうらにもつて出日本のかたをふしおがみき
みやうちやうらいぼん天たいしやく四大てんわう」七六オ

けんらう地神そうして日本六十よしうの大せう
の神ぎみやうだう別ては熊野三所ごんげんかいり
うわうとうまてもあはれみをたれさせ給ひてこの
中に一ほんなりともこきやうへつたへてたはせ
給へときせいしておきつしらなみのよせては
かへるたひことにそとはをうみにそうかへけるそ
とばは作り出すにしたかつてうみにいれければ
日數つもれはそとはのかすもつもりにけりおもふ
こゝろやたよりの風ともなりたりけん又神明仏だ
や送らせおはしましけん千本のそとはの中に
一本はる〳〵と八重のしほぢをゆられ来てあきの
國いつくしまの大明神のおまへのなきさにうち」七六ウ

よせたりこゝにやすよりにゆかりありけるそう
の西國しゆぎやうしけるかあきのいつく嶋に參り
しやだんのていをおがみ奉るに心もことばも及
はれす八社の御てんはいらかをならべ百八十けん
のくわいらうありしやとうはわたつみのほとけな
れはしほのみちひに月そはむしほのさす時は
おきのとりゐうちのくわいらうあけのたまかき悉
るりのごとししほひきぬれはなつの夜なれとも
おまへのしらすにしもそおく夜あけけれはみや
人とおほしくてかりきぬしやうぞくなるそく一人
よりあふたり此そうそれわくわうどうじんのすい
しやくはさま〳〵なりと申せともいかなれは此」七七オ

御神はかゝるかいまんのうろくすにゑんをばむす
ばせ給ふらんととい奉る宮人これはよなしやかつ
らりうわうのだい三のひめみやたいぎうかいのす
いしやくなり此しまへ御やうがうありしはじめ
よりさいとりしやうの今に至るまてじん〳〵き

どくの事おおく候とそかへりける此そういよ〳〵
たつとく思ひ奉てひめもすほうせまいらせけるか
やう〳〵日くれ月さし出てしほの満けるにそこ
はかとなくゆられよりたるもくづのなかにそとは
のすかたのみえけるを何となふこれをとつて見け
れはさつまかたおきのこ嶋とかきながせることの
はなりもじをはゑり入きさみ付たりけれはなみ」七七ウ

にもあらはれすしてあさやかにこそみえにけれ
このそうあはれにもふしきに思ひおいのかたに
さし都にのぼりやすよりか母やさいしともの一
條の北むらさき野のへんにしのふて候ひけるに
とらせければらうぼ是をうけとりなみだをはら
〳〵とながひて此そとはのもろこしのかたへもな
かれゆかて何しにこれまてつたわりきて二度物を
思はする叟よとそかきくときけるさいしとも流
されし時のなげきより今のおもひはふかかりけり
はるかのゑいぶんにをよんて法皇かのそとはをめ

しよせゑいらんあつてあなむざん此者ともはいま
だきかいか嶋とかやにながらへてあるにこそとて」七八オ

御なみだをながさせ給そ忝き其後うちのおとゞの
もとへ送らせおはしますだいふは父のぜんもんに
みせ奉らる入道もいわきならねは世にもあはれけ
にこそ宣ひけれそのころあやしのしづのをしつの
めに至るまでやすよりが二しゆのうたとてくち
すさまぬはなかりけりかきの本の人まるは嶋がく
れ行ふねを思ひ山のべのあか人はあしへのたづ
をながめ給ふ住吉の明神はかたそきの思ひをなし
三わの明神はすぎたてるかどをさすむかしそさ
のをみことの三十一じをはじめおき給ひしより
以来もろ〳〵の神めいふつだそのゑいぎんを以て
百千万のおもひをのふ千本までのそとはなれはさ」七八ウ

こそはちいさくもありけめさつまかたより都まて
つたはりけるこそふしぎなれ

そぶ

あまりに人のおもふ事はかくしるしありける
にやむかしかん朝の御門こ國をせめられけるに
始はりせうけいと申將軍十八さいになりける
にかんわうのはたをたふて三十万きをさしそへて
こ國へむけられたりけるかこ國のいくさこはくか
むわうの軍よはくしてくはんぐんあまたほろぼさ
るあまつさへりせうけいはこわうのためにいけ
とられてかん朝へ歸らんとのみなけくともこわう
ゆるさず次にそぶと申すしやうくん十六さい」七九オ

になりけるにかんわうのはたをたふて五十まん
ぎをさしそへてここくへむけられけるか今度もこ
こくのいくさこはくかんわうのいくさよはくして
ゑびすのつはものかちにけり大將くんそぶをはじ
めとして六千よ人いけとつてほらにおつこめ三と
せというにとり出しむねとの兵六百よ人かかた
もゝを一々におし切てひろきのべへをつはなつ

やがて死するもあり程へてむなしくなるも有其中
にそぶ一人たすかつてのべに出てはくさのみを
とり山田におりてはおちぼをひろいさわへの水を
ゑんとしてつゆのいのちをささへけりさるまゝに
たのものかりはじめはそぶにおそれけるかし」七九ウ

だいにみなるゝまゝにおそるゝ事こそなかり
けれある時そぶゆびのさきよりちをあやし一くを
かいてかりのつばさにむすひつけこれをなんちか
む朝にもちてわたり御門の御げんざんに入よやと
いひふくめてそはなちけるかい〳〵しくもたの
むのかり秋はかならすこ國より都へかよふ物なれ
はかんのせうていしやうりんゑんに御幸成て御
ゆうありゆふされのそらうすくもつて何となく物
あはれなる折節ひとつらのかりとび渡るその中
よりかん一つとびさかつてをのがつばさにむす
ひ付たるたまつさをくひきつてそおとしけるくはん
人あやしみをなしこれをとつて御門へ奉るひらひ」八〇オ

てゑいらんあるにそぶかほまれのあとなりけりむ
かしはがんくつのほらにこめられていたつらに三
しゆんのしうたんを送り今はくわうでんのうねに
はなたれてむなしくこてきの一そくとなれりたと
いかばねは此地にちらすといふともたましゐ
はかへつてくんへんにつかへんそしけいとそかい
たりける御門あなむざんこれは一とせそぶといつ
しものをこ國へむけたりしがいまだなからへて
有にこそとて今度はやうりと申將軍十九さいに
なりけるにかんわうのはたをたふて百万きをさし
そへてこ國へこそむけられけれやうりはそぶか十
六の年の子なりけりやうり父をみんずるうれし」八〇ウ

さに百万ぎをたなひいてこ國にむかつてせめつ
るに今度そゑびすの軍よわくかんわうのいくさこ
はくしてこ國程なくやぶれにけりさてそぶをは
くわうやの中よりたつね出すかたあしは切れな
から十九年のせいざうををくり年三十四にて

こしにかかれきうりへこそ歸りけれそぶはこ國へ
むけられし時みかとより給つたるはたを何とし
てかもちたりけんまいて十九年かあひだ身をはな
たすいまとりおいてみかどのげんさんに入たり
ければみかと大きにかんじまし〳〵て大國あまた
たまはりてんしよくこくというつかさをくだされ
けるとそ聞えし其時よりそふみをがんしよと名付」八一オ

つかいをかんしと申なりかんかのそぶはしよ
をかんにつけてきうりへをくり本朝のやすより
はうたをなみのつかいにこきやうへつたふかれ
はかん朝かりのつはさの一くのしこれはほんてう
そとはのをもての二しゆのうたかれは上代是は末
代さかいをへたて代々はかわれとも風情はおなじ
ふせいありかたかりし事ともなり

平家物語巻第二終　」八一ウ

平家物語巻第三目録

ゆるしふみ
御さんのまき
公卿そろへ
大たうこんりう
らいがう
少将のみやこかへり
ありわう　付つぢかぜ
いしもんたう
むもん
とうろ　付かね渡し
法印もんだう　」一オ

大臣るざい
ゆきたかのさた　付法皇のなかされ
せいなんのりきう　」一ウ

平家物語巻第三

ゆるしふみ

ぢせう二年正月一日ゐんの御所にははい
らいおこなはれて四日てうきんのきやうがうあ
りけりなに事もれいにかはりたる事はなけれ
とも去年のなつ新大納言なりちかのきやう以下き
むしゆの人々おほく流しうしなはれしかは法皇
の御いきとをりいまだやますされは世のまつり
事おもものうくおぼしめして御こゝろよからぬ
事にてそありける大じやう入道もたゞのくらん
どゆきつながつげしらせ奉て後は君をもうしろ
めたきことに思ひまいらせ上には事なきやうな」二オ

れとも下には心ようしんつねにしてにかわらひ
てのみそおわしけるおなじき七日せいせいとうは
うにいつしゆうきとも申又せきゝとも申すを
なしき十八日ひかりをます入道しやうこくのをん
むすめけんれい門ゐんその時はいまだ中ぐうと
聞えさせ給ひしかぢせう二年のはるのころよ
り御なうときこえさせ給ひしかはくのもうへあ

めが下のなけきにてそ有けるへいけの人々ことに
さわぎまとへりいけくすりをつくしをんやうじゆ
つをきはめしよじに御とくきやうはじまつてし
よしやへくはんべいを奉らるされとも御なうたゞに
もわたらせたまはす御くわいにんときこへさせ給ひ」二ウ

しかばいつしかひきかへたる御よろこびにてそ
わたらせ給ひけるしゆじやうこん年十八さい中
ぐう廿二にならせ給ふまてわう子一ところもおき
させたまはすこんどわうじにてわたらせ給はゝい
かばかりかめてたからましとたんだいまわうした
むじやうなんどのあるやうにみな人あらましこ
とをそ申されけるしやうしゆくぶつぽさつに
つけては御さんへいあんきそうかうそうに仰
てはわうしたんしやうとそいのり申されけるを
なじき六月一日中ぐう御ちやくたい有にん
わじのみや是を御かぢありざすのみやは七ぶつや
くしのほうならびにへんじゆうなん子のほうをそ」三オ

じゆせられけるきさきは月のかさなるにした
かづてをん身をのみくるしうせさせ給ひて供御を
もつや〳〵きこしめされずひすいの御かんさしは
御めのうへに所せきおもやせさせ給へる御あり
さまいといたはしきをんふぜいなりさるまゝには
かんのりふ人せうやうでんのやまいのゆかにふし
けんもこれにはすぎしとそみえしもろこしの
やうきひりくわ一ゑたはるのあめをおびふようの
かせにしほれ女郎花のつゆおもげなるよりなを
うつくしき御さま也かかりけるおりをえてさま
〳〵のこはき御物のけともとり入まいらせて御
げん者しきりなりまづはさぬきのゐんの御れいう」三ウ

ぢのあくさふのをくねんなりちかのきやうさいく
わうほうし父子かしりやうべつしてはきかいが
しまのしやうりやうなんとなのり申きくも世に
おとろ〳〵しうおそろしかりし御事にてそ
ありけるふりよなる事ともあつてせいしやう

いまだらつきよせざる叟も是ひとへに御りやうの
ゆへなりとてさぬきのゐんの御ついがうあつてし
ゆとくてんわうとかうしうぢのあくさふのぞう
くはんぞうゐ太政大臣しやう一ゐをつかはさるちよく
しはせうないきこれながとそきこえしくだん
のむしよはやまとの國そうのかんのこほりかわ上
のむらはんにやの五三まいなりしをほうげんの」四オ

むかしほりおこしてすてられし後はしがい道
のほとりのつちとなつて年〳〵にはるのくさの
みしけれりしかるをいまちよくしたつね下てせん
みやうをよまれけれともばうこんいかゞ思はれけん
おぼつかなしとそ人申けるむかしもをんりやう
はかくおそろしき事にのみこそ申つたへたれ
れいぜんゐんの御物くるはしう花山のゐんの御く
らいをすべらせ給たりしはもとかたのみんふき
やうのれい又三條のゐんの御めも御らんせさりし
はくわんざんくぶかれいとかやいがみのないしん

わうをはくわうごうのしきゐにふくしさあら
のはいたいしをはしゆだうてんわうとかうすこれ」四ウ

みなをんりやうをなだめられしはかりとこそうけ
たまわれ入道しやうこくいきりやうもしりやうも
なためらるへしと聞えしはかどわきのへいざい
しやうのりもりのきやうおりをえてうちのおとゝ
のもとにおはしてまことやらん承り候へはち
うぐう御さんへいあんの御いのりのをんために
さま〳〵の御事ともの候なるなふ〳〵と申とも
大しやにすきたる事は候ましさらんにとつては
きかいがしまに候たんばの少將をめしかへされ
たらんするほどのくどくぜんごんは又なに事か
候へきと申されたりけれはおとゞいかさまに
もきそくをうかゝふてこそみ候はめとてあるとき」五オ

ちゝの御まへにおはしてちうぐう御さんへいあん
の御いのりの御ためにはなに〳〵と申すとも大
しやにすきたる事は候ましさらんにとつては
あのたんばのせうしやうが事をさいしやうのい
たふなげき申され候かまことにふびんに候なりち
かのきやうがしりやうをなためられんにつけて
もいきて候たんはのせうしやうをめしかへされた
らんする程のくどくぜんごんわなに叉か候へき人
のおもひをやめさせ給はゝ御ぐはんもかならすじや
うじゆし人のねがひをみてさせ給はゝちうくう
やがて御さんへいあんわうし御たんじやうあつて
かもんのゑいくわいよ〳〵ひらけ候へしと申」五ウ

されけれは入道しやう國ひころはさしもよこかみ
おやられしがこんどはおもひのほかにやはら
ぎ給ひてたんばの少將をはめしかへすへしごさん
なれさてしゆんくわんやすよりほつしか事
はいかにとその給けるおとゝそれもとうざいにて
ひとつはいしよに候へはともにめしこそかへさ
れ候はんすらめ一人ものこされたらんは中〳〵

ざいごうのいんゑんたるべう候と申されたりけ
れは入道いや〳〵やすよりほつしか事はさも
や有なんしゆんくはんはずいぶん入道がこうしゆ
によつて人となりたるものそかしかるにその
おんをわすれてひんがし山しゝのたにに
じやう」六オ

くわくをかまへてじやうかいか事をおろかに
いひけるときくかきつくわいなれはしゆんくはん
にをいては思るもよらずとそのたまいけるそのの
おとゝさいしやうのもとにおはしてたんばのせう
しやうをはめしかへさるべきにて候なり御こゝろ
やすくおほしめされ候へしとのたまへはさいしや
うなのめならすよろこひ給ひてのりもりか御一け
のかたはしになりまいらせたるしるしにやなと
か此事いま一どよきやうに申ささらんと思
てやらんかれにあいぐせさせて候ものゝのりも
りかかたを見候たびことになみだにむせび候か
あまりにふびんに存してあながちにかくは申」六ウ

候なりおとゝそれはさそおほしめされ候らん子は
たれとてもかなしけれはかのなりちかのきやう
か事おもずいぶんとり申候ひしかともきらく
おまたすしてばいしよにてうせ候ひぬるうへはち
からをよひ候はすいきて候たんばの少將において
は御こゝろやすくおほしめされ候へしとのたまへ
はさいしやう手をあはせてそよろこはれける去程
にきかいがしまの流人ともすでにめしかへさる
べきにさだまりしかは入道しやう國よりをん
ゆるしふみありさいしやうのもとよりもべつし
てよろこびのつかいをそへられけるつかひは
たんざゑもんのぜうもとやすとそきこえし七月」七オ

げじゆんにみやこをたつあいかまへて夜を日に
つゝいて下るへしとはのたまへとも風にまかせ
ぬかいろなれはせん中にて日かずおをくりなが
月廿日ころにさつまかたきかいがしまにそ
つきにけるをつかいふねよりあかり是にこそ

みやこより三人ながされ給ひしたんばの少將とのやへいはうくはんやすよりほうぜうじのしゆぎやうしゆんくはんそうづのをはするところわいつくやらんとこゑ〳〵によはわつてたつねけれは二人の人々はれいの熊野まふでしてをはせすそうず一人あしの屋におはしけるか聞付給ひてあまりに思へはゆめやらん又てんまはじゆんの我こゝろをた」七ウ

ふらかさむとていうやらんなんとひとりことしてはしろともなくたをるゝともなくいそきふなつきにおはしてこれこそこぞみやこよりながされししゆんくわんよそもなに事そとのたまへはおつかいみやこよりの御ゆるしふみ候とてくびにかけたるふみぶくろよりとりいだいて奉るそうづなのめならすよろこふてあしのやにはしりかへりふみをひらいて見給へはぢうくわはをんるにめすはやくきらくのおもひをなすべし中ぐう御さんへいあんの御いのりの御ためにひじやうの大しやおこなはるゝに依てきかいがしまの流人たんばの少將なりつねへいはうぐはんやすより二にんしや」八オ

めんとはかりかかれてそうづともしゆんくはんともかけるもじはなかりけりもしらいしにもや有らんとらいしを見れともなしうらにもやあるらんとうらをみれともなかりけりそうづこれはゆめかやうつつかやうつゝかと思はんとすれはさながらゆめのごとくなりいかになる身のはてぞとてこゑをあげてそなかれけるその後二人の人々は下かうせられたり少將のよまれけるにもやすよりかよみけるにも二人しやめんとばかりにて三人とはかかれすそうづいよ〳〵なみだをふいてつみもおなじつみはいしよも一つところそかしうきもしつみもともにこそおこなわるへきにこれはしゆひつ」八ウ

のあやまりかや又はへいけの思ひわすれかやみやうけんはいかにしつる事そとてふみをおくより

はしへ又はしよりおくへよみ返してんに仰ぎ
地にふしてかなしみ給へとかいそなき去程に
二人の人々はよろこび申の熊野まふでをそし
給ひけるそうづひころはおほろけにも參り給はさ
りしか少將の袖にすかりやすより入道かたもと
にとりつひてみちすからの給ひけるはあいかまへ
て此事ひとのうへと思ひ給ふべからずしゆん
くはんかいまかゝるうきめにあふ叟も御へんのちゝ
大納言どののよしなきむほんのゆへそかしみやこ
までと申さはこそかたからぬこのふねにうち」九オ

のせて九國のちまてつけ給てそののちはすておき
給ふべしとかきくとき給へは少將それはまことに
さそらおほしめされ候らんなりつねみやこをいて
はる〳〵と八ゑのしほぢをこぎすぎてかゝるうきし
まにながされ一日へんし存ふべしとは存せさ
りしかともつゆのいのちきえやらていまめしか
へさるるうれしさもさる事にては候へども一

人のこされ給ふいたはしさ申はかりも候はすこ
のふねにうちのせて九國のぢまてつけまいらせ
む事いとやすき御事にては候へともおつかひも
かなふましきよしを申候うへみやこよりの御ゆ
るされも候はさらんに三人ともにしまをは　」九ウ

出たりなん時聞えては中〳〵あしう候へしこん
どはまつなるつねみやこにのぼり人々にもよき
やうに申あはせ入道しやうこくのきそくおもう
かかふてやがて人をむかひに奉るべしあいかまへ
てよしなき事とも思食たゝでみやこのつてをま
ち給ふべしなんどやう〳〵にこしらへの給ひけれ
ともそうづいさゝかくつろぐ心ちもしたまはすか
くてじゆんふうおきにしかはふねを出す少將
のかたみには夜るのふすまやすより入道かかたみ
には一ぶのほけきやうをとゝめおきたりけれとも
そうづはなをなくさむ心ちもし給はすかねてより
ふねにのつてはおりをりてはのりあらましこと」一〇オ

おそし給ひけるおつかひ御ゆるされも候はさらん
になにしにかおふねにはめさるべきとてあらけ
なくをひおろし奉てやがてふねをはいだしけりそ
うづなをもふねのともつなにとりつきこしに
なりわきになりたけのをよふ程はひかれておはし
けるかたけもをよはぬほどにもなりしかば又む
なしきなぎさにおよきかへりおさなきもののは、
やめのとをしたふやうにこれぐしてゆけやわれ
つれてゆけやとてあしすりをしつゝいおめきさけび
給へともこきゆくふねのならひにてあとはしらな
みはかりなりいまいくほどもへたゝらねともなみ
だにくれてみえされはをきのかたをそまぬがれ」一〇ウ

けるかのまつらさよひめかもろこしふねをしたひ
つゝなきさにひれふりたりけんもこれにはすき
しとそみえし少將はよろつになさけある人
にておはしけれはさだめてよきやうにそ申されん
すらんとてそのせに身をもなけさりし心のうち

こそうたてけれそうづその夜はあしのいほりへも
かへり給はすなみたにあしうちあらはせてその
夜はそこにてなきあかすさうりそくりといつし
人かいがんさんにはなたれてむなしくなりたり
けんもかくやと思ひしられたりさる程に二人
の人々はうらつたひしまつたいして十月廿
日ころにそ肥前の國かせのしやうにはつき給ひけ」一一オ

る宰相みやこより人を下して年のうちはなみ風
もはけしかるべけれはしばらくそれにてゆおもあ
び身をもいたはり給いてはるに成てのぼり給ふ
べしとのたまひつかわされたりけれは二人の人々
そのとしをはひせんの國かせのしやうにてそおく
られける

御さんの巻

去程に内裏には同き十一月十二日のとらのこく
ばかりより中宮御さんのけわたらせ給ふとて京
中六波羅ひしめき此よし去月廿七日よりおり

〳〵そのけわたらせ給ひけるかべつしてけさのとら
のこくはかりよりとりたてたる御事にてそわた」一一ウ
らせ給ひける御さんじよは六波羅いけどのなりけ
れは法皇も御幸なる其外くはんばくまつとのだい
じんくきやうてんじやうのししんてんやくのかみ
をんやうのかみみな我も〳〵とはせ參らる入道し
やうこく大きにあされてむねにもをおきつや
〳〵物もおぼえ給はす人のまいつてもの申時は
何事もたゞよきやうに〳〵にとばかりその給ひ
ける聞ばなんとへ出たらんにはこれほとに志も
おくせし物をとのちにはのたまふ小松殿はれいのさ
わがぬ人なれははるかに日たけて後ちやくしごん
のすけ少將これもり以下きんだちのくるまやりつ
つけ御馬十五疋ひかせてまいられけり參りもあら」一二オ
すしやきん千りやうなんりやう百きんけん七御衣
四十りやうひろぶたにおゐて返上せらるきら〳〵
しうそみえし御馬をまいらせられける叉はいんし
くわんこうに一條のゐんのきさきしやうとう門
ゐん御さんの時御だう殿の御馬をまいらせられた
りしそのれいとぞ承る五條大納言國つなのきや
うも御馬數疋返上せらる小松殿の御馬をまいらせ
られける事はきさいのみやの御せうとなるうへ
父子の御けいやくあれはことはりなり國つなのき
やうの御馬のまいらせられやうは心さしのいたり
とくのあまりかとそ人々かたふけあはれけるさん
ぬるだいぢに鳥羽院のきさきたいけん門ゐん御」一二ウ
さんの時にのそんて大しやおこなわれしその
れいとしてこのたひもぢうくわのものおおくしや
めんせらる今度御さん平安あるならは八幡平野大
原のなんとへぎやうかう成べきよし御ぐはんをたて
させ給ふせんげん法印これをけいひやくす又伊勢
いわしみつをはじめ奉てあきのいつくしまに至る
まて七十よしやへ神馬をまいらせられけり神社

には賀茂をはじめ奉て廿四かしよへくはんへいし
をたてらるぶつじにはとうだいこうぶく延暦園
じやう以下四十よかしよに御じゆぎやうあり御
じゆきやう物のおつかいにはみやのさふらひのな
かにうくわんのともからこれをつとむひやうもん」一三オ

のかりきぬにたいけんしたる者ともが宮この
御じゆぎやうもの御けん御衣をもちつゝゐてひ
かしのたゐよりなんていをわたつて西の中門に
いつめつらしかりし見物なり佛所の法印に
仰てごしんとうじんの七佛やくしのざうならび
に五大そんのざうを作りはじめらる仁和寺御むろ
はくしやくきやうのほう座主のみやかかくくわいほ
うしんわうは七佛やくしの法寺のちやうしゑん
けいほうしんわうはこんがうとう子のほう其外一
しきんりん五だいこくうさう五だんの法六じか
りん八じもんじゆふけんゑんめいのほうに至る
まてたい法ひほう殘所なくしゆせられけりごまの」一三ウ

けふりは御所中にみち〳〵れいのをとはくもお
ひゝかししゆほうのこゑは身のけもよたつはかり
なり御けんしやにはばうかくしやううんりやう
そうじやうしゆんげう法印がうせんじつそんりやう
そうつ以下をの〳〵そうがのくどもをあけ年
らいしよちのほんぞんほんぢ本山の三ほうとしこ
ろひころのぎやうこうをもつてもまれたるけしき
いかなる御ものゝけなりともおもてをむかふべし
ともみえざりけりかゝれとも中宮はひまなくし
ぎらせ給ふばかりにて御さんもとみに成やらす
あらはるゝ所の御物けともとはみやうわうよりま
しのばくにかけてせめふせ〳〵もまれけれと」一四オ

もおとりくるふ有さまはおそろしなんともをろか
なり法皇は今熊野へ御幸成べきにて御しやうじん
のついでなりけれは御きちやうちかふ御さありて
千じゆきやうをうちあけ〳〵あそばされけるにそ
をとりくるふ御よりましともしはらくばくをしつ

めてちやうもん仕る法皇仰なりけるはいかなる御
物のけなりともこのおい法師かかくて候はんほど
はいかてかたやすくちかつき奉るべきたゞしさ
ぬきのゐんの御れいばかりなりそれもついかうの
後は御うらみあるへしともおほえす其外つぎさま
のものともはてうをんを以てみな人となりたるも
のそかしたとひほうしやの心をこそ存せさらめあ」一四ウ

にしやうけをなさんやとう〳〵まかりしりそき
候へとて女人しやうさんしかたからむ時にのそん
てじやまじやしやうしてく忍びかたからん時は心
おいたして大ひしゆをせうしうせはき神たいさん
してあんらくにしやうせんととなへさせ給ひ
て御じゆずさら〳〵ともませもはてさせ給はぬ
に御さん平安のみならすわうじにてそまし〳〵
けるほん三位の中將しげひらのきやうのいまだ
其ころ中宮のすけにて御前に候はれけるか御れん
のうちよりつつと出御さん平安のみならすわう子

御たんしやう候そやとたからかに申されたりけれ
は法皇をはじめ奉りくわんばくまつ殿太政大臣以外」一五オ

のけいしやううんかくをの〳〵のじよしゆすはい
の御げん者をんやうのかみてんやくのかみすへて
たうしやうたうか一どうにあつて申あはれける
こゑ〳〵のはるかの門外まてもとよみてしはしは
しつまりもやらざりけり入道相國あまりのうれし
さにやこゑをあげてそなかれけるうれしなきとは
是を申へきにや小松殿御さん所へまいらせ給ひて
きんせん九十九もんをわう子の御まくらのしたに
おきくわのゆみよもぎの矢をもつて天地四はうを
いさせ天をもつては父とし地を以てははゝとさた
め御こゝろには天照大神いりかはらせ給へ御じゆ
きやうぢやうをんははうしとうばうさくがよわ」一五ウ

ひをたもたせ給へといはいまいらつさせ給ひて御
ほそのおをつかせまいらつさせ給ひけり

公卿そろへ

御ちつけには平大納言時たゞのきたのかたそつのすけどのそ參られけるさきの右大將むねもりのきやうのきたのかたこそ參らせ給ふべけれともさんぬる七月になんざんにてせいきよせられしかは大じやう大納言りやうくはんをじし申されてむねもりのきやうはろうきよとそ聞えしあはれ今度出仕あらば兄弟左右にあいならひ給ひていかばかりめてたかるべきにむねもりのろうきよほいなかりし事ともなり法皇は今熊野へ御幸なる」一六オ

へきにて門前に御くるま立させられたりけれはいそぎ御たいしゆつ有入道あまりのめてたさにやしやきん一千りやうふじのわた二千両おつさまに法ちうじ殿へ進上せらる法皇これ大きにしかるへからすとていそき御げん者のなかへそくだされける其後法皇は今熊野へ御幸なる御あんじつのまへに今度法皇六波羅にて御げんじやの御しやうようほこりあるべしとらくしよをそゑたりけるいかなるあとなしものゝしわさにてかありけんをかしかりし事ともなりされはふるい人々の申あはれけるは御さん平安といのらせ給ふはさる事なれともこれ程しも御かる〳〵しき御事はよも」一六ウ

わたらせ給はし大上法皇の御げんじや上こにも承はらす又末代にあるべしとも存せすとそ申あはれける今度の御さんにめてたかりしはわうしたんしやうかたしけなかりしは法皇の御げんしやゆうなりしは小松殿のふるまいおもはざりしは入道相國のうれしなきほゐなかりしはむねもりのろうきよなりあやうかりし事にはわうしたんしやうの時は御てんのむねよりこしきをみなみへまろはかす事の候をひめみやたんじやうのやうに聞なしてきたへまろはかす人々にあれはいかにとどよまれてみなみへおとしなをしたりしそこれきたいのあやまりなり又おかしかりし事にはかもん」一七オ

のかみ時はれと申すをんやうじのせんどの御
はらひのやくにめされてまいりけるか所じうなん
どもぼくせうなりけるに人のおほき事はたう
まちくいのことしひざをよこたふるに及はね
はやく人のまいり候〳〵とて大せいのなかをおし
わけ〳〵參るほどにいかゝはしたりけん右のくつを
ふみぬかれうつふしてとらんとしけるかかふり
おさへにつきをとされてそくたいたゝしきらう
しやのもととりはなちにてねり出たりけれはみな
人一度にどつとそわらわれける時はれ我身の上
とはつゆしらず四はうをきつと取まきしていか成
けうけいのおきて候やらんとてあきれてたつたり」一七ウ

ければこらへかねたるわかき人々はみなかん所
へにけ出てそわらわれけるをんやうじはへんば
いとてあしをだにもあらけなくふますとこそうけ
たまはるに其時はなにとも思はさりしかとも後に
こそおもひあはする事ともおほかりけれ去程に

御さんしよへ參りこもらせ給ふ人々にはくはんば
くまつ殿太政大臣めうをんいん殿左大臣大ゐの御門
右大臣月のわ殿ない大臣小松殿德大寺の左大將
しつていけん大納言さだふみ三條の大納言さねふ
さとう大納言さね國五條の大納言國つな中の御門
の中納言むねいへいけの中納言より盛花山のゐん
の中納言かねまさべつたうたゞちかあぜつしすけ」一八オ

かた源中納言まさよりとう中納言すけながこんち
うなごんさねつな左衞門のかみ時たゝ左ひやうへ
のかみしげのり右兵衞のかみみつよしくわうごく
うの大ぶともかた平宰相のりもり左の宰相の中將
さねむね右の宰相の中將さねいへ左だいべんのさ
いしやうながかたう大べんの宰相つねふさ六かく
の宰相いゑみちほりかわの宰相よりさだしん宰相
の中將みちちか左京のだいぶなりのり太さいの大
にちかのぶ新三位さねきよ以上三十三人う大べん
の外はみなちよく衣なり今度ふ參のくぎやうには

さきの右大將むねもり大みやの大納言たかすゑ七
條のしゆりのたいぶのぶたかのきやうをさきとし」一八ウ
て以上十三人とそきこえしこの人々はあるひは
きたのかたせいきよあるひは御むすめなんさんに
よつてなりされともつぎの日ゑほしなおしにて御
よろこひ申に西八條へ參られけるとそ承る

大とうこんりう

其後内裏には今度の御いのりのきそう高僧たちに
けんじやう行はれけり仁和寺のみやはとうじ
しゆざうならびに五七日の御じゆほう大げん
のほうくはんぢやうのこうぎやう有べしとてさて
しゑんりやうほうげんを法印にきよせらる座主
のみやは二ほんならひにぎつしやを申させ給
ひけるを御むろしきりにささへ申させ給ひけれ」一九オ
は御でしかくせいそうづを法印にきよせらる同き
十二月廿日わうしとうぐうにたゝせ給ふには
小松のない大臣重盛こうだいぶにはいけの中納言
より盛のきやうとぞ聞えし御さんあつてわつか
三十よ日いつしかなりとそ人申ける日かすふ
れは中宮内裏へまいらせ給ひけり入道相國此御む
すめきさきにたゝせ給しかはあはれきさきはら
にわうし出きさせ給へかし我ふうふともにぐわ
いそ父ぐわいそぼと仰かれて天下を我まゝにせん
と思われけれは日吉の社へ百日まうてしていの
り申されけれともしるしなしさらはわかあかめ
奉るあきのいつくしまへ申さんとて三年月」一九ウ
まうでしていのり申されたりければきさき
御くわい人あつて御さん平安わうし御誕生有けり
そも〳〵入道相國のあきのいつくしまをしんし始
られけるゆへをいかにと申すにそのかみいまだ
あきのかみたりし時鳥羽院の御ぐはんかうやの大
たうあきの國を以てこんりうすへしとてわたな
べのゑんどう六郎よりかたをざつしやうに付ら

れて六年にしゆりをはんぬ其後きよもりかうや
へ參り大たうをかみおくのゐんに參られけるに
いつくよりきたれるともなくひたひには四かいの
なみおたゝみまゆにはしもをたれかせさへのふた
またなるにすかつたるらうそう一人出させ給ひき」二〇オ

よもりにたいめんあつてやゝはるかに御物かたり
有けり我此山にみつしうをひろめて年ひさし
大たうこん立事終たり天下に又も候ましさらん
にとつてはゑちぜんのけいの社とあきのいつく
嶋の社はともにりやうがいのすいしやくにてわた
らせ給ふしかるにこんがうかいのすいしやくゑ
ちぜんのけいの社はめてたふさかへてましませと
もたいざうかいのすいしやくあきのいつく嶋の社
のすへしてなきかごとくに候を是をも申てしゆ
ざうし給へかしさだにも候はゝ御へんのくはん
かゝゐにおゐてはてんがにならぶものもあるまし
きそとの給ひて歸り給ふ此らうそうのゐ給ひつる」二〇ウ

所にいきやうくんじたりきよもりふしぎの思
おなし人をつけてみせられけれは三ちやうはかり
はみえ給ひて其後はみえ給はすつかい歸て此由申
たりけれはきよもりたつとやまことの大しにて
まし〳〵けるそそのぎなりはしやばせかいの思出
せんとてだんにかへりりやうかいのまんたらを
すみゑにこそうつさせられけれ両まんだらをは
じやうめう法印と申すゑしにうつさせらるとう
まんだらををはきよもりじひつにかかれけるか八
ゑうのちうぞんのほうくはんをは我かふべよりちを
出してかかれけるとそ承るきよ盛みやこにのほり
ゐんの御しよに參てこのよしをそうし申され」二一オ

たりけれは法皇なのめならす御かんあつてさらは
あきのいつく嶋おもしゆざうすべしとてあきす
わうながと三か國ににんをのへられけりきよも
りかしこまつて承りいつくしまにわたりとりゐ
を立かへ社々を作りあらためらる百八十けんのく

わいらう事ゆへなふとげて後清盛明神の御まへ
に參りつ夜せられたりけるに御ほうでんの御と
おしひらきうちより十二三はかりなるどうじ一
人出させ給ひてやゝなんぢ天下をはこれをもつて
おさむへしとてしろかねにてひるまきしたるしら
ゑの小なぎなたを給るとおぼへゆめさめてみ給へは
すなはちまくらにそ候ひける清盛きとくの思を」二一ウ

なしかぐらをまいらせられければ明神ないしに
うつらせ給ひてなんぢしれりやわすれりやあるひ
じりをもつていはせし事はただしあくぎやう
あらはしそんまてはかなふましとてみやう神あ
からせ給ひけり有かたかりし御事なり

らいかう

きさきはらに王子いのり出し奉る事せんれい
なきにあらずむかししらかわのゐんのきさきは京
ごくの大殿の御むすめなりけんしの中宮とてさて
そあひありしかはしゆしやういかにもしてきさ

きばらに王子あらまほしうおほしめされて其ころ
三井寺にうげんのそうと聞ゆるじつさうばう」二二オ

のあじやりらいがうをめされてなんぢきさきばら
にわうしいのり出してまいらせきけんじやうは
こうによるべしと仰けれはらいがうかしこまつて
承り御前をついたつて三井寺に歸りぢぶつだう
にとぢこもり百日いのり申たりけれはきさき程
なふ御くわいにん有てせうほうぐはん年十二月
十六日御さん平安わうし御誕生ありけりしゆしや
うなのめならす御かんあつてやがてらいがうをめ
されて御くわんははやじやうじゆしぬなんぢか
けんぢやうはいかにと仰ければらいがう三井寺に
かいだんこんりう仕るべきよしを申すしゆしや
うこはいかに一かいそうじやうなんとをものそみ」二二ウ

申さんするかとおほしめされたれは存ぐわいの
しよまうかな我王子をまふけまいらせてそをつか

しめんとおほしめすもたゞかいたいぶゐをおほ
しめすゆへなりなんぢかしよまうたつせは山いき
とをりりやう門合戦して天だいの佛法悉ほろび
なんすされはつゆおほしめしよらぬ御事なりとぞ
仰けるらいがう以外にいかれるけしきにて三
井寺にかへりぢぶつだうにとぢこもりひじにせん
とそしたりけるしゆしやう此由をつたへきこしめ
されてこうそつけうばうのきやうのいまだみまさ
かのかみにてをわしけるをめされてなんぢはらい
がうにしだんのけいやくあんなれ三井寺へゆい」二三オ

てよきやうにこしらへてみよかしとおほせけれ
ばけうはういそき三井寺に行むかひちよくぢ
やうのおもむきをいひふくめけるにへんじも
せすばうに入つて見給へはこと〳〵しくふすほつ
たるだうぢやうにたてこもりおそろしけなるこゑ
おもつて君子にたはふれのことはなしりんげんあ
せのことしとこそうけたまはるに申すむねを御

せういんなからんにおゐては我いのり出し奉つた
る王子なればくそくし奉てまだうへこそゆかんす
れとて其後は物も申さすけうばう大きにおとろき
歸參つて此よしそうし申されたりければきん
中以外にさわかせ給ふ程こそありけれらいがう」二三ウ

ついにひじにこす其後わうじらいがうかれいとて
つねはなやませ給ひけりある時はれいもつたるら
うそう有時は水かめもつたる法師のおんまくらち
かふ參るとおほしき時は御なういよ〳〵をもらせ給
しか御年四さいと申しせうりやく二年
八月六日ついにかくれさせおはしますあつふ
のしんわうこれなりしゆしやうなのめならす御な
けき有て両とうの座主りやうしん大そうじやう其
時はいまだゑんゆうばうのそうづにておはしける
をめされてなんぢきさきはらに王子いのり出し奉
れと仰ければゑんゆうばうのそうづ申されけ
るはむかしより代々の御門の御ぐわんはみな我山」二四オ

にてこそとけさせ給ふ御事にては候へされは九
條のうせうじやう天だいのじゑそうじやうにし
だんのけいやく候ひてこそれんせんゐんの御さん
も平安にはわたらせ給けんなれわか山の佛法山わう
の御いくわう今に始ぬ御事なりとてとうざんし
てぢぶつだうにとぢこもりかんたんをくたいてい
のり申されければきさきほどなふ御くわいにん
あつてせうりやく三年七月九日おほしめすさ
まの御さん平安王子御誕生ありけり八さいより御
くらいにつかせ給ひて御ざい位廿一年さしも
けんわうせいしゆの聞えわたらせ給ひしかども
らいがうかれいとてをり〳〵なやませ給ひしか」二四ウ

御年廿九と申しかせう二年七月十九日
ついにかくれさせ御はしますほりかわの天わう
これなりむかしも怨りやうはかくおそろしき事
にのみこそ申つたへたれ今度さしもめてたき御
さんにだいしやおこなわれたりといへともかの
俊寛そうつ一人しやめんなりけるこそうたてけれ

少將の都歸り

ぢせう三年正月十日丹波の少將なりつねへい
判官やすより入道二人肥前の國かせのしやうを立
てみやこへとはいそかれけれともよかんもいま
だはけしくてかいしやうもいたくあれけれはつね
のうちにて日數を送りきさらぎ廿日ころにそ備前」二五オ

のこ嶋にはつき給ひけるそれより地にわたりあり
きのへつしよにたつね入ちゝ大納言殿のすみ給ひ
し所におはして見給ふにあやしのしづかいへ
なればむぐらしけりてかどをとぢまつのはつもり
てのきをうつむしばひきむすふいほのうちこの
はかきしくやどなれやふかきしやうじたけのはし
らにかきおき給ひしふでのすさみを見給ふに
なみだせきあへ給はすあんけん三年七月廿日
出家同き廿五日のぶとしげかうとそかかれたりさ
てこそげんさゑもんのぜうのぶとしが參りたるを

もしられけれそばなるかべには三ぞんらいかうた
よりあり九ほんわうじやううたかひなしともかゝ」二五ウ
れたりさすかこの人ごんぐじやうどののそみもを
はしけるにやとかぎりなきなげきのなかにもいさ
さかたのもしくそ思はれけるあはれ人ののちの世
までのかたみにはしゆせきに過たるものあらし
ろてんかはらずふぜいなをおなじぬしはをはせね
ともはかなきあとはうせざりけりかきおき給はす
はいかてかこれをもしるべきとてやすより入道と
二人よみてはなきなきてはよみそし給ひける其後
はかをたつね奉るにひんがしへ十よちやうゆき
てまつの一むらあるなかにかい〳〵しうだんをつ
ゐたることもなくそとは一本もみえさりけるに
少將つちのすこしたかき所に袖かきあはせいき」二六オ
いきたる人にむかつて物を申やうにかやうにこの
世にもわたらせ給はすとをき御まぼりとならせ給た
る御事をはしまにてかすかにつたへ承ては候へ
とも心にまかせぬうき身なれはいそひて參る事
も候はすなりつね都をいてはる〳〵と八こんのし
ほちをこぎ過てうき嶋に流され一日へんしな
からふへしとは存せざりしかともつゐのいのち
きえやらていまめし歸さるゝうれしさもさる事
にては候へともおなじうはいきてこの世にわた
らせ給ふを見まいらせても候はゝこそいのちなか
らへたるかいも候はめ是まてこそいそかれつれい
まよりのちはいそくべしともおぼへずとてかきく」二六ウ
とひてそなかれけるまことに存じやうの時ならは
まづ大納言殿こそいかにやとものたまふべきに
しやうをへたつるならひほとくちおしかりける物
あらしこけのしたにはたれかはこたふべきたゝあ
らしにさはくまつのひゝきばかりなりその夜は
やすより入道と二人はかのまはりをぎやうだうし
あけければはかにだんゆゝしうつかせつゝくぎ

ぬきしまはさせはかの前にかりやをうつて僧を
あまたしやうじ奉り七日七夜か間ふだんねんぶつ
申させ我身はきやうをそかかれけるけつぐわんに
は大きなるそとはをたて過去しやうりやうしゆつ
りしやうじせう大ぼだいとかきとゝめ年がう」二七オ

月日の下にはけうし成つねとそかかれたる三
世十はうぶつだのしやうじゆもあはれみ給ひばう
こんそんりやうもいかかうれしく思はれけん年
さりとしきたれともわすれかたきはぶいくのむか
しのおんゆめのごとくまぼろしのことしつき
かたきはれんぼの今のなみだなりさればあやしの
しづ山がつのこゝろなきものまてもいかなるのゝ
すゑ山のおくにも子をはもつべかりける物かなと
てみななみだを流しそでをぬらさぬはなかりけり
其後少將はかのまへにかしこまり今しばらくも候
ひてねん佛のこうおもつむべう候へとも都にまつ
らん人のおほつかなきも候らんに又こそまいり候」二七ウ

はめとまうじやにいとま申つゝなく〳〵そこをそ
たゝれけるさこそは大納言もくさのかけにてなご
りをしうや思はれけん同き三月十六日少將鳥羽
につき給ふ大納言のさんさうすはま殿とて鳥羽に
ありすみあらして年へにけれはついぢはあれと
もおゝいもなく門はあれともとびらなしにはに
立入見給へはじんしきたえてくさふかくいけのみ
きはを見まはせは秋の山のはる風にしらなみ
しきりにおりかけてしゑんはくおうせうよう
すけうぜし人のこひしさにつきせぬ物はなみだ
なりいへはあれともらんもんおちてしとみかうし
もたえてなしこゝは大納言殿のすみ給ひし所此」二八オ

しやうじをばかりこそあけ給ひしか此とをはとこ
そたて給ひしかこのつまどをばかうこそ出入給
ひしかこのきおはみつからこそうへおき給ひし
かなんと父のことを事にふれて世にもなつか
しげにこそのたまひけれやよひなかの六日なれ

は花もいまだなごりありやうばいたうりのこずゑ
こそおりしりかほに色々なれむかしのあるし
はなけれともはるをわすれぬ花なれや少將花の本
にたち依てたうりものいはすはるいくばくかくれ
ぬるゑんかあとなしむかしたれかすんじ
ふるさとの花の物いふ世成せはいかにむかし
のことをとはまし」二八ウ

このふるきしいかをゑいせられけるにそやすより
入道もそゝろになみだを流しつゝすみぞめの袖
をはぬらしけるくるゝ程とは思はれけれともなを
もなごりのおしけれは夜ふくるまてこそおはしけ
れあれたるやどのならひにてふかきのきのいたま
よりもる月かけはくまぞなきけいろうの山あけ
なんとすれともいへぢはさらにいそかれすさて
しもあるべきならねはなみたをゝさへて出られ
けりあけけれは都よりめん〳〵にのり物とも鳥羽の
へんまてつかはされたりけれともやすより入道少
將のなこりをおしみつゝひとつくるまにのつて都
へ入七條かわ原にてゆきわかれけるかたかひに」二九オ

なごりをおしみてしはしはなれもやらさりけり
まことにおしかるべしりよじんが一むらさめの過
行し時一じゆのもとに立やとりゆきわかるゝだに
もなごりはしたふならひなり花のもとのはんじつ
のかく月のまへの一夜のともたにもわかれは
かなしき物そかしいはんやこの人々は此みとせ
か間うかりししまなみのうへふねのうちのとも
なれは一ごうしよかんのちぎりにてせん世のはう
ゑんもあさからすや思はれけんさる程にやすより
入道はひんがし山さうりんじへとて行ければ
少將六波羅へいり給ふ少將の母上はりやうぜんに
おはしげるか昨日より宰相のもとにおはしてま」二九ウ

たれけるに少將のいり給ふをたゝ一め見給てい
のちだにあれはとはかりにてひきかつきてそなか

れける宰相のうちの上下なんによみなひとつ所に
さしつどひよろこびのなみだをながされけり少將
のめのと六條がくろかりしかみもしろくなりき
たのかたのさしも花やかなりし御有さまも此みと
せかあひだのつきせぬもの思ひにやせくろみ給ひ
て其人ともみえ給はす少將の流され給ひし時三さ
いになられけるおさなき人ことしは五さいに
なられけるかはるかにおとなしうなつてかみゆふ
ばかりにそみえられける又きたのかたのかたはら
にみつはかりなるおさなき人のおはしけるを少將」三〇オ

あれはいかにとのたまへはめのとのねうはうこれ
こそとばかり申てなみだにみせびけれは少將ま
ことやながされし時たいなひにありしを心元
なふみすててくだりしかさてはべちの事なふ
むまれそだちたる事よとぞの給ひける其後少將
ふたゝび君にめしつかへて宰相の中將まてあから
れけるとかややすより入道はひがし山さうりんじ

のやとにをちつゐてまつとゝめをきたりしはゝ
の行衛をとひけれはちかきあたりの人の申ける
はそれはこぞのはるのころまてこれにおはしまし
候らいつれともなを人めをつゝませ給て一條のき
たむらさきのゝへんにしのふてをわしまし候ひ」三〇ウ

つるは嶋より御上りあるべきよしをきゝ給て老の
身ながらさへきへやらてふたゝひあいみん事のうれし
さよとなのめならすよろこひ給ひしにあはれや過
にしきさらぎのころより心ちれいならすなり給ひ
てうちふし給ひつゝ終にむなしうならせおはし
まして今日は五日なりとそ申けるやすより入道
なみだをはら〳〵となかいて我肥前のかせのしやう
にて年をくらし備前の有きのべつしよにて日數
をだにもおくらすはなどか今一度はゝを見ざるべ
きさだめなき世のならひ也一しやうは是ゆめのご
としたれか百年のよわひをごせん万事はたゝ
みなむなしいづれかじやうぢうの思ひをなすと思」三一オ

つゝけけるきのきのいたまよりもる月かげのお
ほろなるをみてなく〳〵よみたりけるとそ
ふるさとののきのいたまにこけむして
思ひし程はもらぬ月かな
とくちすさびつゝやがてそこにろうきよしてう
かりしむかしをおもひやりほうぶつしゆといへる
物かたりを作りけるとぞうけ給はるあはれなりし
事どもなり
ありわう
さるほどに法勝寺のしゆ行俊寛そうつのわらはに
ありわうかめわうとて候よひけるがともにしうの
事をそかなしみける中にもかめわうはその」三一ウ
おもひのつもりにや程なふはかなくなりにけり
なをもうき世にありわうはあはたぐちのへんにし
のふて候ひけるか二人のは人々めしかへされての
ほり給ふにそうづ一人しまにとゝまり給へりとき
いてもしやと鳥羽のへんまて行むかふて見ける
にまことに二人の人々はみえ給へともわかしうは
みゑ給はす人にとへは嶋にとゝまり給へりとそ申
けるわらは判官入道のそばちかふたちよつて事
のしさいをとひけるにやすより入道嶋のあり
さまをこまやかにかたりければいとゝせんかた
なくかなしくてつきせぬ物はなみだなり我都に
てかくものを思はんよりしまへたつね參りかは」三二オ
らぬ御すがたを今一度見もしみえ奉らはやもし又
此世になき人となり給ひたらはごこつをとつて
たつとき所におさめはやと思ひけれは人にはいは
ねともない〳〵は出立けりそうづのひめきみのなら
におはしけれはならにくだつてひめ君に申
けるは二人の人々はめしかへされてのぼり給へと
もかみの一人嶋にとゝまらせおはしまし候かあ
まりにあさましう存候かなはぬまても嶋へたつ
ね參らはやとこそぞんじ候へ御ふみや候と申た
りけれはひめ君なのめならすよろこび給ひてやが

て御ふみあそはしてそたふたりけるわらはひめ君
の御ふみ給ていきながらめいどにをもむく心ち」三二ウ

して思ひければよもゆるさしとておやにもきやう
だいにもしらせす都のうちを忍びつゝまきれ出て
さつまかたへそおもむきけるもろこしふねのとも
つなはう月五月にとくなればなつごろもたつ
をおそしとまちかねてやよひのすゑに都をたつ
てはる〳〵とやえのしほぢをしのきつゝさつま
かたへそくだりけるわらはさつまの地におち付
て嶋へわたらんとびんぜんをこへは人あやしめ
いしやうをはきとりなんとしけれともすこしもこ
うくわひせずひめ君の御ふみばかりをこそ人にし
られしともとゆひのなかにはいれたりけれとか
くしてあきびとのふねにびんせんし嶋にわたつ」三三オ

てみけるにみやこにてつたへきゝしは事の
數ならずたもなくはたけもなくむらもなくさとも

なしたま〳〵あるものも此どのひとにはにざりけ
りいふ事をもきゝしらすわらはある者のそばち
かふたちよつてこれに一とせ三人なかされ給ひ
しか二人はめしかへされてのほり給へり一人の
こされおはします法勝寺のしゆぎやう俊寛そうづ
の御坊の御行衛やしり給ひたるととひけれはそう
つともしゆぎやうともしつたらはこそ返事おもせ
めたゞかしらをふつてしらずとのみそこたえける
其中にすこしこゝろへたるものの申けるはい
さとよさやうの人は此へんにありしかそれも此」三三ウ

ちかふよりはいつちへか行ぬらんゆきがたしら
すとぞ申けるわらはさては此世になき人と成
給ひたるにこそとおもひけれはいとゝせんかたな
くかなしくてつきせぬ物はなみだなりもし山の
かたにもやをわすらんとていまだしらぬしんざん
へこそわけ入けれみねによぢたににくだれとも
せいらんゆめをやぶつてそのをもかけもみえすは

くうんあとをうづむてゆききのみちもわかさりけ
り山にてはついにたつねあはす又うみのほとり
に付てたつぬるにさとうにいんをきさむかもめ
おきのしらすにすたくちとりのほかは事とふ
物もなかりけり有あしたいそのかたよりかけろう」三四オ

なとのやうにやせおとろへたるものよろぼひ出來
たり本は法師にてありけりとおぼえてかみは天様
においあかり万のもくつとりついておとろをいた
たきたるかことしつぎめあらはれてかわゆたひ
身にきたるものはきぬぬののわけもみえすかた
手にはあらめをもちかたてにはうおをもちずい
ぶんさきへといそげともはかゆかすたゝ一所にこ
ろ〳〵としてそ出來るわらは都にておほくのこつ
がい人をみつれともかやうのものはいまだなしぢ
ごくがき三あく四しゆはしん山大かいのほとりに
ありとほとけののべとき給ふなればしらずわれい
きながらがきだうへまよひきたれるやらんと思ひ」三四ウ

てやう〳〵あゆみ行程にさすか又人のすがたに
見なしつゝやゝ物申さうといへは何事とこたふ
わらはふしきやこれこそわかいふ事をきゝしつ
たるよとおもひそはちかふたちよつてこれに一
とせ三人流され給ひしか二人はめしかへされて
のぼり給へり一人のこされおはします法勝寺のし
ゆ行俊寛そうづのをんばうのをん行衛やしり給
ひたるとといけれはわらはこそ見わすれたりけれ
ともそうづはなにかは見わすれ給ふべきなれはい
かにありわうよ我こそそよとの給ひもあへず手に
もち給へるあらめうほをなげすててすなごのうへ
にたをれふしやがてきえいり給ひけりわらはそう」三五オ

づをかゝへ奉てわれみやこよりはる〳〵と是まて
たつね參りけるかひもなくいかにかかるうきめを
はみせさせ給ひ候やらんたとひぢやうごうにてわ
たらせ給ひ候ともしやうあるをんこゑを今一度き
かせ給へとやう〳〵にかなしみければそう

づさすがぢやうごうならねばいきかへり給ひけり
わらは參て候ありわう參て候と申たりけれはそう
づいきのしたにてのたまひけるは我此嶋になが
されてのちこひしきものともをゆめに見る時
もあり又まぼろしにたつ時もありしかそれも此
ちかふよりは身もよはりこゝろもつきはてゝさや
うにゆめうつゝとおも思ひわかぬなりされはたゝ」三五ウ

いままて御いのちのひさせ給ひける事のふし
きさよと申ければそうづの給ひけるは我此嶋
にながされてのち丹波の少將のしうと平宰相のり
もりのしよりやう肥前のかせのしやうよりいしよ
くをつねは送られしかはそのはくゝみにてあり
しか二人の人々はわかれてのちやがていかにも
なるへかりし身の丹波の少將のよしなき事と
もをおもひたゝで都のつてをまてなんとのたまい
しほどにもしやとをろかにたのみつゝいままて
かくてありつるなりこのしまには人のしよくじ

たえてなき所なり山に入てはいくらも有いわう
といふ物をとつてあき人にあひものにかへなん」三六オ

どして過しかそれも此ちかふよりは身もよはり
ちからもつきはてゝさやうのわさもかなはぬなり
かやうに日ののどかなるときはなきさにいてたま
〳〵こしたるつりうどにあひひざをかゝめ手を
合てうほをこひなぎさにいくらもうちよせけるあ
らめいそ物をとつてつゆのいのちをいきのこけぢ
にかけたるなりさらてはうき世を渡るよすがをは
いかにしつるとかおもふこれにて何事をもいふへ
けれともいざわかいゑへとのたまへはわらわあの
御ありさまにても我いへとてもち給ひたる事の
ふしぎさよとおもひやう〳〵あゆみ行けれども
そうづさすかあゆみもやり給はねはわらはかたに」三六ウ

ひつかけ奉つてをしへにまかせて行程にある
山のふもとに二人の人々の作りをかれたりし

あしやのはしらにはまつのゑたをしつゝけたうつ
ばりにはよりたけをわたしまつのおちばあしの
かれぱをうへにもしたにもひしととりかけられた
りけるかこれこそ我いへよとてたちいつてふされ
けれともいつくにあめ風のたまるへしともみえさ
りけりわらはいとをしや此人の都にをはせし時
は法勝寺のじむしきにて八十よかしよのしやう
ゑんをつかさどり給ひしかばむね門ひら門のうち
にしておほくのしよじうけんぞくらにいねうかつ
がうせられてこそおはせしにごうにさま〳〵」三七オ

ありじゆんしやうじゆんげんじゆんごごうといへ
りされは此人の一ごがあひだもちひ給へるところ
のざいほうたとへに大がらんの寺物佛物ならす
といふ事なしされはしんぜむざんのことはり
にこたえて今じやうにてぜんどうをかんじ給へる
かとおほえたりそうづいまはまことにうつゝなり
と思ひ定ての給ひけるはわれこの嶋に流されて後

二人の人々のむかひの時も一さつを事つくる者
もなしたゞいま又なんぢかくだりたるにもをとつれ
のなきはわかゑんゆかりのものともは一人もみや
こにあとをとゝめぬかとのたまひければわらは
さん候君西八條殿へ御出ののちついふくのくはん」三七ウ

にんともか參りむかひ候ひててんでんの御ゑん者
たちをはこゝかしこにてうしなひ奉り候なりきた
の御かたはわか君ひめきみひきぐしまいらつさせ
給ひてくらまにしのふておはしまし候ひし
かはわらはつねは參候にわか君はいかにあり
わうよちゝのわたらせ給ふなるきかいが嶋とかやに
我つれてゆけぐしてゆけとて參り候度ごとにむつ
からせおはしまし候ひつるか此はる世間にわらんへ
のし候なるもがさとやらん申す事をせさせを
はしまし候て過にし二月九日の日つゐにむな
しうならせおはしまし候成きたの御かたはひころ
の御おもひに又この事さへうちそひて御なげ」三八オ

きあさからすまし〳〵候ひつるかそれも三月二
日の日つゐにむなしうならせおはしまし候ひぬ
今はひめ君ばかりこそならどのにむかへられま
いらつさせ給ひて御わたり候へ其御ふみは候とて
もとゆひのなかよりとりいだひて奉るそうつひら
いて見給へばけにもわらはか申すにたかはすか
かれたりいまははやわかにもおくれさふらひぬ又
母上にもおくれまいらせさふらひてたうじはなら
のおばごぜんの御もとにむかへられ參らせてこそ
さふらへなとや二人の人々は歸りのぼり給ふに
一人嶋にとゝまらせおはしましさふらふやらん
あはれ女子ほとかなしかりける物あらし我なん」三八ウ

しの身ならは此わらはにぐせられてなどか御むか
ひにまいらではさふらふべき今度は此わらはを
御供にていそぎのぼらせ給へなんとそかかれたる
そうづひめは見し時よりもなをはしたなくことは
つゝきもをとばしけれともたゞしはかなひ事

おもかひたる物かなわれ心にまかせたる身なら
はなにしにかかくうきしまに一人殘りとゝまつて
うき目を見んもおもふべきに今度は此わらは
お供にていそきのぼれなんとかいたる叉のはかな
さよひめはことしは十二か三になるとこそ思へ
とのたまへはわらはも一ぢやうの御年をはしり
まいらせ候はすと申すそうづさてこのふみの所々」三九オ

のもじきえのしたるはいかにとのたまへはわらは
それはさそ御わたり候らんあの御ふみあそはすと
て一ふであそはしてはうつふしひとふてあそはし
てはうつふしなのめならすむつからせおはしまし
候ひつる扨は御なみだのかからせ給ひたるらん
にてそ候らんと申せはそうづもなみだにむせ
はれけりそうづのたまひけるはわれ此嶋に流され
てのちは月日のかはりゆくをもしらすはなさき
もみちてちるをもつてはる秋をしりあつきを以て
なつをわきまへさむきをもつてふゆをわきまふび

やく月こく月のかはり行を以て一月晦日
とさたむしづかにゆびをおつてかそふれははやみ」三九ウ
とせになるとこそ思へ我西八條へ出し時おさな
きものともかわれも參らんわれもゆかんとしたひ
しをやがて歸らんするとてとゝめおきたりし
事のたゞいまのやうにおほゆるそやわかは其時七
になりしかはことしは九にこそならむす
らめおやとなり子となりふうふのちぎりをこむる
と此世ひとつの事ならすされはそれらかさやう
になりけるをばなとゆめまぼろしにもみえさりけ
るそや人のおやの心はやみにあらねとも子を思ふ
道にまよふとは今こそ思ひしられけれはそれ
らをみんとおもふゆへにとそ今一度みやこへも
上りたかりつれたゞしひめか事ばかり成それ」四〇オ
もいきたる身はともかうもしてこそすごさんすら
めすすりすみふてもなけれは返事には及はぬなり
嶋のありさま我か事をはなんちか見るやうにか
たるべしまた人しもこそおほきになんぢか是まて
はる〳〵とたつねくたりたる心さしの程こそ返々
もしんへうなれいつまてかなからへてなんぢに
うきめを見すべきとてをのつからのしよくじを
とゝめて一かう後世ぼだいのつとめをのみし給ひ
けるかわらは嶋にくだりてさんじうよ日と申す
にはそうづねふるがことくにて終にはかなく成
給ふわらはあとにふしまくらにふしかなしみ
けれともかいぞなきおなしくは後世のおん供仕度」四〇ウ
は候へとも都にのぼりひめ君に此由申御ぼだい
をこそとふらひまいらせ候はめとて心のゆく〳〵
なきかなしみてまつのおちばあしのかればを取
おほひもしほのけふりとたきあげてけふりすめは
こつをひろひくひにかけ又あき人のふねにびん
せんして九國の地にこそつきにけれわらは都に
のほりならにくだつてそうづのゆいこつをひめ

君に奉れはむねにあてかほにあてかなしみ給へ
とかいそなきしずがすみふても候はねは御返事に
はをよはせ給ひ候はす何事も思食おく御叟ともを
はむねのあひだにとゝめさせおはしまし候らん
今はたしやうをへたてくわうごうを送らせ給ひ候」四一オ

ともこんじやうにてあひまいらつさせ給はん事
ありかたしたゝ御ぼだいをこそとぶらひまいらつ
させ給はんすれなんと申せはひめ君さてはとて
年十三にてさまをかへならの法花寺におこなふ
てちゝの後世をそいのられけるわらはもそうづの
ゆいこつくびにかけ高野へのほりおくのゐんに
おさめつゝれんけだににて法師になり山々寺々
しゆぎやうしてしうの後世をそいのりけるかやう
に人の思ひのつもりける平家の末こそおそろし
けれ

付辻風

同き五月十二日のむまのこくはかんに都には辻」四一ウ

風をひたゝしうふいて人屋おほくてんだうすかせ
は中の御門京ごくよりをこつてひつじさるを
さしてふきけるかむね門ひら門ふきぬき〳〵四五
ちやう十ちやう行けたはしらなげしなんどは
こくうにあかりひはだふきいたのたくひわふゆの
このはのかせにみたるゝかことししやおくのやぶ
れけんするのみならす人もあまたいのちをうしな
ひぎう馬六ちくのたくひ數をつくしてうちころさ
るこれたゝ事にあらずとてやがて神祇くわん
にて御うらないあり天下のさはきとうらない申す
たゞし朝家の御大事にはあらすろくをおもん
する大臣百日のうちのつゝしみ別ては兵がくさう」四二オ

ぞくしてききんゑきれいのうれへとそ神祇く
わんをんやうらともにうらなひ申ける

いしもんたう

そのころ小松のない大臣重盛こう熊野さんけいと
そ聞えし本宮せうじやうでんの御まへにつやして

夜もすからけいひやくし給ひけるはちゝ入道相國
のていを見候にあくぎやくぶたうにしてやゝも
すれはきみをなやまし奉る重盛其ちやうしとし
てしきりにいさめをいたすといへとも身ふせう
のあひだかれもつてふくいうせずそのうんめいを
はかるに一ごのゑいくわなをあやうしなまし
いに重盛其時にいたつて世にふちんせん事」四二ウ

あへてりやうしんかうしのほうにあらすしゑう
れんぞくしんをあらはしなをあけん事かたしし
かじなをのかれ身をしりそひてこんじやうのめい
ばうをなげすてらいせのほたいをもとめんには
たゝしほんぶはくぢぜひにまどへるかゆへに
心さしをほしいまゝに世をねがはくはごんげん
こんがうとうじ子そんはんゑいたえすしてつか
へてててうていにましはるへくむは父入道相國の
あくしんをやはらけて天下のあんせんを見しめ
給へもし又ゑいゆういちこをかきつてこうこんは

ぢにをよふべくんばまづ重盛がうんめいをつゝめ
て來世のくりんをたすけ給へりやうかのぐぐわん」四三オ

ひとへにめうじよを仰とかんたんをくだひてい
のり申されけれとも人是をしり奉らす有夜おとゝ
の御身よりとうろのやうなるもの出てばつときへ
けるを見所の者とも見とも見とかめ奉りけれともおそれ
てこれを申さすおとゝ御けかうの時いわたかは
おわたらせけるにちやくしごんのすけ少將これ
もりなつの事なりければぢやうゑのしたにうす
いろのきぬをきて何となふかはの水にたはふれ
給ひけるかきぬのぬれてじやうゑにうつりたるか
ひとへに色のことしちくごのかみさだよし此由
おみとかめ奉てあのきんたちのめされて候御じや
うゑの何とやらんいまはしうみえさせ給ひて候い」四三ウ

そきめしかへらるへうもや候らんと申たりけれ
はおとゝ重盛かしよぐはんはやじやうじゆしぬとや

おもはれけんあへてそのじやうゑあらたむへから
すとて別ていわたかはよりよろこびのほうへいを
本宮へこそ立られけれ人あやしみ奉りけれともあ
へてその心をえすされはにや此きんだちほどなく
まことのいろになられけるこそふしきなれおとゞ
御げかうの後いくばくの日數をへずして御やまい
つき給ひしかはごんげんはや御なうじうあるに
こそとてをのつかられうぢをもくはへられすきた
うをもいたされすそのころ入道相國はふく原に
おはしけるか此よしを聞給ひてまつゑつ中」四四オ

せんじもりとしを以て小松殿への給ひつるはされ
けるはしよらう日々にそひて大事なるべきよし
其聞え有此程そうてうよりすぐれたるめいいほん
朝にわたりたるよしをきく折節これをよろこび
とすいそぎかれめししやうじていれうをくはへし
め給へとなりおとゞ世にもくるしけにてふされた
りけるかやう〳〵にたすけをこされもりとしを御

そはちかふめしての給ひけるはまついれうの事
かしこまつて承り候ぬと申べしたゞしなんぢ
もきけむかしゑんきのせいたいはさはかんのけん
わうにてわたらせ給ひたりしかともいこくのさう
人をわうじやうのうちへいれられたりし事をは」四四ウ

けんわうの御あやまり又は我朝のはちとこそ申
つたへたれいはゆる重盛ほどのほん人か此有さま
にていこくのいしにまみえむ事いかてか朝
についてそのはゝかりのあひ殘らさるべきむかし
かんのこうそは三じやくのけんをひつさげて天下
おおさめ給ひしにくわいなんのけいふをうちし
時りうしにあたつてきずをかうむるきさきりよ
太こうりやうゐをめして是をみせしむるにゐの
いはくこのきすぢしつべしたゞし十五こんのきん
をたふでぢせんとなりかんそののたまはくわれむ
かしまぼりのつよかりし時はおほくの矢にあた
りしかともしする事をえすいまはうんすて」四五オ

につきぬめいはすなはち天にありへんしやくと
いふともなんのせんかあらんしかれはまたかねを
おしむにたりとて五十こんのきんをいしに
たふで終にぢせらすせんげんみゝにありいま以
てこれをかんじんす重盛いやしくもきうけいに
つらなりさんたいにのぼるそのうんめいをはかる
にもつてて心にありなんぞてんしんをさつせず
してゐれうをおろかにいたはしうせんやしよらう
もしぢやうごうたらはれうちをくはふともゑきな
からんか所らう又ひごうたらばれうぢをくはへす
ともたすかるむねをうへしたゝちやうごうのやま
いをぢするになをたえさるむね明らけしかのぎ」四五ウ

ばがいじゆつをよはすしてだいかくせそんめつ
どをばつだいがのほとりにとなへ給ふこれひとへ
にぢやうごうのやまひをぢするになをいやさざる
ことはりをしめさんかためなりきぢするは佛たい
れうするはきばなりしかるに重盛か身ぶつたい

にあらずめいゐ又きばに及へからすちやうこうな
をいれうにかゝはるべくはあにしやくそん入めつ
有らんや又四ふのしよをかがみて百れうにちやう
ずといふともいかてかうだいのゑ身をくれうせん
たとひ五きやうのせつはつまびらかにしてしゆび
やうをいやすといふともあにせんぜのごうびやう
をぢせんやもしいじゆつによつてそんめいたら」四六オ

は本てうのゐだうなきににたりゐじゆつ又かう
けんなくんはたいめんなんのゑきかあらん就中
本朝ていしんのけさうをもつてい朝ふうのらいか
くにまみゑん事かつうは國のはぢかつうは道
のれうちなりたとひ重盛めいはばうずといふとも
いかでか國のはちをおもふ心を存ぜざらん此由を
申せとこそのたまひけれ盛としなく〳〵ふくはら
に歸り參つて此よしを申ければ入道相國いそ
ぎしやうらくし給ひてこれ程に國のはちを思ふ
大臣はいしやうこにいまだ聞すまして末代にある

へしともおほえす日本にさうおうせぬ大臣なれ
はいかさま今度うせなんすとて大きにさわき給ひ」四六ウ

けり同き七月廿八日小松殿出家し給ひぬほうみ
やうはせうくうとこそ付給へ同き八月一日りん
じうしやうねんにぢうしてうせ給へりとし四十三
世はさかりとこそみえつるにあはれなりし事
ともなりさしも入道相國のよこかみをやられつる
おも此おとゞのやう〳〵になだめ宣ひつれはこそ
世もおたしかりしかいまよりのち天下にいかば
かりの事か出こんすらんとて他家の人々もさは
かれけりいまは御おとゝ右大將むねもりのきやう
のかた様の人ばかりこそ御世はさだめて大將殿へそ
まいらんすらんどてない〳〵よろこびあへるもおほ
かりけり人のおやの子を思ふならひおろかなるか」四七オ

さきだつたにもをんあいのみちはかなしきそかし
いはんやこのおとゞはたうけのとうりやうたうせ
いのけん人にておはしけれはいゑのすいびといひ
をんあいのわかれといひかなしんでもなをあまり
ありをよそ此おとゝはこゝろにちうを存ぢして
ことはにとくをかね給へりされば世にはりやう
しんをうしなへる叟をなげきいゑには又ぶりやく
のすたれぬる事をかなしめり

むもん

すへてこのおとゝは天せいふしぎの人にておはし
けれは行末の叟おもかねてさとりたまひたりけるに
やさんぬる四月七日の夜のゆめに見給ひたり」四七ウ

ける事こそふしぎなれたとへは有はまぢをはる
〳〵とあゆみ行給ふほどにかたはらに大き
なるとりゐのありけるをおとゝゆめのうちにあれ
はいかなる御とりゐやらんととい給へは伊豆の三
嶋の大明神の御とりゐなりと申すとりゐのわき
に人いく千万という數もしらすならびいてたゝ
今きつたるとおほしき入道のくびをもてあつかふ

おとゝあれはいかにととい給へはこれは平家太政
の入道殿あまりにあくぎやうてうくわせるに
依てたう社大明神のめしとらせ給ひて流人さきの
右兵衛のごんのすけよりともに給はすなりと申た
とおぼへてゆめさめぬたうけは保元平治よりこの」四八オ

かた度々のてうてきをたいらけけんじやう身に
あまりていそ太政大臣に至り一ぞくのせうしん六十
よ人廿よ年のこのかたはたのしみさかへ申はか
りなしされとも入道のあくぎやうによつてたうけ
のうんめいすへになるにこそとおほしめして
なみたにむせばせ給ふ折節つまどをほと〳〵と
うちたゝくおとゞ何者そあれきけとの給へはせの
をの太郎かねやすが參つて候今夜あまりにふし
ぎのゆめを見候程に申あげんがために夜のあく
るかをそくおほえて參て候御前の人をのけられ候
へと申けれは大臣人をはるかにのけてたいめん
あるこんや見たりけるゆめを一とにかたり申」四八ウ

たりけれはおとゞの御らんせられけるゆめに少
もたかはずとてこそせのをの太郎かねやすは神
にもとうしたるものにてありけりとおとゝもかん
じ給ひけり其あしたちやくしごんのすけ少將こ
れもりゐんへ參らんとて出立れけるをおとゝよび
奉つて人のおやのかやうの事申はおこかまし
けれとも御へんは人の子にはすくれてみえ給へり
いかにさだよし少將にさけすゝめよとのたまへは
ちくごのかみさだよし御しやくに參るおとゞ此さ
かづきをまつこそ申たう候へともおやにて候へは
とて三度の後少將にささる少將又三度うけ給ふ
時いかにさたよし少將にひきで物せよとの給へ」四九オ

はかしこまり承てふしきのふくろに入たる御太刀
おもちて參りたり少將あつはれこれは家につた
はれるこからすという太刀やらんとうれしう思て
見給ふところにさはなくして大臣さうのときそのの
いゑをつぐぬしのはいて供すなるむもんといへる

太刀なりけり少將以外きそくかわりてみえ給へは
おとゝそれはさだよしかとがにはあらすひころは
入道相國いかにも成給は重盛はいて供せんとこそ
おもひしかとも今は重盛入道殿にさき立奉らん
すれば扨そこえわたし奉るなりあいかまへて重盛
かなからんのち人々ににくまれ給ふなさふらいと
もを不便にし給ふべしかやうに申すやさいご」四九ウ

のことはにて候はんすらんとてはら〳〵となき給へ
ば少將もなかれけり御前に候ひけるさふらひとも
もみななみだをも流しけるされともたゞ何となき
かねごとゝこそ思ひしにおとゝ程なふこうじ給へ
は扨ははや御りんじうおもかねてよりさとり給へ
る人にこそと思ふにもいよ〳〵なみだそすすみける

とうろ

此おとゝはたうらいのふちんをなげいて六八ぐぜ
いのくはんになそらいてひがし山のふもとに四十
八けんにしやうじやをたて一けんに一つゝ四

十八のとうろをかけられたりけれは九ほんのうて
な目のまへにかかやきくわうやうらんけいをみ」五〇オ

がいてじやうどのみなりにのそむかとうたかわ
るまい月十四十五日に大ねんぶつありしかたう
け他家の人々の御もとよりわかうさかんなるにう
ばうをしやうじて一けんに六人つゝ四十八けんに
二百八十八人じしゆと定而かのりやう日かあひだ
は一心せうみやうのこゑたいてんなしまことにらい
かうゐんぜうのひぐわんも此ところにやうがう
出たれせつしゆふしやのひかりもかのおとゞをて
らし給ふらんとぞみえし十五日の日中を
けつぐはんとしておとゝ西にむかひ手をあはせ九
ほんあんやうけいしゆみたぜんぜい三かい六道の
しゆじやうをあまねくさいとし給へとゑかうほつ」五〇ウ

くわんありけれは見る人じひの心をおこしきく者
かんるいをそもよほしけるそれよりして此おとゞ

をはとうろの大臣とそ申ける

付かねわたし

又此おとゞはめつざいしやうせん御心ざしふかく
おはしけれは我朝にはいかなる大せんこんをし
をいたりとも子そんあいついてとぶらはん事有
かたし他國にいかなるぜんごんをもしてご
しやうをとふらはれはやとて安元のころほひちん
ぜいのはかたよりめうでんといふせんどうをめし
上せ人をはるかにのけてたいめんあるこかねを三
千五百両めしよせてなんぢは大しやうぢきのもの」五一オ

にてあんなれは五百両をはなんちにたふ三千両
をはそう朝へわたし千両をいわう山のそうにひき
二千両をはみかどへまいらせて田代をゐわう山へ
申よせて我後世とふらはせよとそ宣ひけるめう
でんかしこまつてうけたまはりやがてちんせいの
はかたに歸りもろこしふねのともつなをとく程
こそ有けれはんりのゑんらうをしのぎつゝ大そう

國にそつきにけるいわう山の長老佛せうぜんじ
とくくわうにあい奉つて此由申たりけれは長老
大きにずいきかんたんして千両をいわう山のそう
にひき二千両をはみかどへまいらせて小松殿の
申されけるやうをつふさにそうもんせられけれ」五一ウ

はみかど大きにかんじおほしめして五百ちやうの
田代をながくいわうさんへそよせられけるされば
日本の大臣平のあつそん重盛こうのごしやうぜん
しよといのる事いまにたえずとぞ承入道相國こ
まつ殿にはをくれ給ひぬよろつこゝろぼそうや思
はれけんふくわらへはせくだりへいもんしてそ
おはしける

法印もんだう

同き十一月七日の夜のいぬのこくはかんに大
地おひたゝしううごひてやゝひさしをんやうのか
みあへのやすちかいそぎ内裏にはせさんじて
そうもんしけるはたゞいまの大地しんせんもんの」五二オ

さす所そのつゝしみかるからすたう道三きやう
のなかにこんききやうのせつを見候に年をゑ
ては年を出す月をえては月を出ず日をえて
は日を出ず以外に火きうに候とてはら〳〵となき
ければでんそうの人々も色をうしなひきみもゑい
りよをおとろかさせおはしますわかきくぎやう殿
上人はけしからぬやすちかかたゞ今のなきやうか
な何事のあるべきそやとそわらひあはれけるされ
ども此やすちかはせいめい五代のあとをうけてん
もんはゑんげんをきわめすい條たな心をさすがこ
とし一しもたかはさりしかば人さすの神子
とそ申けるさればうこんのばゝにしていかつち」五二ウ

のおちかゝりたりしにもらいくわのためにかり
きぬのそではやけながら其身はつゝかもなかりけ
りしやうこにも末代にもありかたかりしやすちか
なり入道相國はふく原におはしけるが同き十四
日數千ぎの軍兵をたなひてしやうらくせらるとき
こえしかは京中の上下あはや又何事か出こんす
らんとてさはきまとへり又何者か申いだしたり
けん入道朝家をうらみ奉らるへしと聞えしかは天
下の人々しくわいのことしくはんばく殿もな
い〳〵きこしめさるるむねもやありけんいそき御
さんたいあつて今度相國ぜん門じゆらくの事は
ひとへにもとふさをかたぶくべきけつかうと承」五三オ

り候へはいかなるうきめにかあひ候はんすらんと
申させ給ひければしゆしやうそこにうき目
お見られんはたゞわか見るにてこそあれとてれう
かんに御なみだせきあへさせ給はすまことに天下
の御まつりことは君としんとの御はからひなるに
こはいかにしつる事そや天照大神春日大明神
の神りよの程もはかりかたし同き十五日入道
朝家をうらみ奉らるべき事ひつちやうと聞えし
かは法皇こせうなこん入道しんせいのしそくしや
うけん法印をおつかいにて入道相國のもとへ仰つ

かわされけるはきんねんてうていしづかならすし
て人の心もと、のをらす世間もいまだらつきよせ」五三ウ

す成行事そうべつにつけてなげきおほしめせ
ともそこにあれは万事はたのみおほしめすに
これていがう〳〵なるさまにてたとひ朝家をしつ
むるまての事こそなからめあまつさへ是をうら
むべしときこしめすはいかに法印西八條におはし
てげんだゆふの判官すゑさだを以てちよくちやう
のおもむきいひ入れつゝ御返事をまちけれともあ
したよりゆふべに及まて入道ぶいん成けれは法印
さればこそとむやくにていそき歸り參るべきよし
をいひ入れつゝ出られけれは入道いかゞ思はれけん
あの法印よべとてよびかへさせ出合たいめんし
給ひてやゝほうゐんの御坊じやうかいか申ところ」五四オ

はひか事かだいふみまかり過候へは入道ずいぶん
ひるいおおさへてこそまかりすぎ候へそれに入道

けふあすをもしらぬ老のなみにのぞんでかゝるう
きめにあひ候心中をはいかばかりとかおもひ
給ふ御へんの心にもすいさつし候へ保元以後は
らんげきうちつゝいて君安き御こゝろも渡らせ給
はさりしを入道度々のてうてきをたいらけて
げきりんをやすめまいらせ候き其時も入道はたゝ
大かたをとりおこなひしばかりなりまさしうだ
いふこそ手をおろし身をくだひたるものにて候へ
されははんじにいつて一せいをうる事も度々
なり其外りんじの御大事朝せきのせいむだいふ」五四ウ

程のこうしんは有かたふこそ候らめかのたうの大
そうはきてうにをくれてかなしみのあまりにむ
かしのいんそうはりやうひつをゆめのうちにえ今
のちんはけんしんをさめの後にうしなふといふひ
のもんをかいてみつからべうにたてゝだにこそか
なしみ給ひけんなれ我朝にもまのあたり見候ひし
叟そかしあきよりのみんぶきやうかせいきよした

りしをはこゐんことに御なけき有て八幡のぎやう
がうをゑんゐんせられてきよゆうなかりきすべて
しんかのそつする事をば代々の君もなげきおぼ
しめす御事にてこそ候へさればおやよりもなつ
かしく子よりもむつましきをは君としんとの御中」五五オ

とは申つたへたりそれにだいふかちういんに
八幡へ御幸なりあまつさへほうぢうし殿にして御
ゆうあり御なげきの色一じもこれをみずたとひ
だいふか忠をこそおほしめしわすれさせ給ひ候とも
入道がなげきをは一度はなどかあはれませ給はざ
るべきたとひ入道かなけきをこそあはれませ給は
ずともたいふがちうをはいかてかおほしめしすて
させ給ふべきに父子ともにゑいりよにそむき
ぬる事今におゐて面目をうしなふ候まづこれ一
次にゑちぜんの國をは子々孫〳〵までも御へん
がいあるましきよしの御ちよくやくあつてだいふ
給りたりしをこうせいの後いくはくの日數をへ」五五ウ

すしてやがてめしかへして他人にたぶ事これ
なんのくわたいそやこれひとつ次に中納言けつ
の候ひし時こんゑの二位の中將殿しよまう候ひ
しを入道すいぶん取申候ひしかとも終に御
せういんなくてくはんばくのそくをなされし叟はい
かにたとひ入道ひきよを申すとも一度はなとか御
もちひなかるべきいはんやゐかいといひけちやく
といひりうん左右なき事なるをひきちかへられ
し事ゐこんのしだい也是一つつきに俊寛成ち
か以下のむようのいたづら者ひんがし山し丶のたに
にじやうくわくをかまへてたうけをかたぶけんと
仕り候ひし事まつたく是わたくしのけいりやく」五六オ

にあらすた丶君御きよやうあるに依てなりいま
めかしき申事にて候へども此一門をはいかて
か七代までも思食すてさせ給ふべきにそれに入道
しつしゆんにをよんてよめいいくはくならん一ど
のうちにだにもやゝもすればほろぼさるべきよし

の御はからひありいはんやしそんあいつゐてて
かにめしつかへん事ありかたしをよそ老て子
をうしなふはこぼくのゑだなきかことしだいふ
にをくれ候ひぬるをもつてたうけのうんめいはは
や思ひしられてこそ候へ此世いまいくばくならぬ
にさのみ心をついやしても何にかはし候へきさ
れはいかてもありなんとおもひなつてこそ候へと」五六ウ

てかつうはふくりうしかつうはらくるいしてくど
かれけるにそ法印おそろしくもあはれにてあせ水
にこそなられけれほうゐんわか身もきんじゆの
じんなり其外しゝのたにして人々のきせられし叉
ともおもまさしう見きかれし物なれはわか身も
その人數とてたゞいまめしやこめられんすらんとれ
うのひげをなでとらのおゝふむ心ちしては思はれ
けれとも法印もさるおそろしき人にておはしけれ
はすこしもさはがずまことに度々の御奉公あさから
す候しかりとは申せともくわんゐといひほうろ

くといひ御身にとつては悉まんぞくすこうのばく
太なる事をはきみも御かんなるにてこそ候へつ」五七オ

ぎにきんしんことを見たり君御きよやうありと
いふ事はいかさまばうしんのけうがいとおほえ
候をよそみゝをしんして目をうたかふはぞくのつ
ねのへいなりせう人のふげんをしんして朝をん
の池にことなるにみたりかはしう君をなみし
まいらつさせ給はん御事神りよの程もはかり
かたしそれ天心はさう〳〵としてはかりかたし
といへともゑいりよさだめてそのぎにてそ候らんし
もとしてかみにさかふあにじんしんのれいたらん
やせんする所此むねをこそひろう仕り候はめとて
出られけれは平家のさふらひども老少なみゐたり
けるかあなおそろしあれほどに入道相國のいかり」五七ウ

給ふに少もさはかす返事うちしてたゝれけるゆ
ゆしさよと法印をほめぬ人こそなかりけれ

大臣流ざい

法印院の御所に歸り參つて此由を一とにそうし
申されたりけれは法皇も道りしごくしてやおほし
めされけん仰出さるるむねもなし同き十六日入道
相國おもひたち給へる事なれはくはんばく殿を
始奉て四十三人のくはんしよくをとゝめておつこ
め奉らる中にもくはんばく殿をは太さいのそつ
にうつしてちくしへ流し奉らるべきよし聞えし
かばかゝらん世にはとてもかくてもありなんとて
鳥羽のへんふるかわといふところにて御出家有今」五八オ

年は三十五にならせおはします禮儀よくしろし
めされてくもりなきかかみにてわたらせ給ひつるも
のおとて世のおしみ奉る叓ひとへに月日をうし
なひ奉るかことしはいしよへおもむく人のみち
にて出家したりしをはやくそくの國へはつかはさ
ぬ事なれははじめはひうがの國ときこえしか後
にははいしよをかへて備前の國うのへんいばさま
という所におき奉る大臣るざいのれいは左だい
じん曾我のあかゑ右大臣とよなり左大臣うをな右
大ぢんすか原かたしけなくも北野の天神の御事
なり左大じんみなもとのかうめいこうない大しん
藤原のいしうこうに至るまて其れい六人されとも」五八ウ

せつしやうくわんばくるざいのれいは是はじめと
そうけたまはる六條のせつしやうとのの御子こん
ゑの二位の中將殿は入道相國のむこにておはしま
しけれは大臣くはんばくを一度にせさせ奉るふ
げんじどのの御叓なりむかしゑんいうゐんの御う
天ろく三年十一月一日一條のせつしやうけん
とくこうかくれさせ給ひしかは御おとゝほりかわ
のくはんばくちうぎこう其時はしう二位の中納言
にてまし〳〵きそのおんおとゝほうこうゐんの大
入道殿かねいゑこうそのときは大納言の右大將に
ておはしましけれはちうぎこうは御おとゝにこえ
られさせ給ひたりしかいま又こへ返してない」五九オ

大臣正二位してないらんのせんじかうむらせ給
ひしをこそ人じほくをおとろかしたる御せう
じんとは申しかこれはそれにもてうくわせりひ
三ぎ二位の中將より大中納言をへずして大臣せ
つしやうに成事これはじめとぞうけ給はるしやう
けい宰相大げき太いうのしに至るまてみなあきれ
たるやうにてそ候けるめうをん院の太政のおとゞ
をはつかさをとゝめてあつまのかたへをつくたし
奉る是はさんぬる保元に父あく左ふの御ゑんさ
によつて兄弟四人流ざいせられ給ひしに右大將
かねながひだりの宰相の中將たかながはん長ぜん
じ三人はきらくをまたずしてはいしよにてうせ」五九ウ

られぬこれはとさのはたにして九かへりのせい
ざうを送り長くはん二年八月にめしかへされ
次の年本位にふくしにん安元年十月に
前の中納言よりこん大納言にあかられける折節
大納言あかざりけれは數のほかにそかはれける大
なごんの六人並叟もこれはじめとぞうけ給はる又
前の中納言より大納言に成事は彼山しなの大臣
みもりこう宇治の大納言りう房のきやうの外は承
及すをよそこのおとゝはくはんげんのみちにた
つしさいげいすくれておはしけれは君もしんも
おもんし奉てしだいのせうじんとゝこほらす
太政大臣まてもたやすくへあかり給ふ程の人のい」六〇オ

かなるつみのふくひにか又るざいせられ給ふらん
保元のむかしはなんかいのとしうにうつされぢ
せうの今は又とうくはんおはりの國とかやつみな
くしてはい所の月を見んといふ事をはもと
よりこゝろ有程の人のこのむことなれはをとどあ
へて事ともし給はすかのたうのたいしひんか
くはくらく天きうかうきんのしばにさせんせら
れてしんやうのゑのほとりにやすらひ給ひし其い
にしへを思ひやりなるみがたしほぢはるかにゑん
けんしてうら風にうそぶきつねはかう月を

のそみびわをたんじわかをゑいじてなをさりが
てらに月日おをくり給ひけりある時おとゝたう」六〇ウ

國だい三の社あつ田の大明神にさんけいあつてび
わひきらうゑいし給ひけれとも所もとよりむちの
しよくなればあはれをしれる者なしゆうらうそん
女ぎよ人やそうかうべをうなたれみゝをそはたつ
といへともさらにせいだくをわかちりよりつを
しれるものなしされともこはきんをたんぜしか
はぎよりんをとりほとばしりぐこううたをはつせ
しかばりやうちんうこきうこくもののたえなる
きよくをきはむるにはしぜんにかんをもよほ
すことはりにこたえてまんざなみだを流し諸人き
ゐのおもひをなすはるかに夜ろうしんかうにを
よんておとゝしらへひきよくをつくされけりふか」六一オ

うでうのうちには花ふんふくのきをふくみりうせ
むのきよくのあひだには月せいめいのひかりを
あらそふ又ねがはくはこんじやうせぞくのもんじ
のごうきやうげんきぎよのあやまりを以てといふ
らうゑいしつゝびわかきならし給へは神めい
かんおうにたへすしてほうでん大きにしんどう
す平家のあくぎやうなかりせはいかてかいまかゝる
ずいさうをおかむべきとておとゞかんるいをぞ流
されける大くらのきやう右京のだいぶけんいよの
かみたかしなのやすつねさんぎくわうだいこくう
のたいぶけん右兵衛のかみ藤原のみつよし藏人の
少將けん中宮のごんの大しん在原のもとちかさん」六一ウ

くはんともにとゝめらるあぜちの大納言すけか
た藏人のごんの少將けんさぬきのかみ源のすけ時
は二つのくはんをとゝめらるあぜちの大納言すけか
たまこ右少將まさかたをは夜のほどに都のうちを
おい出し奉るべしとてしやうけいにはとう大納言
さね國しきじにはかさせの判官のりさだ參りむ
かつて此由申されたりけれは大納言とる物もとり

あへ給はす三がいひろしといへども五しやくの身
おき所なしいつしやう程なしといへとも一日の日
くらしかたしとて夜のうちに九重のうちをまき
れ出八重たつ雲井のよそにそおもむかれかるかの
大ゑ山やいく野のみちにかかつて丹波の國むら」六二オ

くもという所にそしはしはやすらい給しかはい所
をかへてしなのゝ國こうとこそきこえけれ

行たかのさた

あせちの大納言すけかたはくわんげんのみちに
たつしさいげいすくれておはしけれは法皇しよ
じないげなふ仰あわせられけるに依て入道かやう
にあたをむすはれけるとそ聞えし又さきのくはん
はくの松殿のさふらひにかうたいう判官とをなり
というものあり是も平家にふくわいなりけれは
六波羅よりからめとらるへしと聞えし程に子
そくがう左衛門のせう家成うちぐしてみなみをさ
してをち行けるか稲荷山にうちあかり馬より」六二ウ

おりておや子いひあはせけるはそも〳〵是よりどう
國へおちくだり流人さきの右兵衛のすけ殿をたの
まばやとはをもへともそれもたうじはちよくかん
の人にて身一つたにもかなひかたふおはすなり其
上日本國に平家のしやうゑんならぬところや有
又年らいすみなれたる所を人に見せんもはち
がまし六波羅よりつかいあらはたちに火かけ
はらかき切て死なんにはしかしとてか原坂の宿所
へとつてかへすあんのごとく源だゆうの判官すへ
さだつの判官もりすみつがうそのせい三百よきか
わらざかのしゆくしよへおしよせてときをとつと
そ作りけるがうたいうの判官ゑんよたち出大をん」六三オ

じやうをあげて六波羅ては此やうを申させ給へ
とてたちにひかけやきあげ父子ともにはらかき
きつてほのをの中にてやけしにそも〳〵上下かやう
におおくほろひそんずる事をいかにというに
さきの大殿の御子三位の中將殿とたうしくはんば

くにならせ給ひけり二位の中將殿と中納言御さう
ろんのゆへとそ聞えしさらはくはんばくとの御一所
こそいかなる御目にもあわせ給ふべきに四十よ
人の人々の事にあふべきやは其年さぬきの院
の御ついかうあつてしゆとく天わうとかうし宇治
のあくさふのぞうくはんそういおこなわれたりし
かとも世間はなをにが〳〵しうそみえしをよそ」六三ウ

たれにもかきるましかんなり入道相國のこゝろに
てんま入かはつてよろつはらをすへかね給ふとき
こえしかは京中の上下いかなるうき目にかあ
はんすらんとておそれをののくそのころ又さきの
左少べん行高と申しはこ中山の中納言あ
き時のきやうのちやうなんなり二條のゐんの御う
にはべんぐわんにかつてゆゝしかりしかとも
この十よ年はくはんおもとゝめられてかとうの
ころもがへにも及すてんがのさんもたえ〳〵なり
有かなきかのていにておはしけるを入道相國し

しやをもつてきつて立より給へ申あわすべき叟
あつて宣ひつかわされたりければこの十よ年」六四オ

はくわんをもやめられて何事にもましはらざりつ
る物をいかさまざんげんする人のあるにこそと
て大きにおそれさわかれけり北のかた以下のねう
ばうたちなきかなしみ給ふ事なのめならす西
八條よりつかいしきなみにたちけれは行たか
出むかひてこそともかうもならめとて人にくるま
かりて出られたれは思ふにはにず入道やがて出
あいたいめんして御へんの父こ中納言殿は入道大
せうじを申あわせし人なりそのゆかりてをは
すれはおろかにおもひ奉らず年來ろうきよの事
もいたはしう存すれとも法皇の御せいむのうへは
ちからをよはすいまは出仕し給へくはんその叟」六四ウ

申さた仕らんさらはとう歸られよとて入給ひぬゆ
きたか歸られけれは宿所にはねうばうたち死した

る人のいき歸りたる心ちしてみなよろこひなきを
そせられける其後げん太いうの判官すゑさだを以
て知行し給ふべきしやうゑんじやうともあまた
なしつかはししゆつしのれうにとてうしくるま
さうしきうしかいきよけにさたしつかわさるされ
たるらんとて百びき百りやうによねをつんてそ參ら
れける行高手のまへあしのふみともおぼへ給す
こはゆめかやゆめかとぞおとろかれける同き十七
日五位のしちうにふせられて左せうへんになり
かへらる今年五十一いまさらわかやき給ひけり」六五オ

付法皇の流され

おなじき廿日またあした平家の兵ともほうぢう寺
殿の四めんをうちかこみ奉るをよそそのせい二三
千きはあるらんとそみえし一とせのふよりの
きやうが三條殿をなしまいらせたるやうに御所
にも火をかけねうばうたちをもみなやきころすべ
しなんと聞えしかはつぼねの女はうめのわらは
ものをだにもうちかづかずかちはたしにてそに
げ出ける前の右大將むねもりのきやう御くるまを
よせてとう〳〵と申されければ法皇こはいかにな
しまいらせんと仕るそしゆしやうおさなふまし
ませばせいむにこうじゆするはかりなりそれも」六五ウ

さあるましくはぢこん以後さらてこそ有べきに
いかてうきめを見せまいらせんとは仕るそいかさ
ま是は俊寛なりちかなんとかやうにとをき國はる
かのしまへもや流しうしなはんするにこそとそ仰
けるむねもりのきやうなみだをはら〳〵とながいて
そのぎては候はすしばらく世をしづめむほど鳥羽の
北殿へ御幸をなしまいらせよと父のせんもん申候
と申されければはさらはむねもりやがて御供に
候へと仰けれとも入道のきそくにおそれをなして
さんぜられず法皇あはれこれにつけてもあにの
だいふには事の外におとりたる物かな一とせ
もかゝる御目にあふへかりしをだいふか身にかへ」六六オ

てせいしとゝめてこそ今日までも御心やすかりつ
れいまはいさむるものなきあひだかやうにふる
まうにこそあんなれ行末とてもたのもしうもお
ほしめさすとて御なみだせきあへさせ給はすさて
御くるまにめされけりくぎやう殿上人一人もく
ぶせられすたゞいやしきほくめんの下らうさては
こんぎやうという御りきしやはかりなり御くるま
へは御きやう箱ばかりぞいれられたる御くるま
ぞへにはあまぜ一人參られけり此あまぜと申は
法皇の御ちの人きいの二位の叓也七條を西へしゆ
しやかをみなみへ御幸なし奉るこゝろなきあやし
のしづのおしつのめに至るまてあわや法皇の流」六六ウ

されさせおはしますそやとてなみだを流し袖をぬ
らさぬはなかりけりさんぬる七日の夜の大地しん
はかゝるへかりけるせんべうにて十六らくのそこま
てとこたえけんらう地神のおとろきさはき給ふ
らんもことはりなれとぞ人申けるさて鳥羽殿へ

御幸成て御前に人一人も候はざりけるに大せん
のたいぶのふなりがたゝ一人何としてかまきれ
入たりけん御ぜんちかふ候けるをめして我はゆふ
さりうしなわれなんすと思食御ぎやうずいをめさ
ばやとおほしめすはいかゞせんと仰けれはのぶなり
は今朝よりきもたましゐも身にそはすあきれ
たるさまにて候ひけるか此おほせうけ給はるかた」六七オ

じけなさにかりきぬにたまだすきあけかま
に水くみ入御ぜんのこしばかきこぼちおほゆ
かのつかはしらわりなんどしてかたのごとくの御
ゆしいたゐてまいらせけり又じやうけん法印入道
相國の西八條のていにおはして今朝より法皇の
鳥羽殿へ御幸成て候なるに御ぜんに人一人も候
はぬよし承てまことにあさましうおほえ候なにか
くるしう候べきじやうけんはかりは御ゆるされを
かうむつてまいり候はやと申されけれは入道相國
いかゞ思はれけん御坊は事あやまつましき人なり

とう〳〵とてゆるされけり法印なのめならすに
よろこびいそぎとば殿へ參りもんせんにてくるま」六七ウ

よりおり門のうちへさし入給ふにおりしも法皇は
御きやうたからかにあそばされける御こゑもこと
にすごうそ聞えさせまし〳〵けるほうゐんつつと
まいられたれはあそはされける御きやうに御な
みたのはら〳〵とかからせ給ふを見まいらせて法印
あまりのかなしさにきうたいの袖をかほにおしあ
てゝなく〳〵御せんへそまいられける御ぜんにはあ
まぜ一人候はれけるかやゝ法印御坊君はきのふの
朝法ぢう寺にてくごきこしめされて後はよべも
けさもきこしめさす夜もすから御しんもならず
御いのちもすでにあやうくこそみえさせおはしま
せとのたまへはほうゐんなみだをおさへて申され」六八オ

けるは何事もかぎりある事てこそ候へ平家世を
取て廿よ年されともあく行はうにすぎてすて

にほろび候ひなんずされば天照太神正八幡宮も君
をはいかてか見はなし參らつさせ給ふべき中
にもきみの御たのみ有日吉山わう七社一ぜうしゆ
この御ちかいあらたまらすんはかの法花八ちくに
たちかけて君をこそまもり參つさせ給ふらめしか
らはせいむは君の御はからひとなりけうとは水のあ
わときへうせしひなんずと申されければ法皇
此ことはにすこしなくさませおはします主上は
法皇の鳥羽殿へ御幸なりぬるよしきこしめしてつ
や〳〵ぐごもきこしめさす御なうとてつねは夜の」六八ウ

おとゝにのみ入せおはします御ぜんに候はせ給ふ
ねうばうたちきさいのみやをはじめまいらせてい
か成へしともおほしめさす法皇の鳥羽殿へ御幸成
てのち内裏にはりん時の御神事とてせいりやう
でんのいしばいのだんにしてまい夜伊勢太神宮
をそ御はい有けるこれはたゝ一かう法皇の御いの
りのためなり二條の院は天子に父母なしとてつね

はゐんの仰おも申かへさせおはしますさればそれ
はけいていの君にても渡らせ給はすこれはおなじ
父子の御あひだとは申ながら御ちぎりことにふ
かかりけれはよそのたもともかわきかたし

せいなんのりきう　」六九オ

百行の中にはかう行を以てさきとすめいわう
はかうを以て天下をおさむといへりされはたうけ
うは老おとろゑたるはゝをたつとみくしゆんはか
たくなゝるちゝをうやまうとみえたりかのけんわ
うせいしゆのせんきをおはせおはしますゑいりよ
の程こそめてたけれそのころ内裏より鳥羽殿へひ
そかに御しよありかゝらん世には雲井にあと
おとゝめても何にかはし候べきくはんへいの
むかしをたつね花山のいにしへをおひさんりんる
らうのぎやうじやともなりぬべきこそ候へとあそ
はされたりけれは法皇の御返事にはさなおほしめ
され候そ扨わたらせ給へはこそ一のたのみにても」六九ウ

候へあとなくおほしめしならせ給ひなん後はなんの
たのみか候べきたゝぐらうかともかうもならんや
うを御らんしはてさせ給ふへうもや候らんと
あそはされたりければ主上此御返事をれうがん
におほしあてさせ給ひていとゝ御なみだにしつま
せおはします君は舟しんは水みつよくふねをうか
べみつ又ふねをくつかへししんよく君をたもち
しん又きみをくつかへす保元平治のむかしは入道
相國君をたもち奉るといへとも安元ちせうのいま
は又君をなみし奉るししよのもんにたかはす
大宮の大相國三條のない大臣はむろの大納言中
山の中納言もうせられぬ今ふるき人とてはせいら」七〇オ

いしんはんはかり也此人々もかゝらん世には朝
につかへ身をたて大中納言をへても何にかはせん
とていまだわかふさかんなつし人の家を出世を
のかれ宰相入道せいらいは高野のきりにましはり
みんぶきやう入道しんはんは小原のしもにとも

なひ一かう後世ほたいのつとめの外は他事なし
とそ聞えしむかしもしやうざんの雲にかくれゑ
いせんの月に心をすます人もありけんなれは
これあにはくらんせいけつにして世をのかれたる
にあらすや中にもかうやのお山におはします宰相
入道せいらいは此由をつたへき、給ひてあはれ心
とふも世をはのかれたるものかなかくてきくもを」七〇ウ

なし事なれともまのあたりたちましはつて見
ましかはいかはかりか心うからまし保元平治のみ
たれをこそあさましとおもひしに今は世末に成て
か、るふしきの出來ぬるにや又いかなるうき事を
かみきかんすらんされはくもゐをにけてものぼり
ふかき山をへたてても入なはやとぞ宣ひける心あ
らん程の人のあとをと、むべき世ともみえさりけ
り同き廿三日に天だい座主かくくわいほうしん
わうしきりに御したいありしかはせん座主めい
うん大そうぢやうくはんちやくし給ふ是もたゝ一

かう平家のとり申されけるに依てなり入道相國
はくわんばく殿むこ也中宮又御むすめにて渡らせ」七一オ

給へはよろつこゝろやすふや思はれけん天下の御
まつりことをはしゆじやうの御さたたるへう候と
申おきて我身はいそきふく原へこそくだられけれ
さきの右大將むね盛のきやうさんだいあつて此由
をそうし申されたりけれは主上仰なりける
は法皇よりゆつりたふたる世ならばこそせいむを
もしろしめさめたゞしつへいにいひ合て大將は
候らへとて院にきこしめしも入させ給はすさる程
に法皇はせいなんのりきうにしてふゆもなか
ば過させ給へばあきの山のあらしのおとのみはげ
しくしてかんていの月のひかりそさやけきには
にはゆきふりつもれどもあとふみつくる人もなく」七一ウ

いけにはつゝらとぢかさねてむれゐしとりもみえ
さりけり大てうのかねのこゑいかいじのきゝを

おとろかし西山のゆきの色かうろほうののそみお
もよほす夜るしもにさむけききぬたのひゝきか
すかに御まくらにつたひあかつきこほりをきしる
くるまのをとはるかのもんせんによこたはれり
地またを過るかうしんせいばのいそかはしげなる
けしきうき世を渡るありさままても思食しられ
てあはれなり宮門をまはるばんゐの夜るひるけい
ごをつとむるもさきの世にいかなるちぎりにて
今ゑんをむすふらんとおほしめすそ忝きさるま
まには所々の御さんけいおり〳〵の御ゆうらん」七二オ

御かのめてたかりし事ともをおほしめしつゝけ
てくわいきうの御なみだおさへかたしさる程に
年くれてぢせうも四年になりにけり

平家物語巻第三終　　」七二ウ

翻刻の確認作業で吉永優真氏の教示を経た。
御礼申し上げたい。